兵庫県文化財調査報告書　第70冊

赤穂市
周世入相遺跡

平成2年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は、赤穂市周世字入相・宮田に所在する周世入相遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、県道高雄－有年横尾線道路改良工事に先立つもので、兵庫県上郡土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が昭和61年度から63年度の３次にわたって調査を実施した。なお、昭和61年度の全面調査については、㈱壺山建設に作業委託を行なった。

3．整理作業は、昭和62・63年度は兵庫県教育委員会が実施し、平成元年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

4．遺構の実測・写真撮影は調査員が行い、遺物の写真は㈲吉田カメラ商会に委託した。

5．遺物の復元・図面の作成には、高島知恵子・松本睦・出田恵子・小川美奈・斉藤海子子・早川亜紀子・平林育子・本窪田英子・吉田圭子・和田寿佐子の助力を得た。

6．土器胎土の化学分析及び土器付着の赤色顔料の化学分析については、安田博幸氏（武庫川女子大学薬学部教授）に依頼し、玉稿を頂いた。また、調査に参加頂き、地理学的立場から種々の有益な助言をいただいた高橋　学氏（立命館大学非常勤講師）からも玉稿を頂いた。

7．石器については後藤博弥氏（神戸大学教養部）に、肉眼及び顕微鏡観察による石材鑑定を依頼し、畝状遺構出土の種子の鑑定については、南木睦彦氏（流通科学大学）に依頼した。本文中での記述は、両氏の御教示によったものである。

8．本書で示す標高値は東京湾平均海水準を基とし、方位は磁北を指す。真北は、これより東へ６度20分振っている（昭和56年現在）。

9．遺物の番号は、本文、挿図、図版ともに統一している。

10．第４章以外は、吉識雅仁・渡辺　昇・村上泰樹・甲斐昭光が目次に示したとおり分担執筆した。ただし、第３章第２～４節については、遺構を各調査員が記述し、遺物のうち古墳時代以降の土器を村上が、それ以外を甲斐が担当した。なお、編集は甲斐が行った。

11．本報告にかかる遺物・写真などの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５）及び魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630－１）に保管している。

12．発掘調査にあたり、地元周世地区の住民の方々のご協力を頂いた。また調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の御指導と御教示を仰いだ。記して深く感謝の意を表するものである。

今里幾次（日本考古学協会員）・篠宮欣子（赤穂市教育委員会）・志水豊章（竜野市教育委員会）・藤田忠彦（赤穂市教育委員会）・松本正信（姫路市立姫路高等学校）・宮崎素一（赤穂市教育委員会）・森岡秀人（芦屋市教育委員会）

本 文 目 次

第1章　調査の経緯……1
　第1節　調査に至る経緯……（吉識雅仁）　1
　第2節　発掘調査の経過……（吉識）　3
　第3節　整理作業の経過……（甲斐昭光）　5
第2章　遺跡の環境……（甲斐）　7
第3章　調査の結果……19
　第1節　調査の概要……（甲斐）　19
　第2節　弥生時代の遺構と遺物……（吉識・渡辺　昇・村上泰樹・甲斐）　25
　　1．調査の概要……25
　　2．弥生後期土器の型式分類……27
　　3．出土土器の観察……30
　　4．竪穴住居とその遺物……31
　　5．掘立柱建物とその遺物……49
　　6．土壙とその遺物……54
　　7．溝とその遺物……120
　　8．土器棺……126
　　9．畝状遺構……127
　　10．遺構に伴わない遺物……128
　第3節　古墳～室町時代の遺構と遺物……（吉識・村上・甲斐）　132
　　1．調査の概要……132
　　2．掘立柱建物とその遺物……133
　　3．土壙……137
　　4．溝とその遺物……138
　　5．その他の遺物……139
　第4節　江戸時代の遺構と遺物……（吉識・村上・甲斐）　143
　　1．調査の概要……143
　　2．掘立柱建物……144
　　3．井戸……146
　　4．溝とその遺物……146
　　5．柱穴とその遺物……146

6．遺構に伴わない遺物…… 147
第4章　自然科学的方法による調査…… 149
第1節　周世入相遺跡の地形環境分析……（高橋　学） 151
第2節　赤穂市周世入相遺跡出土土器の胎土の化学分析および
土器に付着の赤色顔料の微量化学分析……（安田博幸・森　眞由美） 165
第5章　まとめ……（甲斐） 171
第1節　遺物の検討…… 171
第2節　遺構の検討…… 183
第3節　まとめ…… 185

挿図目次

第1図　調査の位置と微地形等高線（20cm間隔）…… 2
第2図　地区設定図…… 3
第3図　弥生時代の遺跡…… 8
第4図　周辺の遺跡…… 9・10
第5図　時代別遺構全体図…… 21・22
第6図　土層断面図…… 23・24
第7図　弥生時代（下層）遺構配置図…… 25
第8図　弥生時代（上層）遺構配置図…… 26
第9図　弥生後期土器の細部名称と観察表の計測部位…… 30
第10図　竪穴住居1…… 31
第11図　竪穴住居1出土遺物…… 33
第12図　竪穴住居2…… 35
第13図　竪穴住居2出土遺物（1）…… 36
第14図　竪穴住居2出土遺物（2）…… 37
第15図　竪穴住居3…… 38
第16図　竪穴住居3出土遺物…… 38
第17図　竪穴住居4…… 39
第18図　竪穴住居4中央土壙と炉…… 40
第19図　竪穴住居4出土遺物（1）…… 42
第20図　竪穴住居4出土遺物（2）…… 43

第21図　竪穴住居４出土遺物（３）…… 44
第22図　竪穴住居５…… 46
第23図　竪穴住居５出土遺物…… 47
第24図　竪穴住居５中央土壙と炉（写真）…… 48
第25図　掘立柱建物１…… 49
第26図　掘立柱建物１出土遺物…… 49
第27図　掘立柱建物２…… 50
第28図　掘立柱建物３…… 51
第29図　掘立柱建物３出土遺物…… 51
第30図　掘立柱建物４…… 52
第31図　掘立柱建物５…… 53
第32図　土壙１・２…… 54
第33図　土壙１出土遺物…… 55
第34図　土壙２出土遺物…… 56
第35図　土壙３・４…… 57
第36図　土壙３出土遺物…… 58
第37図　土壙５…… 59
第38図　土壙６…… 60
第39図　土壙６出土遺物…… 61
第40図　土壙７…… 62
第41図　土壙７出土遺物（１）…… 62
第42図　土壙７出土遺物（２）…… 63
第43図　土壙７出土遺物（３）…… 63
第44図　土壙８…… 64
第45図　土壙８出土遺物…… 65
第46図　土壙９…… 67
第47図　土壙９出土遺物（１）…… 68
第48図　土壙９出土遺物（２）…… 69
第49図　土壙９出土遺物（３）…… 70
第50図　土壙11…… 72
第51図　土壙13…… 73
第52図　土壙13出土遺物…… 73
第53図　土壙14…… 74

第54図　土壙14出土遺物 …… 74
第55図　土壙15 …… 75
第56図　土壙15出土遺物 …… 76
第57図　土壙16 …… 77
第58図　土壙16出土遺物 …… 77
第59図　土壙17 …… 78
第60図　土壙17出土遺物 …… 78
第61図　土壙18 …… 79
第62図　土壙18出土遺物 …… 79
第63図　土壙19 …… 80
第64図　土壙19出土遺物 …… 80
第65図　土壙20 …… 81
第66図　土壙20出土遺物（1） …… 82
第67図　土壙20出土遺物（2） …… 83
第68図　土壙21 …… 85
第69図　土壙21出土遺物 …… 86
第70図　土壙22出土土器の接合関係 …… 87
第71図　土壙22出土土器の器種構成 …… 88
第72図　土壙22 …… 89・90
第73図　土壙22出土遺物（1） …… 91
第74図　土壙22出土遺物（2） …… 92
第75図　土壙22出土遺物（3） …… 93
第76図　土壙22出土遺物（4） …… 94
第77図　土壙22出土遺物（5） …… 95
第78図　土壙22出土遺物（6） …… 96
第79図　土壙22出土遺物（7） …… 97
第80図　土壙22出土遺物（8） …… 98
第81図　土壙22出土遺物（9） …… 99
第82図　土壙22出土遺物（10） …… 100
第83図　土壙22出土遺物（11） …… 101
第84図　土壙22出土遺物（12） …… 102
第85図　土壙22出土遺物（13） …… 103
第86図　土壙22出土遺物（14） …… 104

第87図　土壙22出土遺物（15）…… 105
第88図　土壙22出土遺物（16）…… 106
第89図　土壙22出土の甕A_1の法量…… 114
第90図　土壙23 …… 116
第91図　土壙23出土遺物 …… 116
第92図　土壙29出土遺物 …… 117
第93図　土壙29 …… 117
第94図　土壙30 …… 118
第95図　土壙30出土遺物 …… 119
第96図　溝1 …… 120
第97図　溝2 …… 120
第98図　溝3・4・5 …… 121
第99図　溝3出土遺物 …… 121
第100図　溝4出土遺物（1） …… 123
第101図　溝4出土遺物（2） …… 124
第102図　溝7出土遺物 …… 125
第103図　溝15出土遺物 …… 125
第104図　土器棺1出土状況 …… 126
第105図　土器棺1 …… 126
第106図　畝状遺構1 …… 127
第107図　畝状遺構2 …… 128
第108図　遺構に伴わない遺物（1） …… 129
第109図　遺構に伴わない遺物（2） …… 130
第110図　古墳～室町時代遺構配置図 …… 132
第111図　掘立柱建物6出土遺物 …… 133
第112図　掘立柱建物6 …… 133
第113図　掘立柱建物7 …… 134
第114図　掘立柱建物8 …… 135
第115図　掘立柱建物9 …… 136
第116図　土壙31・32 …… 137
第117図　土壙33 …… 138
第118図　溝17出土遺物 …… 138
第119図　溝19出土遺物 …… 139

第120図　遺構に伴わない遺物（3）…… 140
第121図　江戸時代遺構配置図 …… 143
第122図　掘立柱建物10 …… 144
第123図　掘立柱建物11 …… 145
第124図　溝21出土遺物 …… 146
第125図　柱穴11 …… 147
第126図　柱穴11出土遺物 …… 147
第127図　遺構に伴わない遺物（4）…… 148
第128図　千種川下流域平野等高線図 …… 153
第129図　千種川下流域平野地形分類図 …… 154
第130図　千種川下流域平野地形分類図凡例 …… 155
第131図　周世入相遺跡付近の微地形図 …… 159
第132図　周世入相遺跡付近の投影断面図 …… 160
第133図　周世入相遺跡出土土器のAl_2O_3％－酸不溶性成分％グラフ …… 170
第134図　壺形土器の編年 …… 175
第135図　甕形土器の編年 …… 176
第136図　鉢形土器の編年 …… 177
第137図　高坏形土器の編年 …… 178

表　目　次

第１表　周世入相遺跡の調査一覧表 …… 2
第２表　周世入相遺跡の極微地形変化と土地利用…… 163
第３表　ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのＲｆ値と色調…… 166
第４表　ジチゾンによる呈色スポットのＲｆ値と色調…… 166
第５表　周世入相遺跡出土土器の胎土の化学分析値…… 168

図 版 目 次

カラー図版１　上　土壙22出土の壺（生駒西麓地域からの搬入土器）
　　下　土壙９出土の高坏（柱状部に異なる胎土を使用）

図版１		周世入相遺跡周辺　空中写真	（国土地理院撮影）
図版２	上	Ⅰ区土層堆積状況	（西から）
	下	Ⅰ区全景	（北から）
図版３	上	Ⅱ・Ⅲ区弥生時代遺構面全景	（北から）
	下	Ⅱ・Ⅲ区弥生時代遺構面全景	（南から）
図版４	上	Ⅳ区弥生時代遺構面全景	（南から）
	下	Ⅳ区弥生時代遺構面全景	（北から）
図版５	上	Ⅳ区古墳～室町時代遺構面全景	（北から）
	下	Ⅲ区江戸時代遺構面全景	（北から）
図版６	上	Ⅰ区竪穴住居１	（東から）
	下	Ⅰ区竪穴住居１遺物出土状況	（東から）
図版７	上	Ⅱ区竪穴住居２炭化材検出状況	（西から）
	下	Ⅱ区竪穴住居２土層断面	（東から）
図版８	上	Ⅱ区竪穴住居２（２次住居）	（西から）
	下	Ⅱ区竪穴住居２（２次住居）	（北から）
図版９	上	Ⅱ区竪穴住居２（１次住居）	（西から）
	下	Ⅱ区竪穴住居２（１次住居）	（北から）
図版10	上	Ⅱ区竪穴住居２（屋内高床部除去後）	（西から）
	下	Ⅱ区竪穴住居２（屋内高床部除去後）	（北から）
図版11	上	Ⅱ・Ⅲ区竪穴住居３土層断面	（南から）
	下	Ⅱ・Ⅲ区竪穴住居３	（南から）
図版12	上	Ⅲ区竪穴住居４炭化材検出状況	（南から）
	下	Ⅲ区竪穴住居４張出部	（東から）
図版13	上	Ⅲ区竪穴住居４	（東から）
	下	Ⅲ区竪穴住居４	（西から）
図版14	上	Ⅲ区竪穴住居４中央土壙・炉	（東から）
	下	Ⅲ区竪穴住居４中央土壙内土器出土状況	（西から）

図版15	上	Ⅲ区竪穴住居４中央土壙土手断ち割り断面	（東から）
	下	Ⅲ区竪穴住居４柱穴内土器出土状況	（西から）
図版16	上	Ⅳ区竪穴住居５	（西から）
	下	Ⅳ区竪穴住居５	（南から）
図版17	上	Ⅰ区掘立柱建物１土器出土状況	（南から）
	下	Ⅰ区掘立柱建物２	（西から）
図版18	上	Ⅲ区掘立柱建物３	（南から）
	下	Ⅲ区掘立柱建物４	（北から）
図版19	上	Ⅰ区土壙１～４・溝１	（西から）
	下	Ⅰ区土壙１土器出土状況	（東から）
図版20	上	Ⅱ区土壙６土器出土状況	（南から）
	下	Ⅱ区土壙６	（東から）
図版21	上	Ⅰ区土壙５	（南から）
	下	Ⅱ区土壙７	（南から）
図版22	上	Ⅱ区土壙８土器出土状況	（西から）
	下	Ⅱ区土壙８	（西から）
図版23	上	Ⅱ区土壙９土器出土状況	（南から）
	下	Ⅱ区土壙９	（南から）
図版24	上	Ⅲ区土壙13検出状況	（南から）
	下	Ⅲ区土壙13土層断面	（南から）
図版25	上	Ⅲ区土壙16土器出土状況	（南から）
	下	Ⅲ区土壙16	（南から）
図版26	上	Ⅲ区土壙14・15	（南から）
	下	Ⅲ区土壙18	（南から）
図版27	上	Ⅳ区土壙20土器出土状況	（西から）
	下	Ⅳ区土壙20	（南から）
図版28	上	Ⅳ区土壙21土器出土状況	（東から）
	下	Ⅳ区土壙21	（南から）
図版29	上	Ⅳ区土壙22土器出土状況	（西から）
	下	Ⅳ区土壙22土器出土状況	（北から）
図版30	上	Ⅳ区土壙22土器出土状況近景	（西から）
	下	Ⅳ区土壙22土器出土状況近景	（西から）

図版31　上　IV区土壙30土器出土状況　(北から)
　　下　IV区土壙30　(北から)
図版32　上　I区溝2　(西から)
　　下　I区溝3～5　(南から)
図版33　上　II区溝11・12　(北から)
　　下　II・III区溝13　(西から)
図版34　上　III区畝状遺構1　(東から)
　　下　III区畝状遺構1　(北から)
図版35　上　IV区畝状遺構2　(北から)
　　下　I区土器棺1　(北から)
図版36　上　III区掘立柱建物6　(西から)
　　下　III区掘立柱建物7　(西から)
図版37　上　IV区掘立柱建物8　(北から)
　　下　III区掘立柱建物9　(東から)
図版38　上　IV区柱穴4土器出土状況
　　下　IV区柱穴5土器出土状況
図版39　上　I区土壙30・31　(南から)
　　下　II区溝6・7・18・19　(西から)
図版40　上　II区掘立柱建物10　(南から)
　　下　III区掘立柱建物11　(東から)
図版41　上左　III区柱穴10断面柱根出土状況
　　上右　III区柱穴11石臼出土状況
　　下　II区井戸1断面　(東から)
図版42　竪穴住居1（1）・2（1）出土土器
図版43　竪穴住居4（1）出土土器
図版44　掘立柱建物1、土壙1（1）・3・6・8（1）出土土器
図版45　土壙9（1）出土土器
図版46　土壙9（2）・16・18出土土器
図版47　土壙20（1）・21・22（1）出土土器
図版48　土壙22（2）出土土器
図版49　土壙22（3）出土土器
図版50　土壙22（4）出土土器
図版51　土壙22（5）出土土器

図版52　土壙22（6）出土土器
図版53　土壙22（7）出土土器
図版54　土壙22（8）出土土器
図版55　土壙23・30出土土器
図版56　溝3・4出土土器
図版57　上　土器棺1出土土器
　　下　竪穴住居1（2）・2（2）・4（2）・5出土土器
図版58　上　土壙1（2）・8（2）出土土器
　　下　土壙9（3）・15出土土器
図版59　上　土壙17・20（2）、溝4出土土器
　　下　土壙22（9）出土土器
図版60　上　弥生土器の底部
　　下　弥生土器断面
図版61　上　竪穴住居2・4・12層・7層出土金属器
　　中　掘立柱建物6、溝7、12層出土土錘
　　下　竪穴住居4出土石器
図版62　上　土壙7出土石器
　　下　土壙16・21出土石器
図版63　古墳～室町時代の土器（1）
図版64　上　古墳～室町時代の土器（2）遺構出土分
　　下　古墳～室町時代の土器（3）
図版65　上　古墳～室町時代の土器（4）
　　下　古墳～室町時代の土器（5）
図版66　上　江戸時代の陶磁器
　　下　柱穴11出土石臼

第 1 章　調査の経緯

第 1 節　調査に至る経緯

周世入相遺跡は、戦後の瓦粘土採集時に弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦・環状石斧等の遺物が出土したことにより知られた遺跡で、遺跡台帳に登録されている周知の遺跡である。

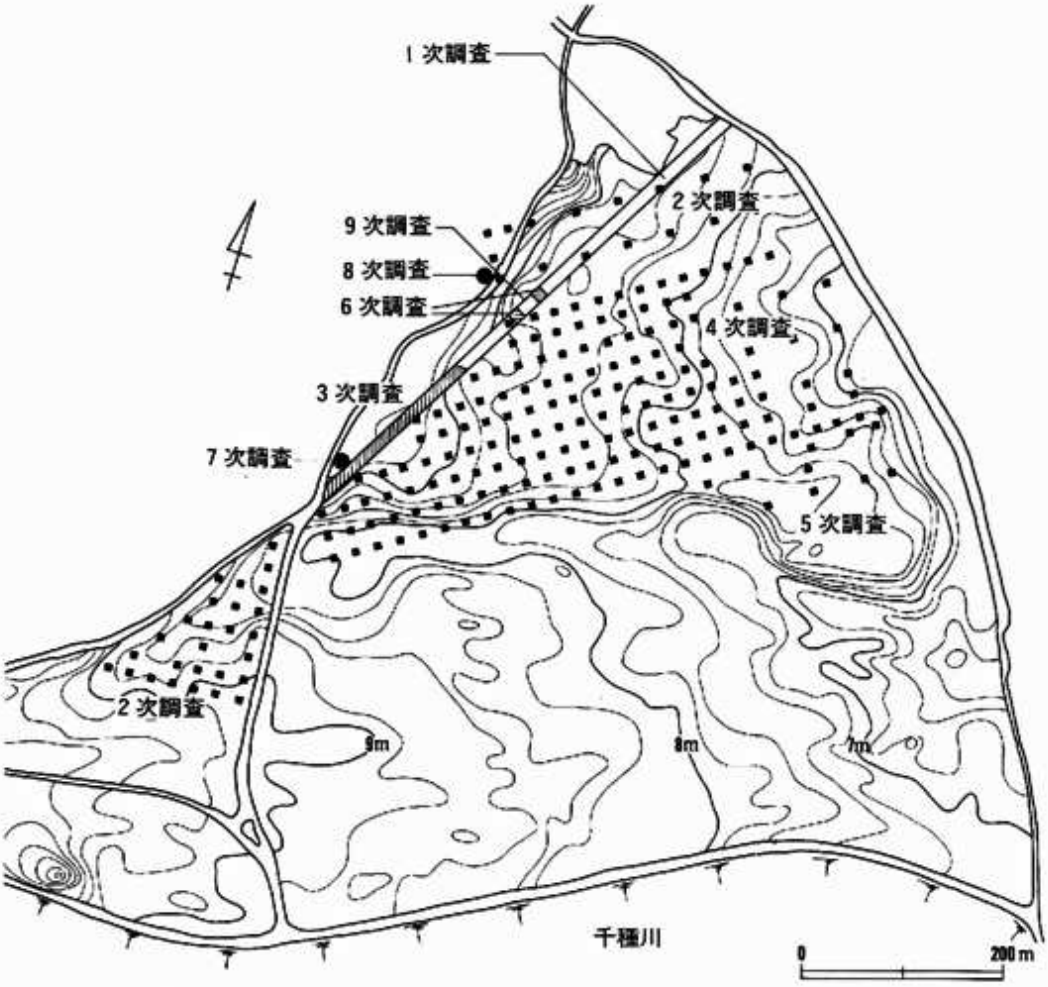
昭和56年度、農業基盤整備事業として、遺跡を含む周世集落の前面に広がる水田の圃場整備が計画された。これを受けて赤穂市教育委員会は、昭和58年５月に農業基盤整備事業計画地内の分布調査を実施した。その結果、周世集落の前面に広がる水田一帯に遺物の散布が認められ、かなり広範囲に遺跡の存在することが予想された。そのため農業基盤整備事業実施前に確認調査を実施し、遺跡の範囲・構造の把握に努め、工事計画の変更等によって遺跡の保存を計ろうとしていた。

この一方、周世の集落内を走る県道高雄－有年横尾線の道幅の拡幅等を望む声が強くなり、農業基盤整備事業に合わせて、兵庫県上郡土木事務所（以下土木事務所）が改良工事を実施することになった。しかし、集落内はすでに民家が立て込み、拡幅等の余地がないことから、集落を迂回して、バイパスを集落の東側に建設する計画が策定された。

このバイパス予定地内には遺跡が存在しているため、土木事務所は兵庫県教育委員会の指示を受け、赤穂市教育委員会と協議を行った結果、市教育委員会による確認調査が実施されることになった。市教育委員会で確認調査の対応ができなかったため、現地調査は、昭和59年１月に有年考古館の松岡秀夫を団長とする赤穂埋蔵文化財調査会により実施された（１次調査）。その結果、明瞭な遺構は検出されなかったものの、弥生土器等の遺物が多量に出土したため、計画予定地の内、南側約180mの範囲にわたって全面調査の必要があると判断された。

この調査結果を受けて、県教育委員会と土木事務所が協議を行い、その結果、昭和61年度に土木事務所から依頼を受けた県教育委員会が、全面にわたる調査に着手することとなった。

５月に開始した全面調査（３次調査）は８月に終了した。この調査で試みた周辺の微地形分類では調査区のすぐ北側は谷部となるが、さらにその北方に微高地が存在しており、遺跡が存在している可能性が高いと判断された。また市教育委員会によって行われた、農業基盤整備事業に伴う確認調査（４次調査）で、調査区より北の地域で遺構が確認されたため、遺跡は昭和61年度の調査区より北に広がることが確実となった。そこで県教育委員会は土木事務所と協議し、微高地に当たる地域についてのみ、昭和62年度に再度確認調査を実施した。その結果、弥生時代の土壙等の遺構が検出されたため、この年度、一部農道下となる部分を除き全面調査を実施し（６次調査）、農道下の地区は昭和63年度に全面調査を実施した（９次調査）。



第1図　調査の位置と微地形等高線（20cm間隔）

発掘調査	調査年度	調査主体	調査の種類		
			県道バイパス建設	農業基盤整備事業	その他
	昭和57・58年度	市教育委員会		分布調査	
1次調査	昭和58年度	市教育委員会	確認調査		
2次調査	昭和60年度	市教育委員会		確認調査	
3次調査	昭和61年度	県教育委員会	全面調査		
4次調査	昭和61年度	市教育委員会		確認・全面調査	
5次調査	昭和61年度	市教育委員会		確認調査	
6次調査	昭和62年度	県教育委員会	確認・全面調査		
7次調査	昭和62年度	市教育委員会			民間倉庫の改築
8次調査	昭和63年度	市教育委員会			民間倉庫の新築
9次調査	昭和63年度	県教育委員会	全面調査		

第1表　周世入相遺跡の調査一覧表

第 2 節　発掘調査の経過

昭和61年度

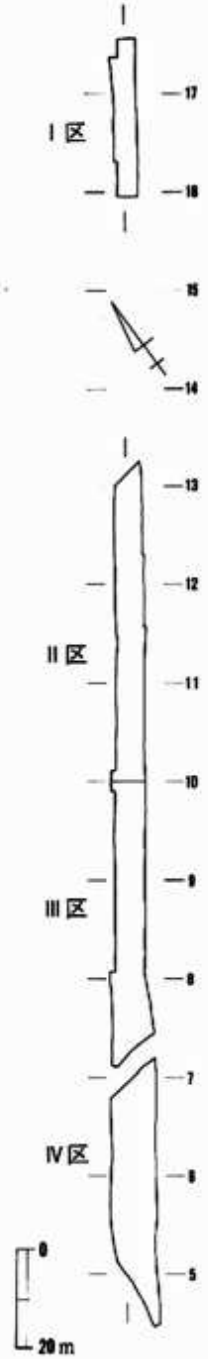
昭和58年度の確認調査で全面の調査が必要とされた長さ約180m、幅約10mの面積約1530㎡について全面調査を実施した。開始日は昭和61年5月13日である。

地区の名称は第2図に示すとおりであり、61年度はII～IV区の調査を行った。地区内の位置を細かく示す場合は調査区に打設している道路センター杭の番号を用い、この杭を実測の基準にも利用した。

調査にあたっては、遺構面の数、遺構の状況などを把握するため、調査区の西端にトレンチを設けることから開始した。その結果、調査区のほぼ全域で、弥生時代以降の遺構が確認され、遺構面は多いところで4面を数えることが判明した。ただ北端の約10mは遺構が認められなかったため、調査区から除外した。

また№7杭付近には、使用中の農業用水路があった。さらにこの用水路以南は、調査開始時には畑として利用されていたため、調査が不可能な状況であった。したがって調査区を№7杭付近で分断し、用水路の北側から調査を開始した。

昭和61年6月2日より、江戸時代の遺構検出面（第1面）まで機械による掘削を開始し、第1面の遺構調査は6月10日に終了した。翌日からは第2面の調査にかかり、再び機械による掘り下げを行い、人力による遺構掘削を行った。ただ土層の識別の困難であったIII区中央とIV区については、第3面まで掘り下げ、第3面の遺構とともに7月4日まで調査を行った。次にIII区南北端の第3面の調査を開始したが、地区が狭いことから遺構検出面までの掘り下げも人力で行い、調査は7月23日に終了した。第4面の調査は用水路南側の地区と並行して実施し、8月12日に終了した。用水路南側の地区は、用地問題が残っていたため開始が遅れたが、7月7日から調査を開始することができた。この地区では3面が確認されたが、調査は第2面と第3・4面の二つに分けて実施した。第2面の調査は8月2日に終え、その後直ちに第3・4面の調査にかかり、8月23日この面の調査を終了した。昭和61年度の調査体制は以下の通りである。



第2図　地区設定図

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	北村	幸久
		参事	森崎	理一
		課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長	大村	敬通
		主査	井守	徳男
	調査担当	主任	吉識	雅仁
		技術職員	甲斐	昭光

昭和62年度

昭和61年度の調査で、遺跡は北へ続く可能性があると判断されたため、昭和62年12月５日から確認調査を実施した。道路計画地の東端に幅１mのトレンチを長さ約110mにわたって設定し、これに直交する２×５mのトレンチを３個所設けた結果、遺構が検出されたため、農道下の地区を除く全面調査を12月25日まで行った。調査体制は以下の通りである。

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	北村	幸久
		参事	森崎	理一
		課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長	大村	敬通
		主査	井守	徳男
	調査担当	主任	渡辺	昇
		技術職員	村上	泰樹

昭和63年度

昨年度は調査不可能であった約154㎡について、全面調査を昭和62年12月９日から実施した。竪穴住居等を検出し、調査を12月14日に終了した。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	中根	孝司
		参事	森崎	理一
		参事	日野	和広
		課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長	大村	敬通
		主査	井守	徳男
	調査担当	主任	渡辺	昇
		技術職員	村上	泰樹

第 3 節　整理作業の経過

出土遺物は、整理用コンテナ73箱であり、遺構から出土した弥生土器がその大半を占め、他に鉄製品・石器が若干出土している。これらの遺物の整理にあたっては、昭和61年度の発掘調査に併行して、現地の仮設事務所において土器の洗浄作業を実施することから開始した。

本格的な整理作業は、昭和62年度から63年度は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が実施し、平成元年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

昭和62年度

昭和61年度出土遺物について、土器のネーミング及び接合・復原作業を実施した。ネーミングにあたっては、作業の簡略化のため、遺跡調査番号と通し番号のみを記入し、あわせて台帳の作成を行った。

整理作業の体制は以下の通りである。

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	北村　幸久	
		参事	森崎　理一	
		課長補佐	福田　至宏	
		課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長	大村　敬通	
		技術職員	渡辺　昇	
	調査担当	主任	吉識　雅仁	
		技術職員	甲斐　昭光	
		調査補助員	高島　知恵子	松本　睦
			出田　恵子	栗山　美奈
			早川　亜紀子	吉田　圭子

昭和63年度

昭和61年度出土遺物について、土器の実測図・拓本の作成作業を行った。土器の実測は、器形・大きさの判明するものについては極力行うよう努めた。

整理作業の体制は以下の通りである。

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	中根　孝司
		参事	森崎　理一
		参事	日野　和広
		課長補佐	松下　勝

	主査	小川　良太	
	主任	岡田　章一	
調査担当	主任	吉識　雅仁	
	主任	渡辺　昇	
	技術職員	村上　泰樹	
	技術職員	甲斐　昭光	
	調査補助員	高島　知恵子	松本　睦
		出田　恵子	小川　美奈
		早川　亜紀子	平林　育子
		和田　寿佐子	

平成元年度

昭和62・63年度の出土遺物（コンテナに13箱）の洗浄・ネーミング作業、土器の接合・復原および実測作業から開始した。洗浄後、遺存状況の悪い土器について、強化のためバインダー20%溶液に浸した。また、A0大方眼紙80枚分の遺構実測図の整理を行い、遺構・遺物のトレース、レイアウト作業等を実施した。なお、遺物の写真撮影、金属製品の保存処理作業、周辺科学研究者への遺物分析・鑑定作業の依頼も本年度に実施した。

整理作業の体制は以下のとおりである。

調査主体　兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

調査体制	事務担当	所長	大江　剛	
		副所長兼調査第二課長	村上　紘揚	
		副所長	才木　繁	
		整理普及課長	松下　勝	
		技術職員	岸本　一宏	
	調査担当	主査	吉識　雅仁	
		主任	加古　千恵子（金属器の保存処理）	
		主任	渡辺　昇	
		技術職員	村上　泰樹	
		技術職員	甲斐　昭光	
		嘱託職員	小川　美奈	斉藤　海子子
			平林　育子	本窪田　英子

第 2 章　遺跡の環境

赤穂市は兵庫県の西南端に位置し、東は相生市、北は赤穂郡上郡町、西は岡山県の備前市および和気郡日生町に接している。赤穂市は上郡町、相生市とともに旧赤穂郡に所属する。旧赤穂郡は『播磨国風土記』に記載がみられないが、奈良時代成立の『律令残篇』の内容などから、播磨国の所管する郡であったと考えられている[1]ことから、旧赤穂郡は播磨国の西端にあって、備前国とその境を接していたことになる。

旧赤穂郡内の遺跡の把握については、松岡秀夫ら地元研究者の地道かつ積極的な踏査成果が基本となっており[2]、最近刊行された『赤穂市史』などにその成果の一部が詳細に記述されている[3]。これらの古くから知られている多くの遺跡は発掘調査がなされておらず、遺跡の性格を把握するには充分とはいえないが、近年、山陽自動車道の建設といった大規模開発や、農業基盤整備事業などの波がこの地にも及んでおり、これに先立つ発掘調査の件数も増大し、地理的分野も含めた新知見を加えつつある状況にある。以下、千種川下流域を占める旧赤穂郡を中心に、周世入相遺跡をとりまく環境について概観する。

千種川は、兵庫・岡山・鳥取の三県の境界に近い江波峠（標高1098m）付近の中国山地に源を発する。延長約68kmを南流し、赤穂市で播磨灘に注ぐ。千種川流域は、六甲変動の影響が少ないため、流域平野はきわめて狭く、中・下流域においては丘陵や更新世河岸段丘の発達は認められない。このため、播磨灘に注ぐ他の諸河川流域とかなり異なった景観をもつ。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、赤穂市内の２か所において遺物が確認されているのみである。鳶路池遺跡・猪壷谷遺跡は縄文時代の石器が採集されることで知られていた。発掘調査の結果、縄文時代の石器に混じり、尖頭器４点の出土があり[4]、旧石器時代に含まれるものと考えられている。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、上郡町内で２か所、赤穂市内で10か所、相生市では２か所において確認されており、現在のところ南部の海岸寄りにその分布が集中する。いずれも遺物の出土が知られているのみで、明確な遺構は確認されていない。これらはすべて、後期・晩期に属するものである。

内陸部の上郡町では梨ノ木遺跡から、調査の結果、後期中葉から晩期にかけての土器片、石皿、叩き石、サヌカイト片、植物種子などが出土している[5]。このほか、大池遺跡より、晩期土器片および石鏃が採集されている[5]。

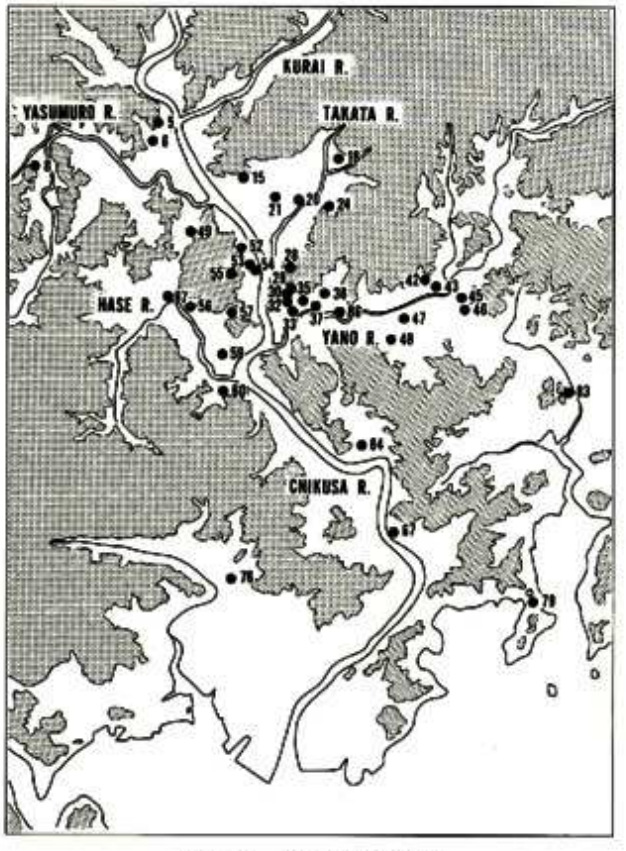
赤穂市域では、猪壷谷遺跡、赤穂大橋下遺跡、塩屋築田遺跡、堂山遺跡の４箇所で土器が出

土している。このうち、猪壺谷遺跡は海岸段丘上に位置し、２度にわたる発掘調査により、後期後葉を主体とした土器片および石鏃、叩き石、石錘、石棒などの石器が検出された[6]。赤穂大橋下遺跡、塩屋築田遺跡は、ともに工事中に発見された遺跡であり、後期後葉の土器片と石器が採集されている。堂山遺跡は、山陽自動車道建設に伴う調査により、平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての塩田関係の遺構が検出されたことで知られる。この遺跡の下層より、縄文中期末から晩期の土器片および石鏃、石錘などの石器が出土しており、なかでも後期前・中葉の土器が大半を占めている[7]。このほか、馬路池遺跡、万五郎谷遺跡、大塚谷遺跡、大谷山遺跡、折方遺跡、木ノ目池北遺跡[8]から石器が出土している。

相生市内では、佐方遺跡で後期の土器片と石鏃が工事中に採集されている[9]ほか、壺根古墳群の発掘調査の際、土器の小片が出土している[10]。

弥生時代

第３図に弥生時代の遺跡の分布を示した。網目の部分は標高100m以上の範囲である。遺跡は、相生市北部から西流する矢野川と千種川の合流地点を中心とした赤穂市北部地域に顕著に分布していることが分かる。この地域は千種川流域にあっては、比較的広い沖積地をもち、東西方向の眺望のきく陸上交通の要地でもある。



第３図　弥生時代の遺跡

遺跡の立地については、松岡秀夫が指摘するように[11]、低地に少なく、山麓または山頂に立地する遺跡が多いことが挙げられる。山頂・山腹に位置するものを除けば、完新世段丘面上にあるものが殆どであり、これは、段丘化以前の中洲状あるいは自然堤防状の微高地に占地するものである。

上郡町内[12]では、船坂地区、山野里地区、高田地区に弥生時代の遺跡の集中がみられる。船坂地区は千種川と鞍居川の合流地点に西接する地域であり、集落跡は未発見である。この地区では、別名遺跡において、道路改良工事中に、土取り場となった山の急斜面から、ほぼ完形のもの１本を含む３本の広型銅剣が出土している[13]。井上遺跡・羽

1. 鍛冶4号墳
2. 牧尾1号墳
3. 尾長谷1号墳
4. 丸尾古墳
5. 弁上遺跡
6. 羽山遺跡
7. 黒隈1号墳
8. 別名遺跡
9. 飯坂4号墳
10. 大塚遺跡
11. 弁ノ橋6号墳
12. 落地遺跡
13. 与井1号墳
14. 与井陽寺
15. 西山遺跡
16. 与井瓦窯
17. 神明寺遺跡
18. 使用谷遺跡
19. 梨ノ木遺跡
20. 神子田遺跡
21. 中山古墳群
22. 西野山古墳群
23. 中山瓦窯址
24. 体訪遺跡
25. 正福寺古墳
26. 正福寺窯址
27. 山田奥窯址
28. 六ツ谷遺跡
29. 北原遺跡
30. 奥山遺跡
31. 鳴無山1号墳
32. 奥山遺跡
33. 寄年原・田中遺跡
34. 木造谷2号墳
35. 北鳥北山遺跡
36. 津村古墳
37. ハトカ茶畑遺跡
38. 山田遺跡
39. 塚山遺跡
40. 春狭野古墳
41. 大道山1号墳
42. 奥ノ山遺跡
43. 下土井遺跡
44. 山崎山1号墳
45. 八洞遺跡
46. 野々宮山遺跡
47. 城井池ノ下遺跡
48. 松崎遺跡
49. 山田遺跡
50. 馬路池遺跡
51. 老山3号墳
52. 野田遺跡
野田古墳群
53. 上所山田遺跡
54. 上所二又溝遺跡
55. 精谷山遺跡
56. 与井谷口遺跡
与井谷口横石塚群集墳
57. 三軒屋遺跡
58. 放鳥山古墳群
59. 沖田遺跡
60. 下管生遺跡
61. 間世黒谷古墳
62. 間世宮裏山群集墳
63. 間世水木原古墳
64. 周世入根遺跡
65. 船戸山群集墳
66. 真殿門前群集墳
67. 上高野遺跡
68. 高取山横石塚群集墳
69. 高取山群集墳
70. 高伏山群集墳
71. 八祖山経塚
72. 赤穂大塚下遺跡
73. 赤穂城本丸
74. 赤穂市役所遺跡
75. 塩屋柴田遺跡
76. 堂山遺跡
77. 緑雲谷遺跡
78. みかんのへた山古墳
79. 小島遺跡
80. 舎根古墳群
81. 位方遺跡
82. 位方1号墳
83. 東古浜高山遺跡
84. 鉢ケ丘窯址群
85. 感状山城
86. 牟礼山田遺跡
87. 西有年畑田遺跡

第4図　周辺の遺跡

山遺跡は、ともに山麓に立地し、弥生後期と思われる土器棺数基が、近接した状態で検出されている[14]。

安室川を挟んで船坂の尾根に対面する地区を山野里地区とよぶ。ここでは山田遺跡で、中・後期の土器および石器が採集されている。

高田地区では、高田盆地とその周囲の山麓および山頂に多くの遺跡が存在する。盆地中央を流れる高田川の自然堤防上に立地するのが神子田遺跡である。発掘調査により、後期後半に属する竪穴住居跡2棟が検出された。2棟とも平面形は円形で、直径は12.8mおよび8.9mとやや規模が大きい[15]。盆地周縁の山麓に立地する遺跡として西山遺跡、佐用谷遺跡、休治遺跡がある。いずれも中期から後期にかけての土器、石器が採集されている。また、盆地西側に、古墳群の存在で著名な中山、西野山の両山塊があり、この山上からも中・後期の土器が出土することが知られている[16]。これより少し離れるが、標高200mの山頂に後期の土器・石器の散布がみられる六ツ岩遺跡がある。

赤穂市内では、有年楢原地区、東有年・西有年地区、矢野川下流右岸地区、周世地区、高野地区、坂越地区、大津地区に大きく遺跡のまとまりが認められる。有年楢原地区は、赤穂市北端の千種川右岸にあたり、大谷山の中腹斜面に遺跡の分布がみられる。野田遺跡は、中期の遺物が散布することで知られていた遺跡である。道路拡張工事や墓地の移転に伴う事前の調査により、多量の遺物の出土をみた。土器は中期Ⅲ～中期Ⅴ[17]の時期を主体とし、壺の口縁内突帯や、頸部の突帯文の上に棒状浮文を用いる手法、さらに口縁直下に突帯文を重ねる直口壺の盛行など、西播磨地方の特徴を色濃く示すものである。これは野田遺跡に限らず、旧赤穂郡内の弥生中期の土器においてもあてはまるようである。石器も石鏃、打製石庖丁、石錐、石槍、石斧、敲石などの多きにわたっている。打製石庖丁はサヌカイト製で、堂山遺跡・上郡町の六ツ岩遺跡に出土例がある。野田遺跡からの特筆すべき出土遺物に「回転台形土製品」がある。このほか、上所二又溝遺跡、上所山田遺跡では中期の土器が採集されている。精谷山遺跡は標高130mの高所にあり、平坦地より中期の大型の壺が出土している。これを土器棺と捉え、近接した場所に箱式石棺らしき立石も認められることとあわせて、この遺跡を有年楢原地区の遺跡の墓域とする考えもある。また、三軒屋遺跡、祇園山遺跡においても土器の散布が認められる。

東有年・西有年地区は有年楢原地区の西方に位置し、東流する長谷川流域に遺跡が確認される。長谷川左岸の西有年畑田遺跡では、旧河道より弥生中期Ⅴの土器の他に環状石斧・石庖丁などの石器が出土し、弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴住居が検出されている[18]。沖田遺跡は千種川右岸低地の自然堤防状微高地に立地する。遺物は瓦粘土採取の際に、地表下約1mの深さから出土した。土器の示す時期は中期Ⅲ・Ⅳである。確認調査の結果、住居跡が数棟検出されている[19]。下畠生遺跡、与井谷口遺跡はともに山麓に立地し、中期の土器が採集されている。

矢野川下流右岸地区では、ＪＲ有年駅の北側に連なる山の尾根上および山麓に遺跡が存在している。北原遺跡は、標高120mの眺望の良い鞍部に立地する。山崩れおよび砂防工事の際に、中期の遺物が採集されている。土器のほかに石鏃、石錐、石斧などがある。原小学校の校庭周辺からは弥生時代以降の遺物が出土することが知られていた。この遺跡は有年原・田中遺跡として、昭和56年度以降発掘調査が実施されている[20]。中・後期の竪穴住居が10軒以上確認されており、後期の２基の墳丘墓の存在が特筆される。この墳丘墓は平地に位置し、墳丘は直径直径約16.3m、19mの円形である。墳丘の斜面には川原石を貼り付けており、周溝内より葬送用の器台・壺が出土している。この原小学校の裏山一帯が奥山遺跡である。各時代の遺物が採集されているが、弥生時代のものには、中・後期の土器、石鏃、小形仿製内行花文鏡がある。山崩れにより、遺跡およびその周辺の土砂がかなり流出しているため、この鏡もいかなる遺構に所属していたのかは不明であるが、高倉洋彰による分類のII類に属し[21]、北九州を中心に分布する型式であることは注意されてよい。有年原・北畠遺跡では前期の土器の出土をみた[22]。牟礼山田遺跡では、中期の竪穴住居の他に、方形に巡る溝の一部が検出されている。溝内より、二重口縁壺などが出土しており、墳丘墓の周溝かと考えられている[23]。このほか、ハトカ茶畑遺跡でも土器が採集されている。

周世地区では、周世入相遺跡以外に弥生時代の遺跡は知られていない。

高野地区は、周世地区より約２km下流の千種川左岸低地にあたる。この地区では、銅鐸の石製鎔笵の出土地点である上高野遺跡が知られているのみである。この石製鎔笵以外の遺物はこれまでに出土していない。この鎔笵は、鈕の部分しか残存していないが、復原すれば全高が約80cmになる大型の扁平鈕式銅鐸の鋳造に用いられたものである。河原から出土したというこの鎔笵について松岡秀夫は、鎔笵の石質が軟性の凝灰岩質砂岩であるにもかかわらず、川流れの磨滅が認められないことから、当地点に存在した弥生時代の集落に元来あったものと捉え、例えば周世入相遺跡のような上流の遺跡からの流出という考えには否定的である[24]。

坂越地区は坂越湾をのぞむ地域である。海岸部の平野は狭小である。小島遺跡では、相生湾へむかう峠の頂上付近を中心に中期の遺物が採集されている。

大津地区は、現在の海岸線から約４km離れているが、かつては海に沿った地域と考えられる。堂山遺跡からは、旧赤穂郡内で唯一の前期の土器の出土をみた。逆Ｌ字形の口縁の下に10数条の沈線をもつ甕の破片であり、当地における前期後半の特徴を示している[25]。県教育委員会の調査では、中期III～Ｖの土器片が出土し、また弥生時代終末期の土器や製塩土器を伴った土壙などが検出されている。弥生時代終末の土器のなかには、搬入土器として、吉備系・山陰系のものがあり、それぞれ14%、7.8%と、比較的高い値を示している[26]。このほかの出土遺物に銅鏃、土錘などがある[27]。

相生市内では、矢野川が小河川と合流して流れを西に変える若狭野地区に弥生時代の遺跡の

存在が知られている。奥ノ山遺跡、下土井遺跡[28]は、丘陵斜面にあり、野々宮山遺跡は眺望のよい標高50mの山頂および山麓に立地する。福井池ノ下遺跡は農業基盤整備事業にともなう発掘調査により、土壙が7基検出されている[29]。八洞遺跡を含め、これらはいずれも中期後半の時期に属するものである。また、ＪＲ相生駅付近でも、東古浜裏山遺跡から中期後半の土器、石器が採集されている[30]。後期に属するものには松崎遺跡がある。八洞遺跡では、完新世段丘面の形成時期が9世紀以降であるというデータが得られている[31]。

古墳時代

次に、古墳時代の遺跡について概観する。まず古墳については、旧赤穂郡における実態を櫃本誠一が最近まとめており[32]、参考になる。

前期古墳では、上郡町に西野山3号墳がある。この古墳は、5基の円墳からなる西野山古墳群内にあり、昭和26年に発掘調査が行われた。墳丘規模は直径17m、高さ3mで、中心主体には排水溝を伴った、長さ4.8mの粘土槨が採用されていた。棺内より、三角縁四神四獣鏡、勾玉、管玉、切子玉などの玉類、鉄剣、鉄鏃、銅鏃、鉄斧、刀子、鉋、漆塗繊維製短甲などの副葬品が出土した。鏡は京都府久津川車塚古墳出土鏡と同笵であることが知られている[33]。旧赤穂郡内には、各時期をとおしても確実な前方後円墳の存在は知られていないが、その可能性を指摘されているものとして町内の中山13号墳[34]、正福寺古墳、井ノ端六号墳がある。

赤穂市には、現在のところ実態のはっきりした前期古墳は知られていない。津村古墳は丘陵頂上に立地する古墳である。直径28mの円墳であり、埴輪をもたない。墳丘の形態から、市内最古の4世紀末から5世紀初頭の築造とみる考えもある。野田古墳は崩壊した竪穴式石室を主体にした古墳といわれており、石室よりガラス小玉3個が採集されている。

相生市においては、池ノ上古墳が唯一の調査例である。調査では遺物が出土しなかったが、かつて盗掘の際に鉄刀、鉄槍らしき遺物の出土をみたという。偏平な板石が検出されており、竪穴式石室の一部かと思われる[35]。佐方1号墳では、かつて竪穴式石室らしき石積みがみられたといい、II期の円筒埴輪[36]が採集されている。また、大避山1号墳は直径30mの円墳で、墳頂部に長さ7.5mの陥没がみられ、粘土槨の存在が考えられている。

中期古墳では、上郡町の中山1号墳、西野山7号墳からIII期の円筒埴輪が採集されている。中山1号墳は一辺25mの方墳で、盾形埴輪も出土している。

赤穂市には、大型の古墳として蟻無山1号墳、みかんのへた山古墳がある。蟻無山1号墳は直径52mの円墳で、造り出しをもつ。外表施設として葺石と埴輪がある。円筒埴輪はIV期に属する。形象埴輪には、盾形、馬形、家形、蓋形の各種が知られている。このほか、初期須恵器、土師などが墳丘より採集されている。みかんのへた山古墳は、海を望む山頂に立地する直径38mの円墳である。葺石をもち、IV期の円筒埴輪、形象埴輪がある。これらよりも小規模な古墳ながら円筒埴輪をもつものに、奥山1号墳がある。直径4mの木棺直葬墳と考えられており、IV期

の円筒埴輪、ＴＫ－23型式併行[37]の須恵器蓋坏、曲刃鎌、横矧式鋲留短甲の破片などが採集されている。

相生市の大塚ハザ古墳は測量調査の結果、直径32mの円墳と判明した。Ⅳ期の円筒埴輪が採集されている[38]。

このような前・中期の古墳に比べ、後期古墳は数多くあり、内容的にも特徴のある古墳の存在が知られるようになった。上郡町では高田地区、そして安室川流域の船坂・山野里地区に、赤穂市内では、矢野川、長谷川が千種川に合流する付近に分布の集中がみられ、おおまかにいえば、弥生時代の遺跡の分布状況に似たあり方を示している。

大型の横穴式石室をもつ古墳は、上郡町内に造営されている。鳳張１・２号墳は船坂地区にある。１号墳は一辺21mの方墳であり、玄室長6.50m、幅2.0mをはかる石室をもつ。これに次ぐ規模の石室は、高田地区の古墳群にある。与井１号墳は一辺30mの方墳であり、玄室長4.97m、幅2.77mを計る。これと同程度の規模をもつものに、西野山８号墳（玄室長5.10m）、西野山９号墳（玄室長4.80m）がある。これに対し、第３のクラスの石室は広い分布範囲をもち、赤穂市、相生市にも造営されている。

これらの横穴式石室のなかに、特異な形態をもつものがいくつか知られている。一つはいわゆる複室構造の石室である。上郡町には鍛冶４号墳および惣尻１号墳が、赤穂市には有年楢原地区・野田２号墳（祇園塚）、矢野川下流右岸地区の塚山６号墳が知られている。いま一つは石棚をもつ横穴式石室であり、上郡町の鳳張１号墳、赤穂市の木虎谷２号墳が挙げられる。美作・吉備南部地方に多く知られる陶棺が出土することも注意されている。土師質亀甲形の陶棺は、上郡町の惣尻１号墳、丸尾古墳で、須恵質の四柱式は相生市塚森古墳で、須恵質切妻式が上郡町の尾長谷１号墳においてそれぞれ出土しているが、いまのところ赤穂市内には陶棺の分布は及んでいない。

また、赤穂市内の西有年地区・与井谷口、高野地区・高取山で積石塚からなる古墳群が確認されている。与井谷口積石塚古墳群は33基からなり、うち１基が調査された。墳丘は直径が２～３m、高さ1.3mの円形をなし、積石中より須恵器、土師器が出土した。須恵器は６世紀前半の特徴を示す。高取山積石塚古墳群は６基で構成され、１・５号墳には箱式石棺が構築されている。遺物は知られていない。

このほか、海岸部の相生市壺根古墳群では、５世紀中頃から６世紀全般にわたる顕著な墳丘をもたない箱式石棺墓が20基以上知られていた。そのうち９基が調査され、釣針の副葬などが確認されている[39]。同じく相生市の山崎山古墳群は、墳丘・列石の形態、竪穴式石室の存在などから、弥生時代の墳丘墓かとされていたが、その後の調査により、１号墳中央の小形の竪穴式石室から６世紀前半の須恵器、玉類の出土をみた[40]。

当地方の群集墳は、10基以内の古墳で構成されるものがほとんどであるが、周世地区・周世

宮裏山群集墳（27基）、真殿地区・真殿門前群集墳（５基）、高野地区・高取山群集墳（21基）、高伏山群集墳（３基）のように、多数の小規模墳で構成される、終末期の群集墳も存在する。石室は無袖で小形の横穴式石室である。周世宮裏山群集墳は、調査された６世紀後半の周世宮裏山28号墳（周世黒谷古墳）を除く27基のほとんどが７世紀にはいる無袖の横穴式石室である。墳丘は直径10mに満たないものばかりである。

終末期古墳の代表的な埋葬施設である横口式石槨は、その可能性を指摘されているものを含めて、上郡町山野里の飯坂４号墳、赤穂市西有年の北山３号墳、相生市若狭野古墳の３基が知られている。若狭野古墳は一辺15m、三段築成の方墳であり、外護列石を巡らす。石室の築造には高麗尺の使用が想定されている[41]。

次に、古墳時代の他の遺跡について触れる。

上郡町内の古墳時代の集落跡では、神子田遺跡が唯一の調査例である。一辺６mの方形住居跡が１棟検出されており、埋土より須恵器が出土している[42]。赤穂市では、西有年垣内田遺跡[43]・沖田遺跡[44]・牟礼山田遺跡で古墳時代後期の竪穴住居が検出されている。このほか、古墳時代の遺物が出土している遺跡には、赤穂市・堂山遺跡、有年原・田中遺跡、相生市・下土井遺跡などがある。堂山遺跡からは竈跡が数基検出され、布留式併行期の土器、５世紀末～６世紀前半の須恵器および製塩土器、６世紀の埴輪などの遺物が出土している。

窯跡は３箇所で確認されている。上郡町の正福寺窯址と赤穂市山田奥窯跡および相生市の那波野丸山窯址群である。正福寺窯址は開墾中に発見されたもので、山田奥窯跡は６世紀末以降の須恵器を含む灰原が確認されているのみである。那波野丸山窯址群は工事により発見されたものである。昭和57年、残存した４基が調査され、６世紀初頭から７世紀にかけての窯跡であることが判明した。坏や蓋などの小形品の出土がほとんどであり、最も古い３号窯からは円筒埴輪も出土している。１号窯およびその南側の土壙からは須恵質の鍬先が出土している。また、那波野丸山窯だけでなく、この周辺に古墳時代の窯跡が多く分布することも知られている。

歴史時代

奈良時代の遺跡について記す。上郡町では４箇所の古瓦出土地が知られている。与井廃寺は白鳳期の寺院跡で、現在は数個の礎石をとどめている。軒丸瓦には播磨国府系瓦[45]を含む。現在は破壊されているが、この東方500mに与井瓦窯址がある。与井廃寺と同様の瓦が採集されていることから、与井廃寺に供給する瓦を焼成したものと考えられている。神明寺遺跡は、高田川右岸の段丘上に立地し、奈良時代の瓦が出土する。瓦の主体は播磨国府系のものである。岡山県との境に近い船坂峠東の落地遺跡からも播磨国府系の瓦が出土し、礎石群が存在している。神明寺遺跡は『延喜式』にみえる古代山陽道の高田駅家に、落地遺跡は野磨駅家に比定されている[46]。落地遺跡の駅家推定地から数百m離れた地点では、７世紀初頭の竪穴住居が検出されており、また播磨国府系瓦も出土している[47]。

赤穂市の有年原・田中遺跡では、須恵質の土馬、円面硯などが採集されていた。昭和62年度の調査で7世紀から8世紀にかけての掘立柱建物が数棟検出されている。7世紀後半の建物は基壇状の整地部分に位置するものである。8世紀に属する数棟の建物は、一辺60cmの方形掘り方をもつ。8世紀前後の建物に伴う円面硯も2点出土しており、官衙的な色彩を強くもつ遺跡である[48]。また、沖田遺跡でも土馬の出土をみている。

墓には、赤穂市有年楢原地区の三軒屋遺跡で採集された須恵器の骨壺などが知られる。このほか、奈良時代の土器が出土した遺跡に、赤穂市堂山遺跡、牟礼山田遺跡がある。

平安時代の集落跡には、赤穂市有年原・田中遺跡、有年原・北畠遺跡、牟礼山田遺跡、相生市下土井遺跡、野々宮山遺跡がある。下土井遺跡では、数棟の掘立柱建物、鍛冶遺構などが検出されている[49]。

この時期の須恵器窯跡として、相生市の緑ケ丘窯址群が知られている。相生古窯址群のひとつであり、平安時代後期の須恵器、特に小形の日常品の焼成を行った窯である。昭和41年の調査を期に、昭和54～55年の県教育委員会による調査、その後の松岡秀夫らによる調査をとおして実態が明らかになりつつある。製品は、播磨地方のみならず、平安京、但馬地方へ流通している[50]。

堂山遺跡は、古代塩田の調査例として知られる。平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての揚浜系塩田が検出されている。自然の浜に盛土を行うことで平坦面を形成し、海側に防潮堤を築くものである。これに付随する製塩関係の遺構には、鹹水を作る採鹹土壙、鹹水溜めと想定される曲物土壙などがある[51]。

八祖山（やそやま）経塚は、赤穂市坂越の八祖山の尾根中央部に位置する。山石を積んだ中から陶製経筒らしい円筒形の土器が出土しており、経塚と考えられている。共伴した土器から鎌倉時代のものとされる。

中世山城の調査例に相生市矢野町所在の感状山（かんじょうざん）城がある。標高300mの尾根上に立地し、赤松氏の居城といわれている。昭和60年度から3箇年をかけ、史跡指定のため国庫補助金を受けて調査が実施された。16世紀後半の遺物の出土をみ、直線多郭階段式の縄張りをもつ山城の一部が確認されている[52]。

このほか、近世遺跡の調査例として赤穂城関連遺跡がある。本丸跡では、石垣、池状遺構、庭園の付属施設と思われる遺構や豊富な遺物が検出され、それをもとに天守台、大池泉の復原整備を行っている[53]。

註

(1)福島好和・広山堯道「古代の赤穂」『赤穂市史』第一巻　赤穂市　1981年
(2)松岡秀夫「播磨千種川流域の古代遺跡について」『考古学研究』第9巻第1号　考古学研究会　1962年
松岡秀夫「赤穂市の縄文遺跡」『古代学研究』44　古代学研究会　1966年
松岡秀夫「赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年」『考古学研究』第26巻第2号　考古学研究会　1979年
(3)松岡秀夫「考古学からみた赤穂」『赤穂市史』第一巻　赤穂市　1981年
松岡秀夫ほか「赤穂市の考古遺跡と遺物」『赤穂市史』第四巻　赤穂市　1984年
以下、特に注記しない限り、赤穂市内の遺跡については上記の文献を参考にした。
(4)赤穂市教育委員会『赤穂市西有年（馬路池）埋蔵文化財試掘調査報告書』1980年
(5)河原隆彦「赤穂郡上郡町高田梨ノ木縄文遺跡について」『松岡秀夫傘寿記念論文集　兵庫史の研究』松岡秀夫傘寿記念論文集刊行会　1985年
(6)赤穂市教育委員会『赤穂市尾崎（猪壺谷）埋蔵文化財試掘調査報告書』1980年
(7)山本三郎・岸本一宏ほか「堂山遺跡の遺構と遺物」『赤穂市史』第四巻　赤穂市　1984年
(8)赤穂市教育委員会が1988年調査
(9)置田雅昭・西谷真治「先史・原始時代の相生」『相生市史』第一巻　相生市　1984年
置田雅昭「埋蔵資料一」『相生市史』第五巻　相生市　1989年
(10)高野政昭『赤根古墳群』相生市史編纂室　1983年
(11)松岡秀夫「播磨千種川流域の古代遺跡について」『考古学研究』第9巻第1号　考古学研究会　1962年
(12)上郡町教育委員会『上郡町埋蔵文化財詳細分布調査報告書』1980年
上郡町内の遺跡については主にこの文献を参考にした。
(13)松岡秀夫・高橋久志『兵庫県上郡町別名出土の銅剣』有年考古館　1969年
(14)神戸新聞社会部『祖先のあしあとII』1959年
(15)松岡秀夫「神子田遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和56年度』兵庫県教育委員会　1983年
河原隆彦「赤穂郡上郡町高田梨ノ木縄文遺跡について」『松岡秀夫傘寿記念論文集　兵庫史の研究』松岡秀夫傘寿記念論文集刊行会　1985年
(16)楢崎彰一・上田宏範ほか『兵庫縣赤穂郡西野山第三號墳』有年考古館　1952年
今里幾次「播磨弥生式土器の動態（二）」『考古学研究』第16巻第1号　考古学研究会　1969年
(17)今里幾次「播磨弥生式土器の動態（一）」『考古学研究』第15巻第4号　考古学研究会　1969年
(18)赤穂市教育委員会『西有年畑田遺跡現地説明会資料』1989年
(19)赤穂市教育委員会が1989年調査
(20)兵庫県教育委員会『有年原・田中遺跡現地説明会資料』1987年
赤穂市教育委員会『原田中遺跡現場説明資料』1989年
(21)高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号　日本考古学会　1972年
(22)赤穂市教育委員会が1988年調査
(23)赤穂市教育委員会が1989年調査
(24)松岡秀夫「赤穂市上高野発見の銅鐸鋳型」『考古学研究』第23巻第2号　考古学研究会　1976年
岩崎俊男「赤穂市上高野で発見された銅鐸の鋳型」『月刊文化財』156号　1976年
島田　清『赤穂市上高野の銅鐸鋳型』1976年
(25)松岡秀夫『赤穂市大津堂山遺跡試掘調査報告書』赤穂市教育委員会　1979年

(26)種定淳介「兵庫県におけるいわゆる「山陰系土器」について」『第18回埋蔵文化財研究会　弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について　発表記録』第18回埋蔵文化財研究会事務局　1986年
(27)山本三郎・岸本一宏ほか「堂山遺跡の遺構と遺物」『赤穂市史』第四巻　赤穂市　1984年
(28)松岡秀夫・河原隆彦『相生市下土井遺跡発掘調査報告書』相生市教育委員会・下土井遺跡発掘調査団　1983年
(29)松岡秀夫・河原隆彦『相生市福井池ノ下遺跡発掘調査報告書』相生市教育委員会・福井池ノ下遺跡発掘調査団　1983年
(30)中浜哲朗「東古浜裏山遺跡」『姫路古代誌』No.7　姫路古代文化研究会　1960年
(31)平井松午・高橋　学・五十嵐　勉「矢野川流域の灌漑水利と開発」『徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）』第23巻　1988年
(32)櫃本誠一「千種川流域の古墳」『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会　1988年
(33)櫛崎彰一・上田宏範ほか『兵庫縣赤穂郡西野山第三號墳』有年考古館　1952年
(34)松岡秀夫・河原隆彦ほか『中山古墳群発掘調査報告』西野山古墳調査研究会　1973年
(35)松岡秀夫『相生市陸池ノ上古墳発掘調査報告書』相生市教育委員会・陸池ノ上古墳発掘調査団　1980年
(36)川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会　1978年
(37)田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
(38)松岡秀夫『相生市大塚ハザ古墳調査報告書』相生市教育委員会・大塚ハザ古墳調査団　1981年
(39)高野政昭『壺根古墳群』相生市史編纂室　1983年
(40)太田三喜『山崎山古墳群』相生市史編纂室　1984年
(41)竹谷俊夫・日野　宏『若狭野古墳』相生市史編纂室　1982年
(42)河原隆彦「神子田遺跡（2）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会　1987年
(43)赤穂市教育委員会『西有年畑田遺跡現地説明会資料』1989年
(44)赤穂市教育委員会が1989年に調査
(45)今里幾次『姫路市辻井遺跡―その調査記録―』1971年
(46)今里幾次「山陽道播磨国の瓦茸駅家」『兵庫県の歴史』第12号　兵庫県　1974年
(47)兵庫県教育委員会が1989年度調査
(48)兵庫県教育委員会『有年原・田中遺跡現地説明会資料』1987年
(49)松岡秀夫・河原隆彦『相生市下土井遺跡発掘調査報告書』相生市教育委員会・下土井遺跡発掘調査団　1983年
(50)森内秀造『相生市・緑ケ丘窯址群』兵庫県教育委員会　1986年
(51)山本三郎・岸本一宏ほか「堂山遺跡の遺構と遺物」『赤穂市史』第四巻　赤穂市　1984年
(52)河井孝幸・石塚太喜三ほか『感状山城第一次発掘調査概報』相生市教育委員会　1986年
宮本長二郎・河原隆彦ほか『感状山城第二次発掘調査概報』相生市教育委員会　1987年
河原隆彦・石塚太喜三ほか『感状山城第三次発掘調査概報』相生市教育委員会　1988年
(53)鈴木　尤『史跡赤穂城本丸発掘調査報告書Ⅰ』赤穂市教育委員会　1984年
澤田　亨『史跡赤穂城本丸発掘調査報告書Ⅱ』赤穂市教育委員会　1985年
宮崎素一・岡本欣子『史跡赤穂城本丸発掘調査報告書Ⅲ』赤穂市教育委員会　1986年

第 3 章　調査の結果

第 1 節　調査の概要

遺跡の立地する赤穂市周世地区は、地形的には、古代末頃に形成された完新世段丘面上にあたる。この完新世段丘面には土砂の供給が比較的少ないため、かつての土地の微起伏が完全に埋積されることなく残存している。また、かつての生活面の深度が比較的浅いことから、現地表面の微地形分析によって、いくつかの微高地の存在が予想された（第１図）。

この微地形分析からみた当地区の地形は、山地を除けば、居住域・墓域に利用されたであろう自然堤防状微高地と、水田としての土地利用が考えられる湿地から成っていることがわかる。自然堤防状微高地は、千種川から供給される土砂によって形成されたもので、湿地は、黒谷・水木原両山の谷からの流れ（現在の黒谷川）が、この自然堤防状の微高地によって出口を塞がれた格好になった結果生じたものである。６・９次に調査を行ったＩ区は、３次調査時の微地形分析によれば谷状の地形と想定された（第１図）が、調査の結果、II区との間に浅い谷を挟む微高地に該当することが判明した。

３箇年にわたって調査を行ったバイパス予定地は、最も古く形成されたであろう２つの自然堤防状微高地を縦断する位置にあたっていた。

部分的な相違はあるが、この調査区内には４つの生活面が存在している。第１章第２節で述べたように、複数の生活面にあるものを同一の面で検出した箇所があるが、埋土・遺物の検討等から、４つの生活面と、その所属時期を決定した。以下、これらの生活面の層位と、それぞれの面で検出された主な遺構を示す。各生活面で確認された遺構の概略は、第２～４節の冒頭に述べることとする。

弥生時代中期から後期前半

Ｉ区では、この時期に相当する層は確認されていない。II～IV区では16層がこれに相当するが、II区11ライン以北およびIV区南端においては16層の堆積が認められなかったため、これらの場所では、当地方で一般に、黄褐色あるいは緑灰色の地山とされる17層上面がこの時期の生活面と捉えられた。

この面に属する遺構は、掘立柱建物２棟（掘立柱建物３・５）、畝状遺構２か所（畝状遺構１・２）、土壙６基（土壙12・14・15・16・19・22・30）および溝（溝13）である。

弥生時代後期後半

Ｉ区では、12・13層がこの時期の生活面である。Ｉ区の16ライン以南では13層上面がなだらかに落ち、11ラインにかけて浅い谷状の地形を呈していることが分かり、この部分では遺構は

確認されていない。II～IV区では14層上面がこの時期の生活面である。しかし、II区の11ライン以北では依然として17層上面にこの時期の遺構が営まれており、土砂の堆積は顕著でないことが分かる。

この面に属する主な遺構は、竪穴住居5棟（竪穴住居1～5）、掘立柱建物2棟（掘立柱建物1・2・4）、土壙（土壙1～11・13・17・18・20・21・23・24～29）、溝（溝1～12・14・15）などである。

古墳時代から室町時代

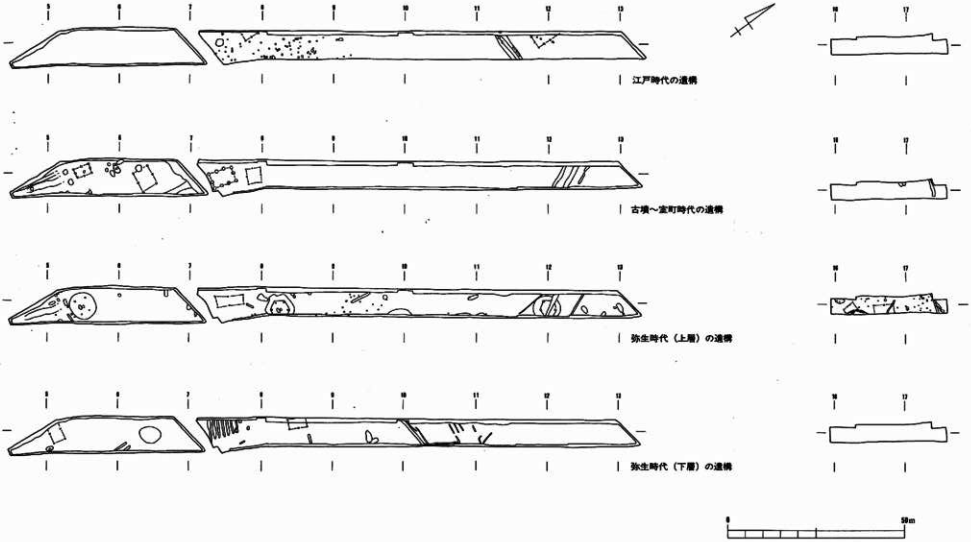
I区南半では、先述の浅い谷状地形を埋める6～9層上面がこれにあたり、II区～IV区では12・13層上面がこの時期の生活面である。13層は、II区の7ラインと8ラインの間にのみ認められた土層である。

この面に属する主な遺構は、掘立柱建物4棟（掘立柱建物6～9）、土壙（土壙31～34）、溝（溝16～19）、柱穴（柱穴1～9ほか）である。なお、III区南端の2棟の建物（掘立柱建物6・7）は、13層上面から切り込むものであり、IV区の12層上面で検出された諸遺構よりも古いことが分かる。また、平面的には検出していないが、調査区西壁の土層断面観察によって、III区の9ライン付近に盛り土による畦畔状の隆起が認められたため、水田あるいは畑がこの微高地上で営まれていた可能性がある。8ライン以北には明確な遺構が認められず、平坦な面が続くことは、このことと矛盾しない。

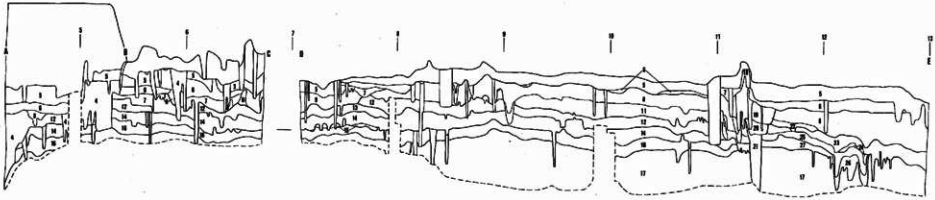
江戸時代

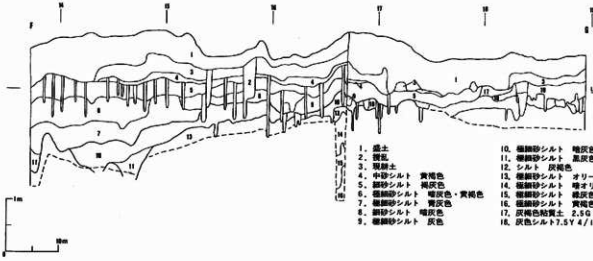
II・III区の8層上面が、この時期の生活面である。この層はI区では確認されていない。また、IV区では南端の一部を除き、多くは削平によって残存していない。これに相当する層も他に確認されていないため、平面的な調査は、II・III区においてのみ実施した。

この面に属する主な遺構は、掘立柱建物2棟（掘立柱建物10・11）、土壙（土壙35～39）、溝（溝20・21）、井戸、柱穴（柱穴10・11ほか）である。



第５図　時代別検出遺構全体図





1. 盛土
2. 復乱
3. 現耕土
4. 中砂シルト　黄褐色
5. 細砂シルト　褐灰色
6. 極細砂シルト　暗灰色・黄褐色
7. 極細砂シルト　青灰色
8. 細砂シルト　暗灰色
9. 極細砂シルト　灰色
10. 極細砂シルト　暗灰色
11. 極細砂シルト　黒灰色
12. シルト　灰褐色
13. 極細砂シルト　オリーブ色　無遺物層
14. 極細砂シルト　暗オリーブ色　〃
15. 極細砂シルト　橄灰色　〃
16. 極細砂シルト　黄褐色　〃
17. 灰褐色粘質土　2.5GY4/1
18. 灰色シルト7.5Y4/1

1. 盛土
2. シルト質極細砂　2.5Y4/1　黄灰
3. 極細砂質シルト　2.5Y7/3　浅黄
4. 復乱
5. 現耕土　7.5Y5/1灰(1a層)
6. 極細砂質シルト　2.5Y8/1　灰白(1b層)
7. 復乱(8層をまぜこむ)
8. 粗粒シルト　10YR5/1　褐灰
9. 粗粒シルト　10YR7/3　にぶい黄橙(2b層)
10. シルト　10YR5/3　にぶい黄褐(盛土状)(3a層)
11. 粗粒シルト　7.5YR4/1　褐灰
12. シルト　10YR5/3　にぶい黄褐
13. シルト　7.5YR4/1　褐灰(4a層)
14. 粗粒シルト　5Y6/1　灰　(5b層)
15. 粗粒シルト　10YR5/2　灰黄褐(6a層)
16. 粗粒シルト　10YR3/1　黒褐(6b層)
17. シルト質粘土　10GY6/1　緑灰　無遺物層(6b層)
18. 板石(現地面の基礎)
19. 極細砂質シルト　2.5Y7/1　灰白　井戸埋土
20. 極細砂質シルト　2.5Y7/1　灰白　〃
21. 極細砂質シルト　2.5Y7/2　灰黄　〃
22. 極細砂質シルト　2.5Y6/2　灰黄
23. 粗粒シルト　10YR3/1　黒褐
24. 粗粒シルト　2.5Y7/1　灰白
25. 粗粒シルト　10YR4/1　褐灰
26. 粗粒シルト　2.5Y7/1　灰白
27. 粗粒シルト　10YR3/2　黒褐

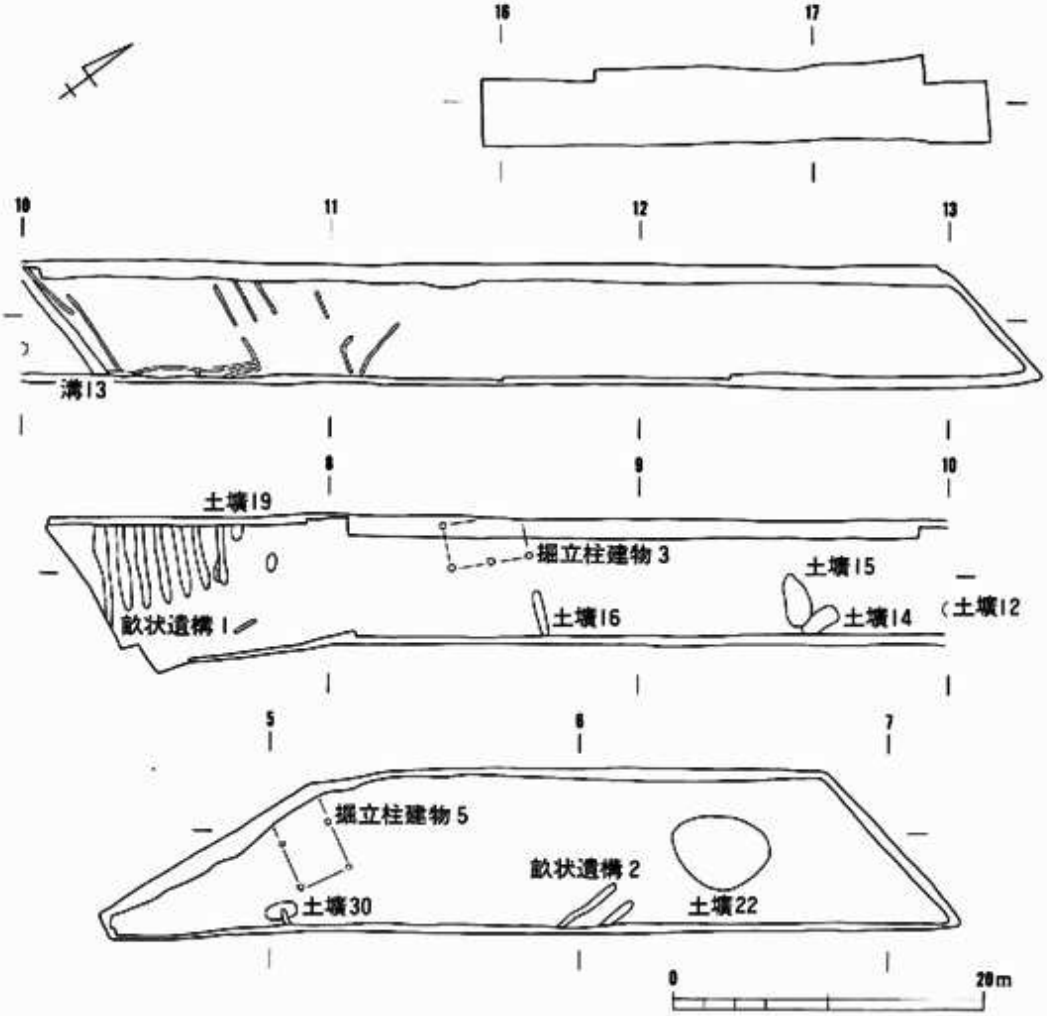
第8図　土層断面図

第 2 節　弥生時代の遺構と遺物

1．調査の概要

弥生時代の生活面は、II区中央以北では１面であるが、それより南の調査区においては２面にわたって存在し、下層には中期から後期前半、上層には後期後半の時期が与えられる。

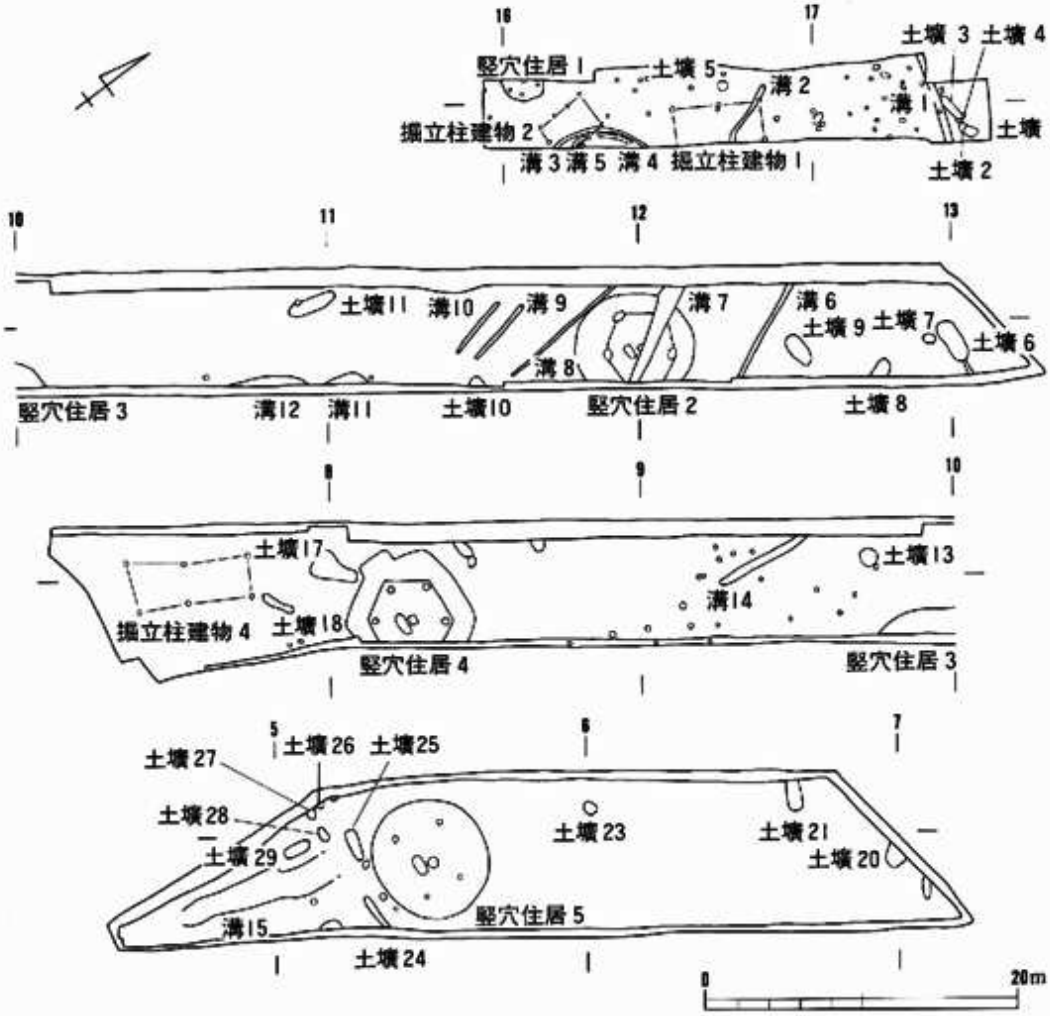
下層で検出された遺構のうち、中期に属するものは掘立柱建物３、土壙12・30である。それ以外は、土器の出土していないものを除けば後期前半と考えてよく、畑と思われる畝状遺構が２箇所で検出されている。畝状遺構からさほど遠くない位置に住居が設けられたであろうが、この時期のものは検出されていない。土壙22からは200個休近くの土器が出土している。



第７図　弥生時代（下層）遺構配置図

上層で検出された遺構は、後期後半に属するものである。竪穴住居５棟がほぼ等間隔に並び、掘立柱建物が３棟、土壙、溝、柱穴が検出された。竪穴住居には、平面形が六角形を呈するもの（竪穴住居４）、屋内高床部をもつもの（竪穴住居２・４）がある。土壙の性格については不明な点が多いが、形態・規模から、土壙墓の可能性のあるものが３基ある（土壙３・６・９）。いずれも多くの土器を埋土中層以上に含むものである。Ｉ区で土器棺が１基検出されており、これは今回の調査区内での確実な唯一の埋葬施設である。土壙13からは製塩土器・炭などが出土しており、焼き塩の生産に関わるものと考えてよい。遺物には、土器の他に鉄器（竪穴住居２・４、12層）、敲石・砥石などの石器がある。

以下、個々の遺構・遺物について説明を加える。



第８図　弥生時代（上層）遺構配置図

2．弥生後期土器の型式分類

出土土器の大半を占める弥生時代後期の土器について、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器（以下、「形土器」は省略する）などに分類し、おのおのについて、以下のように細分して記述していくこととする。

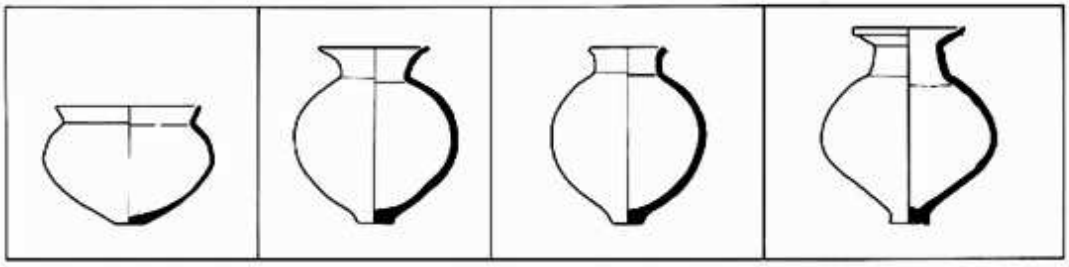
壺

広口壺A　球形に近い体部と、直線的に外傾する口頸部をもつもの。

広口壺B　球形に近い体部と、外反する口頸部をもつもの。

広口壺C　球形に近い体部と、直立ないし外傾する頸部、外反する口縁部をもつもの。

広口壺D　直立ないし内傾する頸部に、直線的に外傾する口縁部をもつもの。肩部、口頸部には明瞭なくびれをもつ。



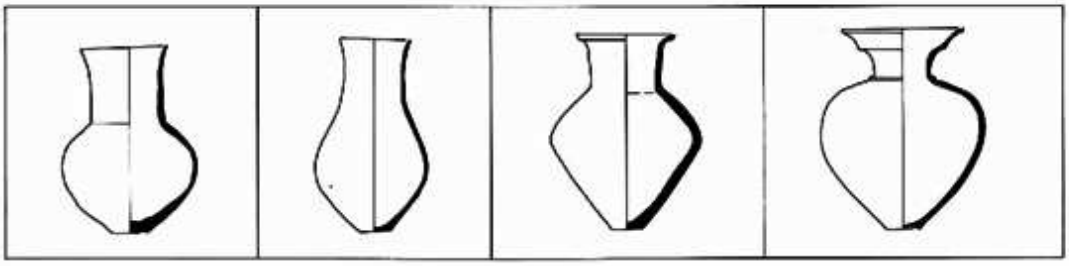
広口壺A　広口壺B　広口壺C　広口壺D

長頸壺A　球形に近い体部と直線的な長い頸部をもつ。肩部と頸部のくびれが明瞭なもの

長頸壺B　長い頸部と肩部との境界に明瞭なくびれを欠くもの。

長頸壺C　外傾する長い頸部に、水平に近くのび、端部をつまみあげた口縁部をもつ。体部は、最大径が中位にある算盤玉状を呈する。

二重口縁壺　広口壺B・Cの口唇部に粘土帯を追加することによって形成されたもの。



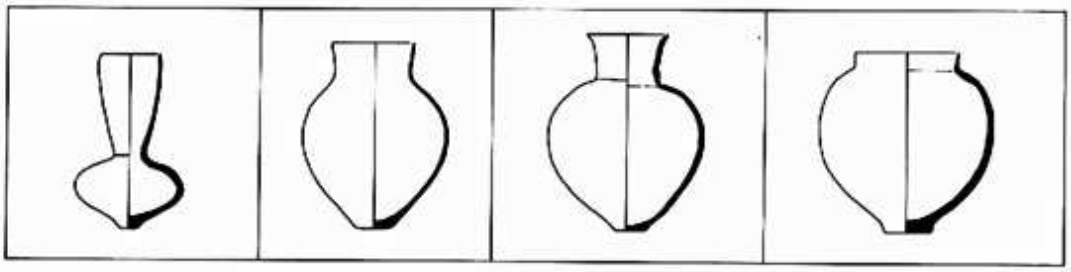
長頸壺A　長頸壺B　長頸壺C　二重口縁壺

細頸壺　　直立ないしやや内湾する細い口頸部をもつもの。体部は偏球形と思われる。

短頸壺A　　球形に近い体部に、直立する口頸部をもつ。口頸部高が、器高の1/4より小さい点で長頸壺と区別する。

短頸壺B　　球形に近い体部に、外反する口頸部をもつ。口頸部高が、器高の1/4より小さい点で長頸壺と区別する。

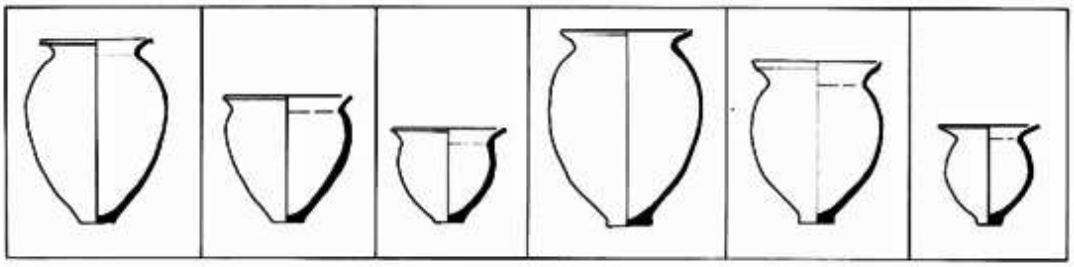
短頸直口壺　　球形に近い体部に、ごく短く直立する口頸部をもつ。



細頸壺　　短頸壺A　　短頸壺B　　短頸直口壺

甕

甕の分類については、調整方法に主眼を置き、A：外面にハケ、内面にヘラケズリを施すもの、B：外面にタタキ、内面にハケを加えたものの二者に分け、さらに器形による分類、1：体部径が口縁部径をしのぐもの、2：体部径と口縁部径がほぼ等しいもの、3：体部径が口縁部径よりも小さいものの3つに分類し、両者の組み合わせにより、A_1・A_2・A_3・B_1・B_2・B_3の6型式を設定する。



甕A_1　　甕A_2　　甕A_3　　甕B_1　　甕B_2　　甕B_3

鉢

鉢A　　やや偏平の半球状を呈する体部をもつもの。口縁部径と器高の比は約2：1である。

鉢B　　広口壺Aに似る小形の鉢。外方に直線的にのびる口縁部と、上位に最大径がある体部をもつ。

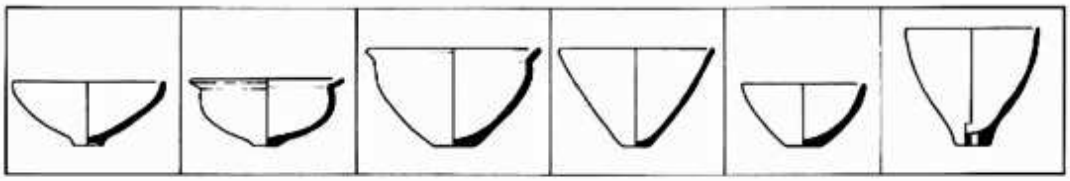
鉢C　　外方に直線的にのびる口縁部と、張りのない体部をもつやや大型のもの。

鉢D　口縁部・体部が直線的に外傾するもの。

鉢E　口縁部・体部が内湾してたちあがる半球状のもの。器高と口縁部径はほぼ等しい。

鉢F　有孔鉢。やや内湾する口縁部をもつ。器高が口縁部径をしのぐもの。

鉢G　台付きの鉢。



鉢A　鉢B　鉢C　鉢D　鉢E　鉢F

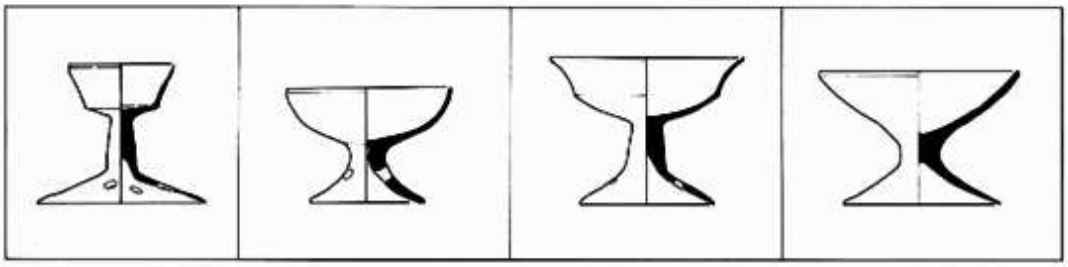
高坏

高坏A　短い体部に、直線的にたちあがる口縁部をもつ。口縁部径が15cm以下の小型のものに多い。

高坏B　浅い椀状の坏部を有するもの。口縁部が直線ぎみに立ち上がるものも含める。

高坏C　強く外反あるいは外傾する口縁部をもつもの。体部との稜線は明瞭である。

高坏D　あまり内湾しない椀状の坏部と、直線的な円錐形の脚部をもつもの。

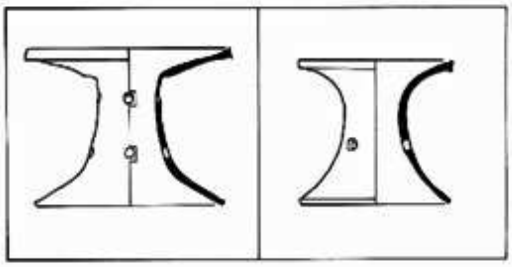


高坏A　高坏B　高坏C　高坏D

器台

器台A　口縁部・体部・裾部が曲線的につながるもの。体部には1段に3孔を穿つ。

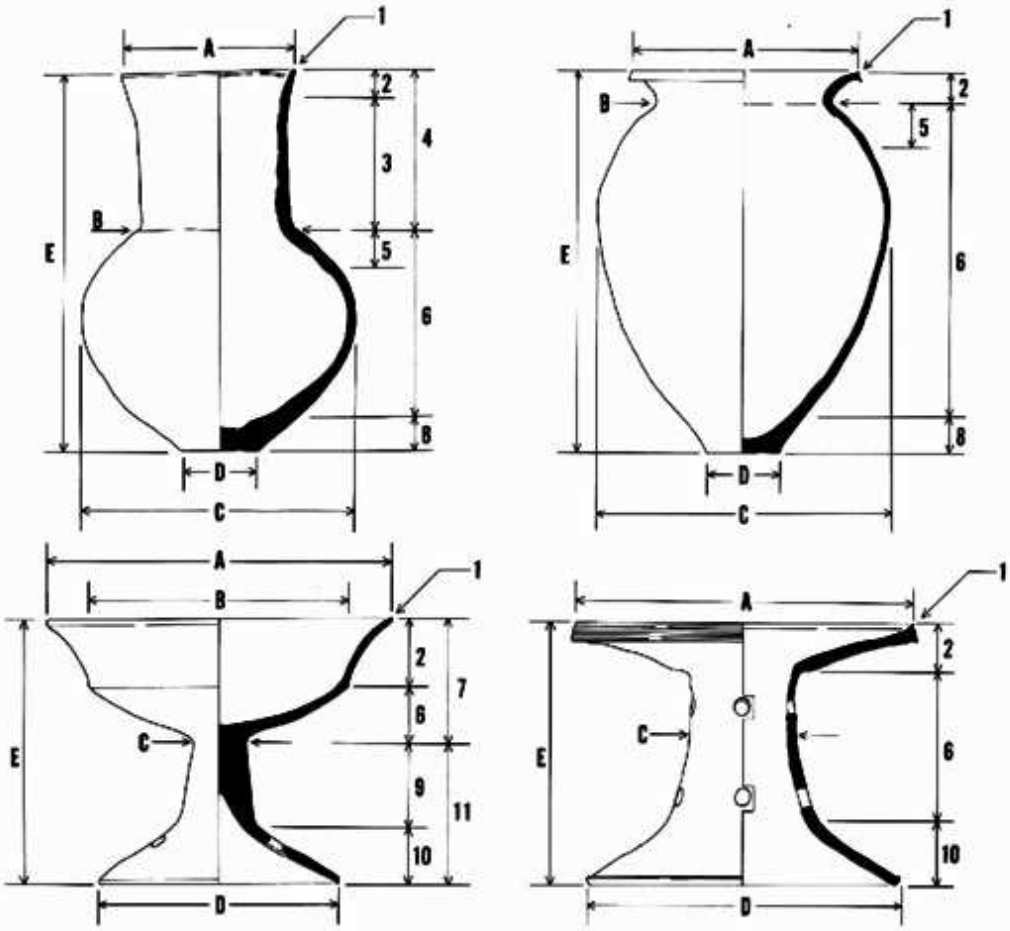
器台B　口縁部・体部・裾部がそれぞれ屈折して接合するもの。体部には2段あるいは3段に4孔を穿っている。



器台A　器台B

3．出土土器の観察

土器の観察結果を記述するにあたり、土器細部の名称を以下のように統一し、観察表の計測部分（表のA～E）を図示する。



1．口唇部
2．口縁部
3．頸部
4．口頸部
5．肩部
6．体部
7．坏部
8．底部
9．柱状部
10．裾部
11．脚部

第9図　弥生後期土器の細部名称と観察表の計測部位

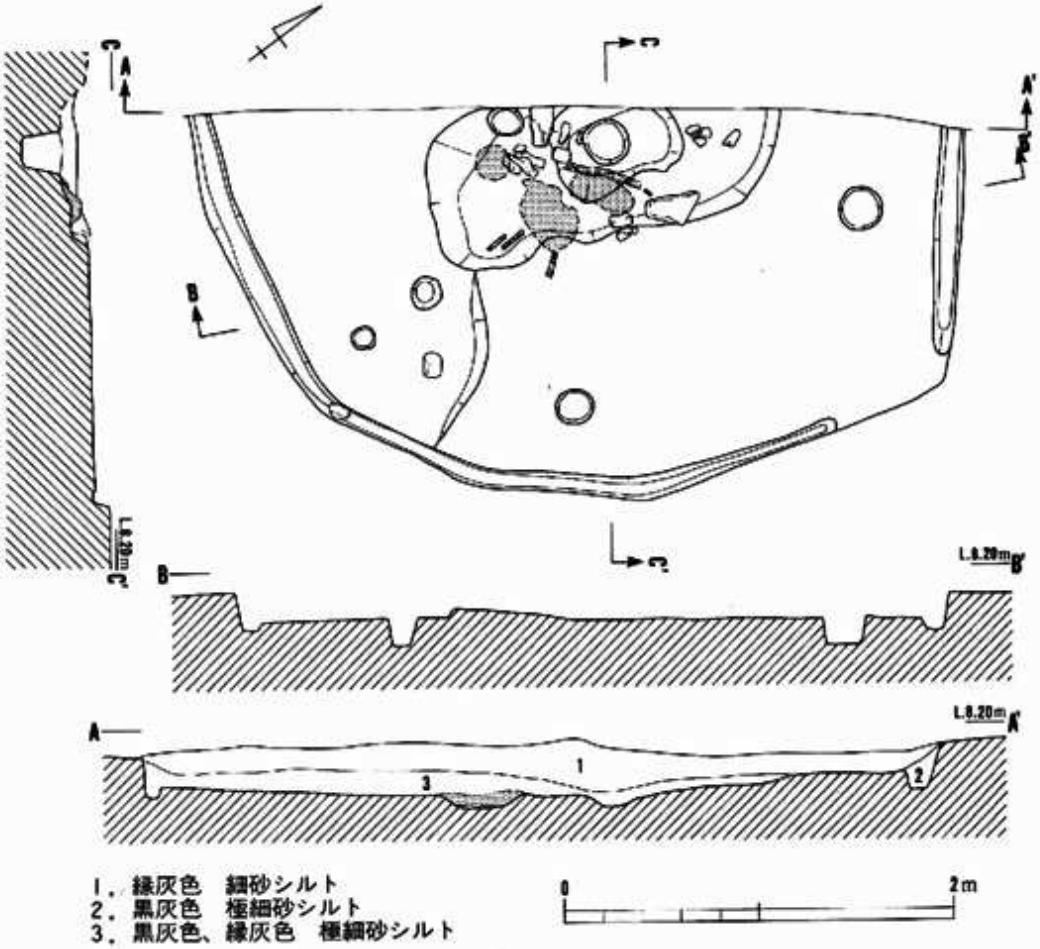
4．竪穴住居とその遺物

竪穴住居１

Ⅰ区西端に位置し、10層上面にて住居跡の東側半分を検出した。住居跡の東側に近接して掘立柱建物１・溝３・溝５がある。西側部分は調査区外になるため規模・形態は不明である。検出した住居跡の東側部分の状況から判断すると計測可能な最大長は4.04mを測り、壁高は北壁で15cm、南壁で13cmを測る。平面形はいびつな五角形ないしは六角形を呈すると推察される。北東隅を除いた壁際の床面には幅７～15cm、深さ５cmの断面Ｕ字形の周壁溝が巡る。

住居跡の南西部分では床面に段が形成され、南側が深いところで６cm低くなっている。住居跡の全容が不明なため確定はできないが、屋内高床部と考えている。

北・南・東側の３箇所で柱穴を検出した。柱穴のうち東側のそれは住居跡の埋土を切り込ん



第10図　竪穴住居１

でいるもので、本遺構には伴わないため、北側・南側の２穴が主柱穴と判断される。北側の柱穴は直径25cm、深さは15cmを測り、埋土に焼土が混入していた。南側の柱穴は直径17cmと小さく、床面からの深さも15cmと北側の柱穴と同様浅い。両柱穴の間隔は2.3mである。

住居跡のほぼ中央と思われる位置に不整楕円形の中央土壙が掘られている。上段の規模は1.8×0.75mを測る。中段は0.65×0.5m、深さ６cmの不整楕円形の掘り込みである。下段の掘り込みは直径24cm、深さ34cmの円形を呈する。中央土壙底部までの深さは32cmを測る。中央土壙の埋土は、上層に焼土、下層に炭層の堆積となっている。上段の掘り込み部分には３箇所の焼土塊が認められ、その周辺には炭化材が多数検出された。また、上段掘り込み部分の東側には30×15cm大の台石が置かれていた。

中央土壙ないしその付近の焼土塊・炭化材の出土状況は、この住居跡が焼失した痕跡とも捉えられるが、焼土塊・炭化材が中央土壙内およびその周辺に集中している点を考えると、中央土壙が炉として機能していたと推察される。

遺物は弥生土器であり、甕・鉢が出土している。とくに中央土壙上段の掘り込み部分では甕（８）がほぼ完存の状態で出土している。他の土器についても床面直上ないしはそれに近い形で出土し、本住居跡に伴う遺物と判断される。

出土遺物には、椀、甕、壺、鉢がある。

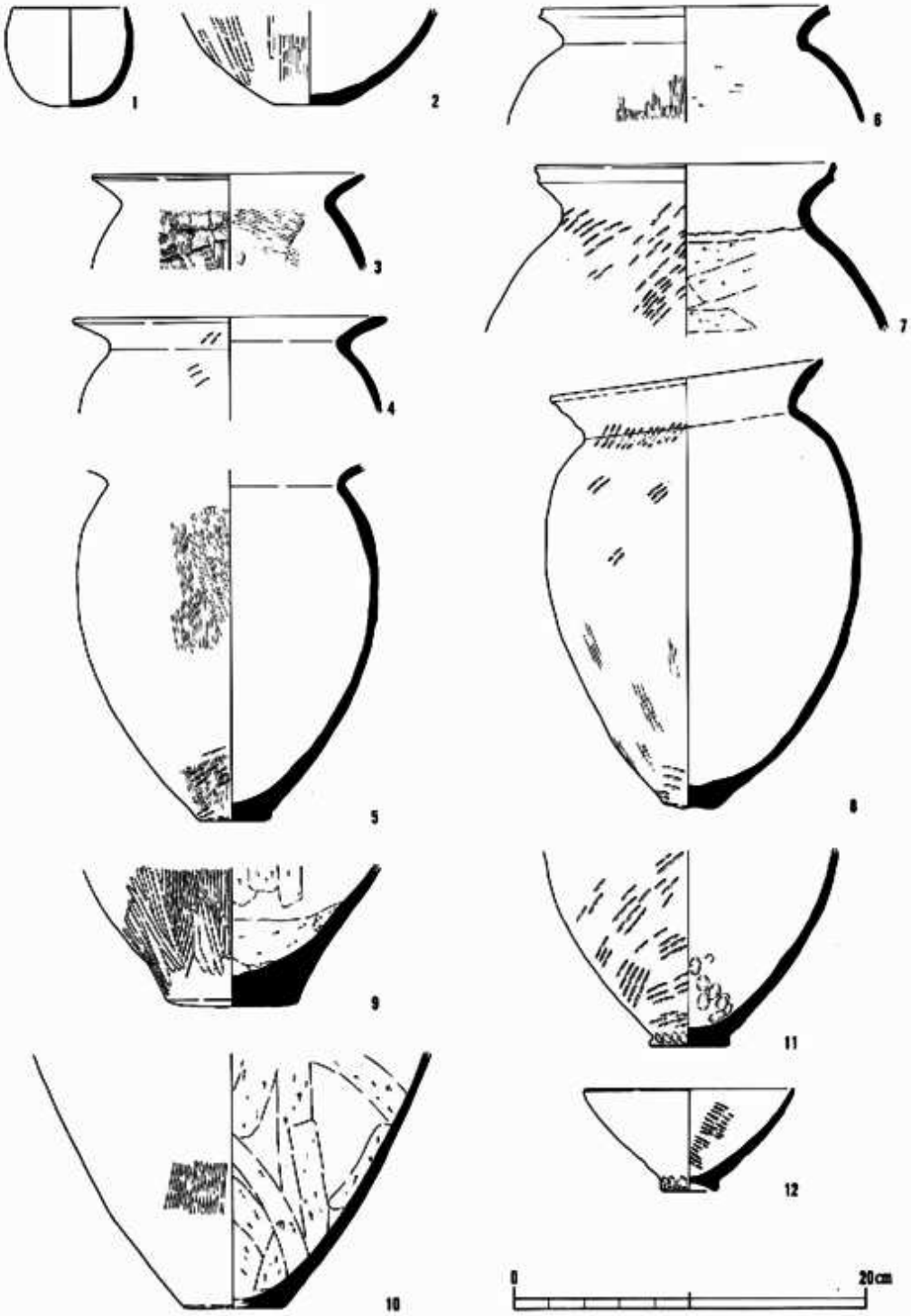
１は平底から内湾しながら立ち上がる体部をもつ小型の椀である。当遺跡では他に出土例がないものである。内外面ともナデ仕上げである。

２は体部下半の壺の破片である。わずかな平底と球形に近い体部をもち、体部外面には縦方向のヘラミガキがみられることから、土壙22出土例と同様な形態を示す広口壺Ａの破片であるとするのが妥当であろう。

甕のうち、３～５は口縁部径と体部径がほぼ等しく、６～８は体部径が口縁部径を凌ぐものである。口縁部にはどれも横方向のナデが観察されるが、７・８は口縁部に強いナデを加えることにより、端部を上方につまみ上げている。体部外面の調整は、７を除くすべてにタタキののち縦方向のハケメが施されている。口縁部外面にタタキの施されたものがみられる（４・７・８）。体部内面の調整については、３にハケが、６・７には逆時計回り横方向のヘラケズリが観察される。これらの中に底部の形状の判明するものは多くないが、11がやや突出した形態を示しているほかは、底部から体部への移行はなだらかなものばかりである。

９は壺の底部と考えられる。体部外面には縦方向のハケメののち縦方向のヘラミガキが部分的に施されている。体部内面および底部外面にはヘラケズリが認められる。

12は小さく突出する底部と斜め上方に伸びる体部をもつ鉢である。体部内面には斜め方向のハケメが施される。



第11図　竪穴住居１出土遺物

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
1	壺	(6.4)	—	—	(2.4)	5.6	1/2	10YR8/2	灰白	10YR8/4	浅黄橙
2	壺	—	—	—	3.7	—	底部完存	7.5YR4/3	褐	10YR7/2	にぶい橙
3	甕	(15.6)	(12.4)	—	—	—	1/4	10YR4/4	褐	5YR6/6	明赤褐
4	甕	(17.8)	(13.8)	—	—	—	1/8	5YR8/3	淡橙	5YR8/3	淡橙
5	甕	—	(14.0)	(17.3)	4.2	—	1/4、底部は完存	7.5YR6/2	灰褐	7.5R4/6	赤
6	甕	(16.4)	(14.0)	—	—	—	1/4	10YR7/4	にぶい橙	7.5YR8/4	浅黄橙
7	甕	(17.0)	(14.3)	—	—	—	1/4	10YR8/1	灰白	7.5YR6/6	橙
8	甕	(15.3)	(12.3)	(17.7)	3.0	24.3	1/2、底部は完存	10YR3/1	黒褐	10R5/8	赤
9	甕	—	—	—	7.3	—	底部完存	10YR3/1	黒褐	7.5YR6/6	橙
10	甕	—	—	—	(5.6)	—	1/2	10YR7/2	にぶい橙	2.5YR7/3	淡赤橙
11	甕	—	—	—	4.6	—	底部完存	10YR6/2	灰黄褐	7.5YR5/3	にぶい褐
12	鉢	11.8	—	—	3.1	5.8	口縁部3/4	10YR8/1	灰白	10YR7/1	灰白

竪穴住居 2

II区北端近くで検出されたが、東端が調査区外にあるため、全容は確認できない。また北半は、溝5・6に切られるため、周壁溝が溝間で検出されただけである。

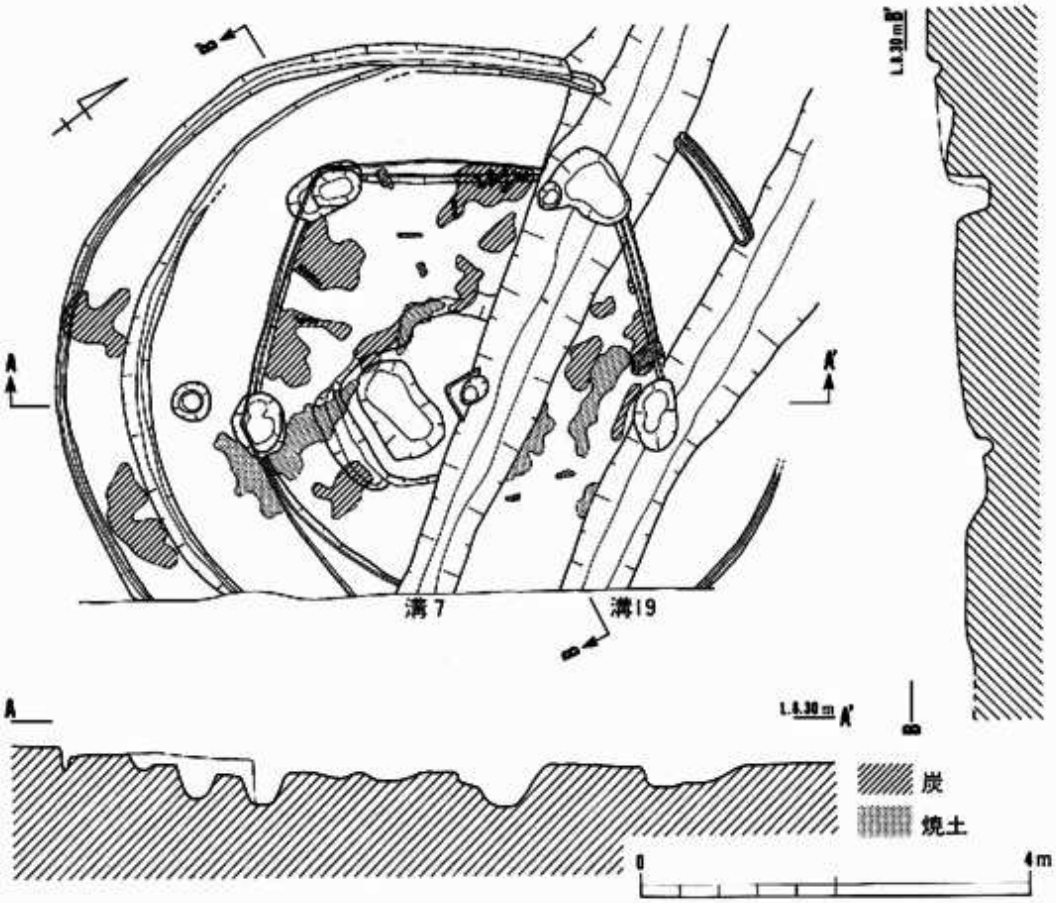
住居跡は周壁溝からみて2棟の重なりが認められるが、柱穴の位置が変わっていないこと、柱穴に引き抜きが認められること等から、建て替えと判断できる。建て替え前の住居を1次住居、建て替え後を2次住居と呼ぶこととする。

1次住居は南北約6.8m、東西約5.6m以上の規模を測る円形住居跡で、内面が多角形となる高床部をもつ。周壁下には一部確認できないところもあるが、幅18～28cm、深さ12cmの周壁溝が巡っている。西から北にかけては2次住居の周壁溝に切られて検出された。

床面周囲には、内面が一辺約2.5mの多角形となる高床部が設けられているが、東側では検出できなかったため、角数は不明である。検出された高床部の内側を延長すると、五角形となる。高床部は約10cmの高さまで確認でき、内側の床面との境には、高床部の壁を保護していたと思われる幅狭い溝が確認されている。

床面の対角間は約4.3mを測る。柱穴は高床部内側のコーナーで4本が検出されたが、高床部内側が五角形とすれば、主柱は5本になる。柱穴はいずれも不整形な楕円形を呈し、深さは19～29cmを測る。柱痕跡は確認されず、掘り方の形状からみて、引き抜かれた可能性が高い。中央土壙は検出できなかった。他遺跡の例からみて、中央土壙が設けられていなかったとは考えにくく、2次住居に伴う中央土壙、楕円形土壙が本来この住居に伴うものであり、建て替え後もそのまま利用された可能性が高い。

2次住居は、1次住居を南に約90cm拡張した結果、規模は南北約7.7mとなるが、北側は拡張



第12図　竪穴住居2

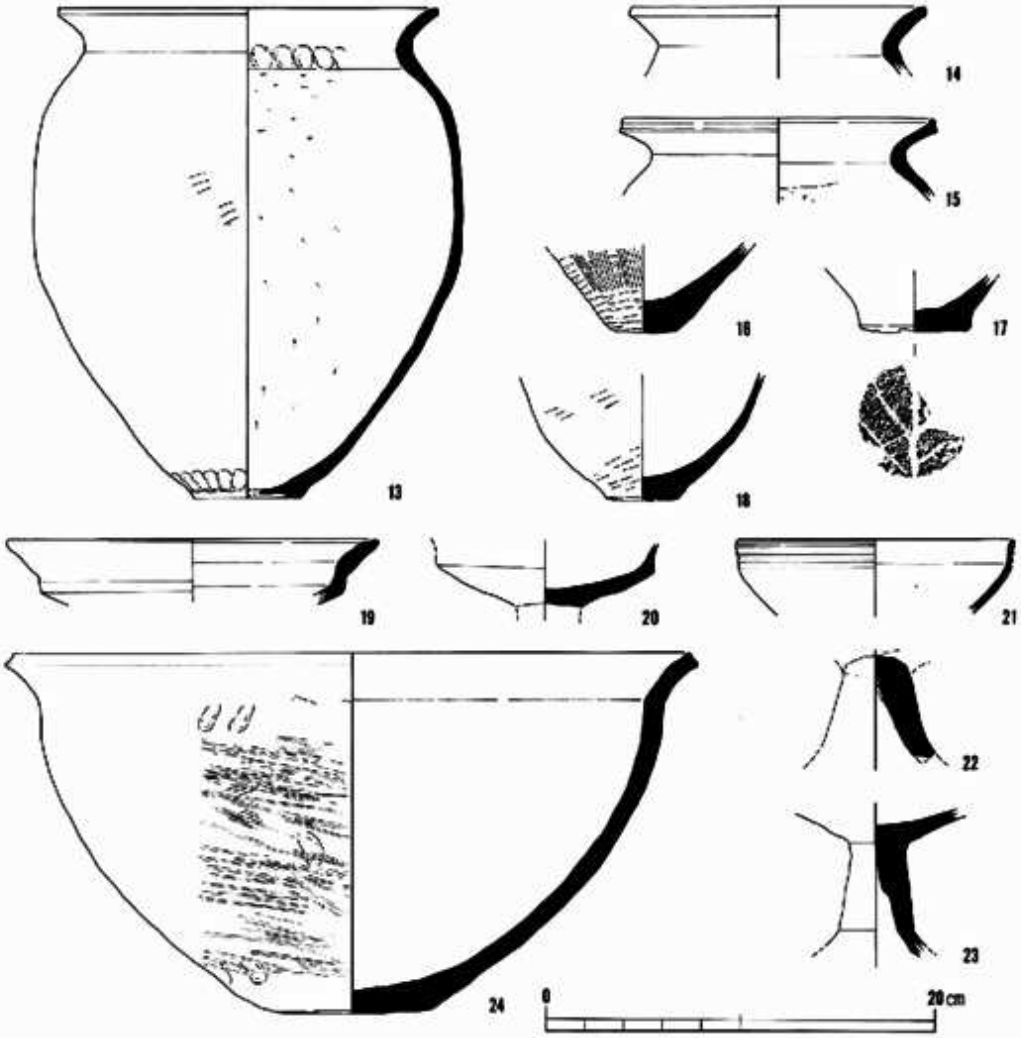
されていないため、平面形は南北に長い楕円形を呈する。拡張は高床部のみであり、最大幅約1.9mを測る高床部を形成している。また、高床部の拡張は1次住居の高床部に黄褐色シルトを盛り土することによるもので、床面からの高さは最高20cmを測る。

床面は検出された部分では南側の一辺を除いて、ほぼ建て替え前と同じであるが、南側の一辺は東半で、建て替え前より外に膨れている。したがって東側部分では床面が拡張された可能性があり、高床部内側の形状は五角形から六角形に変化した可能性もある。

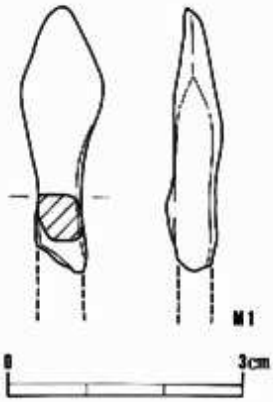
柱穴は1次住居と同じ位置であるが、検出された4本の内、3本の柱は不整形な楕円形となっている。残る1本は直径約20cmの円形を呈していることから、不整形な3本の柱穴は1次住居と同様に引き抜かれた可能性が高い。

また、周壁はかなり焼土化しており、高床部を含む床面全体に炭化材や灰層が認められていることから、住居跡が火を受けたことは確実である。しかし、床面に遺存していた遺物は極めて少なく、柱の引き抜きの形跡が認められることから、住居の焼却が行われた可能性がある。

床面中央には、長径約108cm、短径約60cm、深さ約10cmの、浅い皿状の底面をもつ楕円形の上壙と、その北側に2段に掘り込まれた中央土壙が設けられている。ただ、中央土壙は溝6に切られており、全容は検出されなかった。上段は一辺約30cm以上、深さ約5cmの方形に掘り込まれ、その中央が長径約30cm、短径約20cm、の楕円形に掘り込まれていた。内部には炭化物を多く含む暗緑灰色シルトが堆積していたが、壁などに焼土化は認められていない。中央土壙の周囲は周辺の床面より一段高く、楕円形土壙の周囲は畦畔状に高くなっていた。ともに床面を削り残したものである。またこの高まりは楕円形土壙と中央土壙の境付近がくびれた形状を呈し、楕円形土壙の周囲が中央土壙のそれよりも高くなっている。これを、時間的な差によるものとみれなくはないが、それを明確に裏付けるものもなく、他の遺跡例と同様、両土壙がセットと



第13図　竪穴住居2出土遺物（1）



第14図　竪穴住居２
出土遺物（２）

なって機能していたものと捉えておく。また、この楕円形土壙周囲の畦畔状の高まりの西側には、中央土壙と平行して、長径約115cm、短径約25cm、深さ８cmを測る長楕円形の土壙が認められたが、この土壙の性格については不明である。中央土壙と楕円形土壙、長楕円形土壙の周囲の床面は焼土化している部分があるが、上壙の壁は焼けていなかった。

出土遺物には、甕、高坏Ｂ・Ｃ、鉢Ｃがある。

15は口唇部に端面をもち、そこに凹線を１条巡らす。13・16・18には体部外面にタタキが施され、16についてはその上に縦方向のハケメが認められる。17は、壺の底部の可能性もある。葉脈の圧痕が残る。

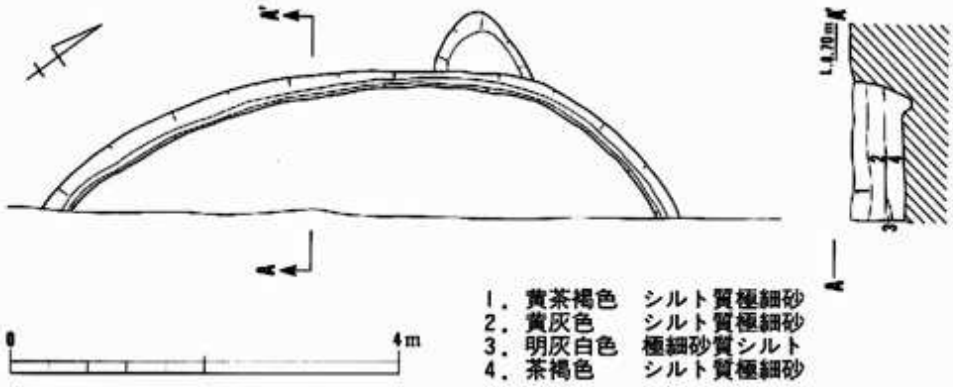
19は、高坏Ｃである。他の高坏Ｃに比べて異なる点は、口縁部の屈曲が直線的であること、器壁が厚いことである。21は、斜め上方に立つ体部に、直立する短い口縁部が付く。口縁部には４条の凹線が巡る。柱状部の形状に差異があり、22のように、裾部になだらかに移行するもの、裾部との境に屈曲をもつもの（23）がある。

24は鉢Ｃである。口唇部に端面をもつ。体部外面の調整は横方向のヘラミガキである。

Ｍ１は、１次住居の周壁溝から出土し、残存長3.4cm、最大幅1.1cm、厚さ0.6cmの鉄器片である。先端が片方に若干反るため、刃部の幅が厚いが、鉋と考えておく。

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調	
		A	B	C	D	E		内面	外面
13	甕	(19.4)	(16.8)	(22.1)	(5.5)	(24.9)	1/2	5YR8/4 淡橙	7.5YR8/4 浅黄橙
14	甕	(15.0)	(12.0)	—	—	—	1/6	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙
15	甕	(15.7)	(12.9)	—	—	—	1/8	2.5Y6/1 黄灰	10YR8/2 灰白
16	甕	—	—	—	3.5	—	底部完形	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白
17	甕	—	—	—	(5.7)	—	1/2	2.5YR7/4 淡赤橙	2.5YR5/1 赤灰
18	甕	—	—	—	3.7	—	底部完形	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙
19	高坏	(18.9)	(15.5)	—	—	—	小片	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙
20	高坏	—	(11.2)	(3.3)	—	—	小片	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙
21	高坏	(14.0)	(13.8)	—	—	—	小片	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙
22	高坏	—	—	3.5	—	—	柱状部のみ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙
23	高坏	—	—	2.8	—	—	柱状部のみ	5YR7/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙
24	鉢	(35.0)	(32.4)	—	(8.2)	(18.5)	1/2	10YR6/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄

竪穴住居 3

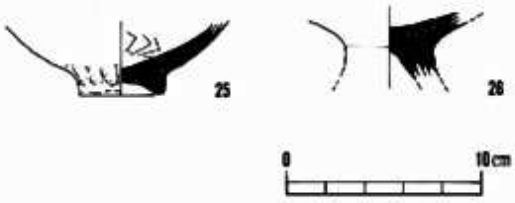


第15図　竪穴住居 3

竪穴住居 3 は、II区とIII区にわたって検出された住居跡である。検出面は14層上面である。弥生時代中期の土器小片を出土した土壙12を切っている。位置的には竪穴住居 2 と竪穴住居 4 のほぼ中間に位置している。

住居跡西端の1/5程度しか調査しておらず、残りの部分は調査区外東方に続く。このため詳細は不明であるが、直径 8 m前後に復原できる円形住居跡であろう。周壁に沿って、断面U字形、底の幅が約10cmの周壁溝が巡る。検出面から床面までの深さは約55cmを測り、周壁は約70°の角度をもって立ち上がる。床面の標高は約8.0mである。この発掘停止面が屋内高床部上面である可能性も捨て切れないが、竪穴住居 2 ・ 4 のような屋内高床部形成のための部分的な盛土は観察できなかった。柱の数、屋内施設などについては検出できていない。

遺物は埋土中から出土した土器の細片のみであり、床面直上のものはなかった。



第16図　竪穴住居 3 出土遺物

図化できたのは、25と26のみである。25は壺の底部である。粘土紐を加えることにより、上げ底状を呈している。内面にはハケメが観察できる。26は高坏の接合部である。脚柱部は中空で、坏部と脚部の接合ののち坏部に粘土を継ぎ足している。

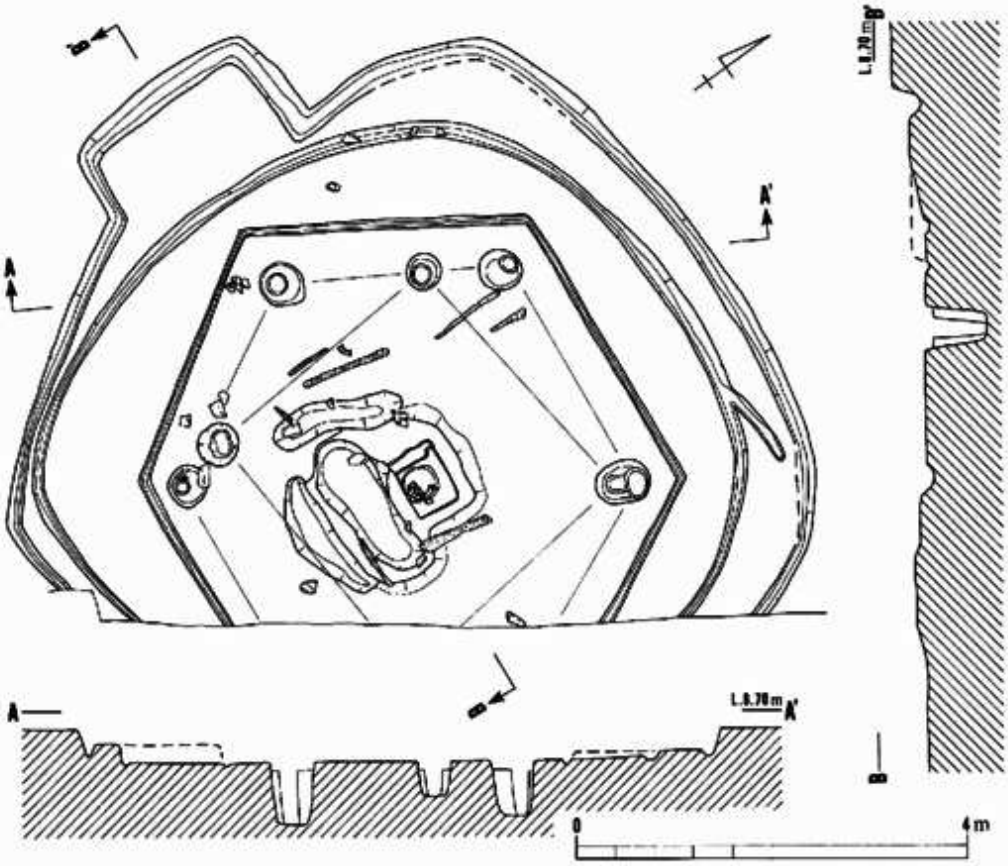
番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調	
		A	B	C	D	E		内面	外面
25	壺	—	—	—	4.3	—	底部完形	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白
26	高坏	—	—	4.4	—	—	接合部のみ	2.5Y4/1 黄灰	5YR7/8 橙

竪穴住居４

竪穴住居４は、Ⅲ区南寄りの14層上面において検出された住居跡である。掘立柱建物４、土壙17・18などに近接した位置関係にある。この住居跡には１回の建て替えが認められ、平面形が円形を呈する１次住居と、その廃絶後に築かれた、不整形ながら六角形の平面形をもつ２次住居が確認された。

１次住居は、周壁溝の形状から直径約6.5mの円形住居跡に復原でき、４本の主柱をもつものである。床面の標高は8.2mよりもいくらか高い程度であろう。主柱間隔は、2.7～2.9mである。中央土壙などの屋内施設は、おそらく２次住居のそれに重複するものと考えられ、検出されなかった。

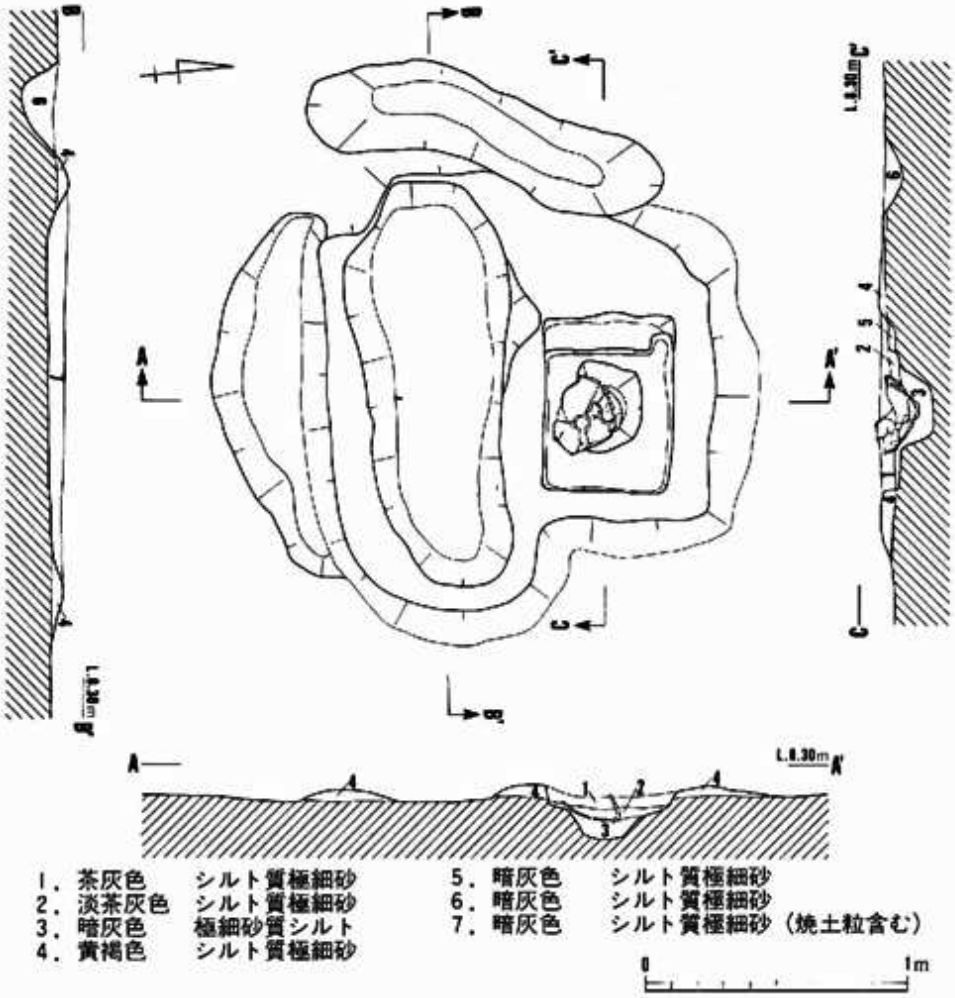
２次住居の平面形は不整形であるが、その輪郭が、屋内高床部に内接する正六角形の溝に一部で平行するため、一辺約4.4mの六角形と考えられる。なお、角にあたる場所に、幅約2.3m、長さ約1.0mの張出部が認められた。周壁は約70°の角度をもち、屋内高床部までの深さ約20cmが遺存していた。断面Ｕ字形の周壁溝が壁際に巡るが、張出部においても同様の状況であった。



第17図　竪穴住居４

屋内高床部は全周するものと思われ、その幅は約1.1mを測る。これは、1次住居の一部に地山によく似た土を盛ることによって形成されているものであったが、調査においては、この盛土に気がつかず、掘り下げてしまう結果となった。高さは約20cmに復原できる。1次住居の周壁溝も、この盛土を除去した段階で検出されたものである。屋内高床部に内接する六角形の溝は、竪穴住居2の例からしても、盛土を行う際の土留めの用にたたせる板材の支持のためのものと考えるのが妥当である。床面の標高は約8.2mである。

屋内の中央は、周囲より約10cm高くなっており、そこに中央土壙と長楕円形の浅い土壙が設置されている。中央土壙は二段に掘られており、上段は平面が一辺約50cmの浅い方形をなし、下段は直径約35cmの円形を呈している。長楕円形の土壙は、長さ約1.5m、幅約0.5m、深さ約5cmを測る。これら2つの土壙をとりまく土手状の高まりは、盛土によって形成されたものと判



第18図　竪穴住居4中央土壙と炉

明した。土手に直交する断面の観察により、地山直上に薄い炭層が存在することがわかったためである。炭層は、1次住居の段階で、中央土壙付近に掻き出されたものの残存と考えられる。土壙壁は両者とも焼けていない。

主柱は、屋内高床部内側の各角に設けられた6本からなるものと考えられる。柱痕跡の観察から、柱は掘り方の中央ではなく、外側方向の壁に接して据えられていたことが判る。これらの主柱穴は、1次住居のそれを切る形で検出された部分もあり、深さも1次住居より、約30cm深くなっている。主柱間隔は2.3~2.6mである。

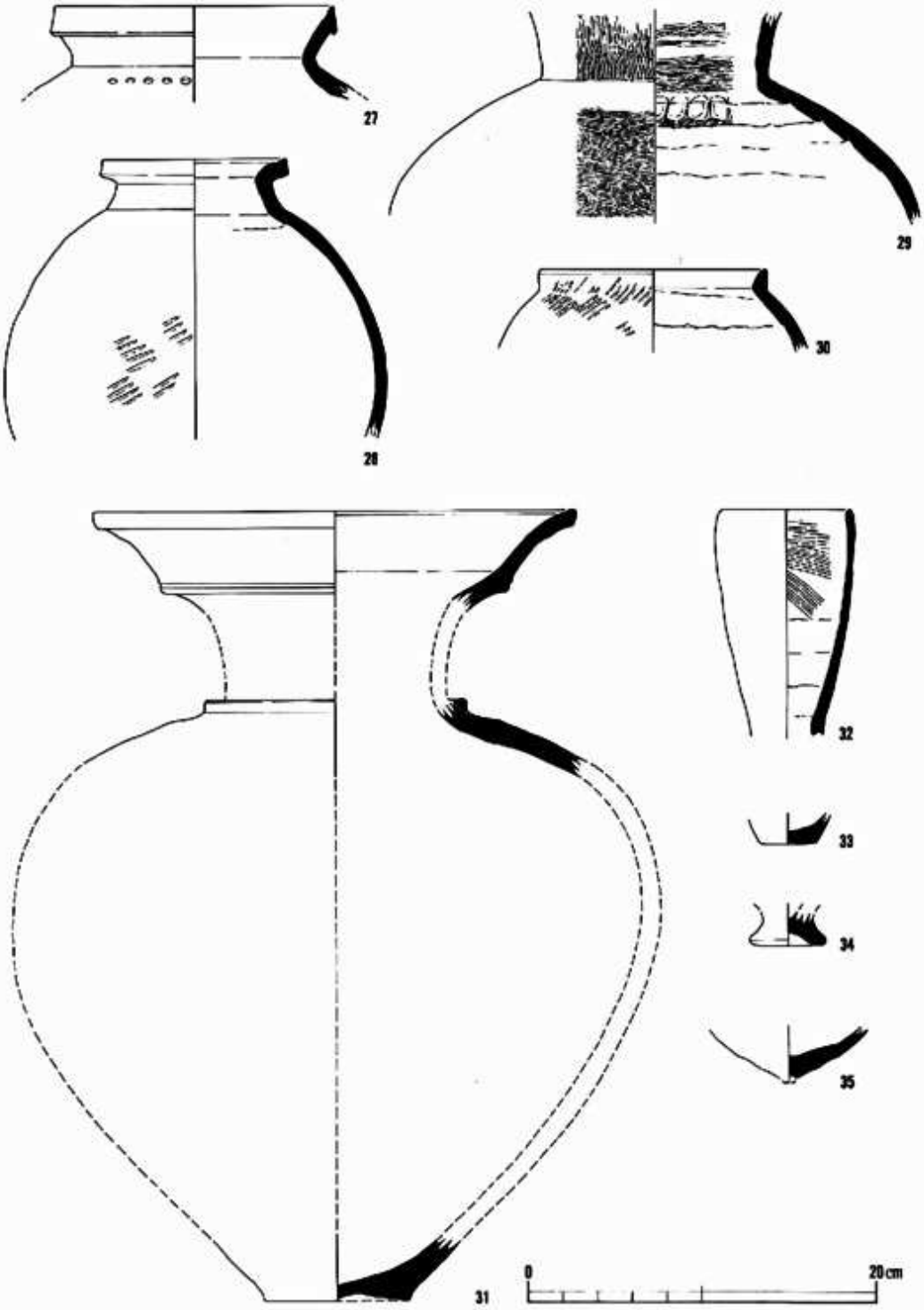
2次住居は火災にあっており、炭化材、焼土が確認された。それらは屋内高床部の内側で顕著に遺存しており、それ以外では散漫な分布状況であった。中央土壙より、あたかも据えられたままのような甕（36）が検出されたことから、土器などをある程度持ち出したのちに、火を放ったとは考えにくい。炭化材の分布のありかた、床面出土の土器が少ないことなどから、住居の焼失後に、いくらかの土器の持ち出しを行った可能性が考えられる。なお、炭化材の上に焼土の認められる部分があった。分布範囲は狭かったが、この焼土が消火作業の結果によるものか、部分的な土葺き屋根あるいは壁面の上が堆積したものか判断できなかった。

遺物は、埋土内より出土した土器のほか、床面検出の土器小片（33・30・43）、柱穴掘り方内（32）、中央土壙内の甕（36）がある。1次住居の周壁溝付近からも若干の土器の出土をみたが、2次住居に伴う遺物との明確な分離は行えなかった。鉄器片・砥石が各1点、埋土中より出土している。

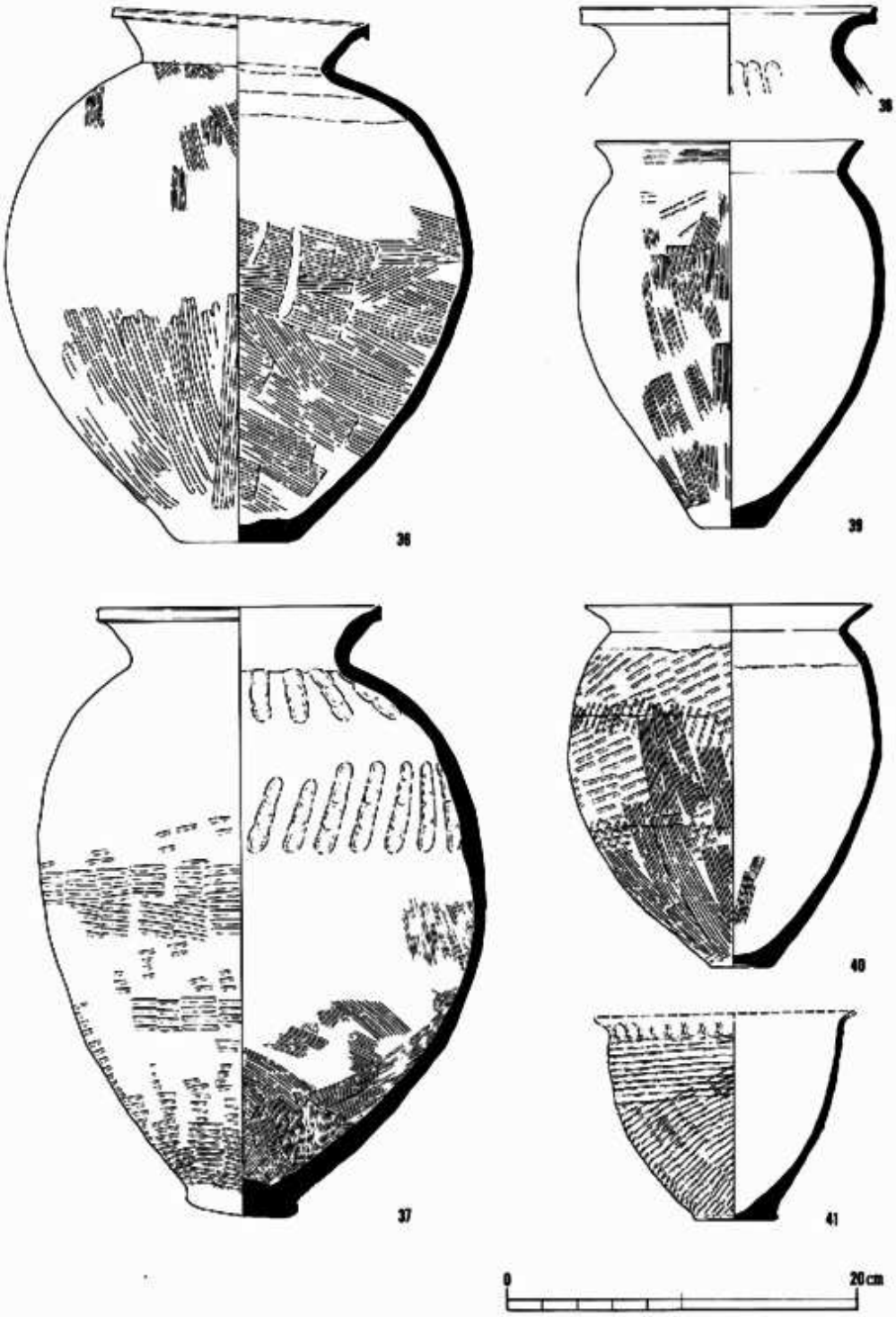
出土遺物には、広口壺E・二重口縁壺・細頸壺・短頸直口壺・ミニチュア壺・甕B_1・甕B_2・甕B_3・鉢C・高坏AおよびD・製塩土器などの土器と、砥石、鉄器各1点がある。

28は広口壺Eに分類される。器表の磨滅が激しいが、体部外面にタタキのあとが残り、一部には煤の付着が認められる。29は体部タタキののち、横方向のヘラミガキを施している。頸部は内面を横方向のヘラミガキ、外面を縦方向のハケで仕上げている。30は短頸直口壺である。直立するごく短い口縁にまでタタキの痕跡が残っている。31は二重口縁壺である。胎土の色調などから口縁部、肩部、底部の3片を同一個体と認めた。肩部の内面にはハケが施されている。32は細頸壺の口頸部であり、2次住居の柱穴から出土したものである。器表の磨滅が激しい。内面には横方向のハケが施されている。33はミニチュア壺の底部の破片である。底部中央がややくぼんでいる。34は床面近くで出土した製塩土器の台脚部である。胎土に砂粒を多く含むもので、もろい。

27は岡山県北部の美作地方に一般的な甕あるいは壺と思われる。口縁部は二重口縁状を呈し、肩部には円形の刺突文が施される。口頸部と肩部の境より、2.5cm下方まで内面のケズリが及んでいる。36は体部径に比較して頸部径・口縁部径の小さな土器である。広口壺と区別の難しい器形であるが、ここでは甕B_1に分類する。中央土壙に据えられたような状態で出土したもので

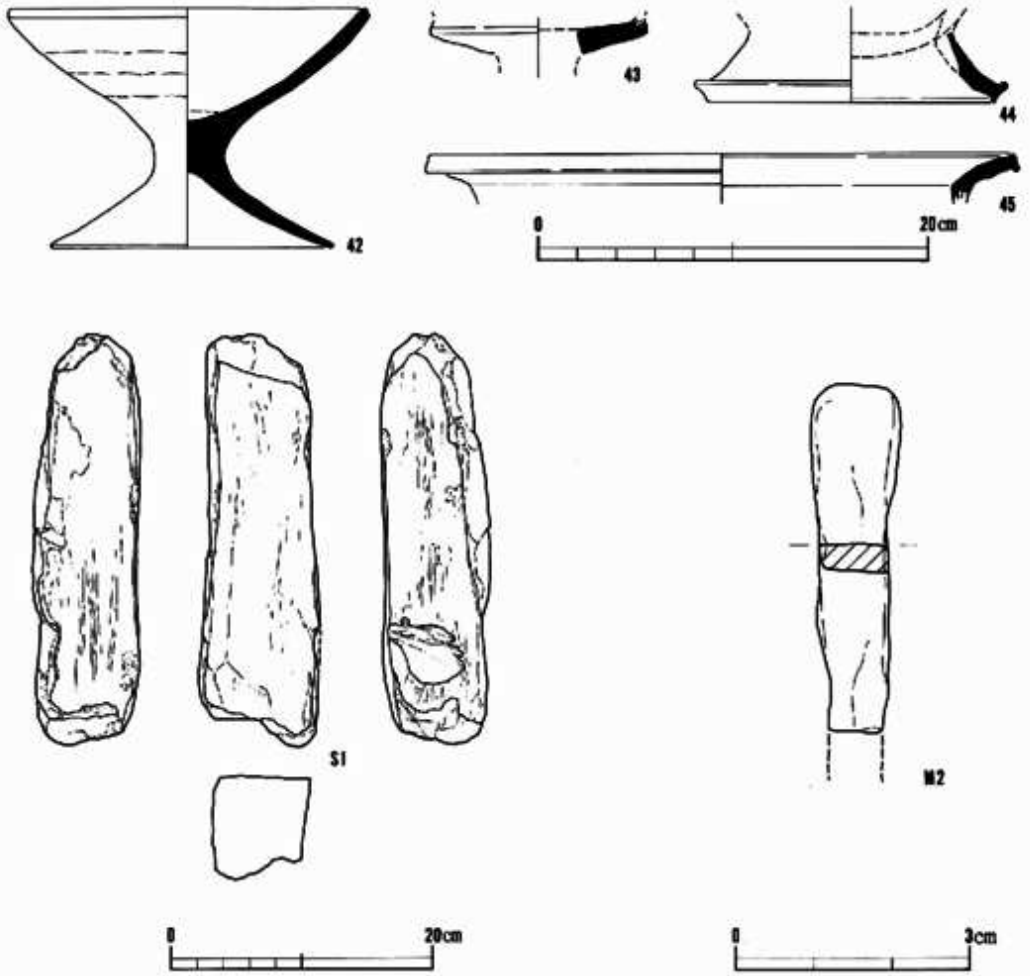


第19図　竪穴住居４出土遺物（１）



第20図　竪穴住居４出土遺物（２）

ある。体部外面は、下半を縦方向のヘラミガキ、上半をハケで仕上げている。口唇部は、強い横方向のナデによってややくぼんでおり、上下にわずかに拡張したような状態である。体部内面は、下半にハケ、上半にナデが施されている。37も甕B_1に分類される。底部はやや突出し、口頸部は36に似たつくりである。体部外面には上半までタタキが施されており、内面は下半をハケ、上半をナデで仕上げる。38は口唇部を上方につまみあげている。39は体部外面に、タタキののち縦方向のハケが認められる。口縁部外面には横方向のハケが施される。底部外面にはタタキの痕跡が認められる。40はB_2タイプの甕である。分割成形の手法がよく観察できる資料である。底部・体部・肩部においてタタキ主軸の違いが認められ、それぞれの接合部分にあらたなタタキが確認できる。これは、あらかじめ作っておいた底部・体部・肩部の3者をタタキを用いて結合させる手法であり、都出比呂志のいう胴部成形B手法に相当する。体部内面はハ



第21図　竪穴住居4出土遺物（3）

ケののち、ナデによって仕上げられている。底部は、都出のいう底部輪台手法によるものである。41は甕B_2である。体部内面はナデ仕上げである。

42は高坏Dに分類できる。坏部外面には粘土紐の継ぎ目が残る。43は高坏Aの破片であろう。44は弥生中期の脚台部の破片である。

45は鉢Cの口縁部の破片である。口唇部には端面をもっている。

このうち、27は津山市・大田十二社遺跡の10号住居址（Fig.25の2）・14号住居址（Fig.31の12）などの出土例に類似し、「大田十二社2式」に比定してよい。44とともに、他の土器との間に時期的な隔たりがあり、1次住居に伴う可能性もあるが、混入品として扱いたい。

S1は床面近くで出土した砥石である。直方体を呈し、3面を利用している。使用による擦痕が観察できる。石材は、流紋岩質凝灰岩かリソイダイトであり、構成粒子は比較的粗い。

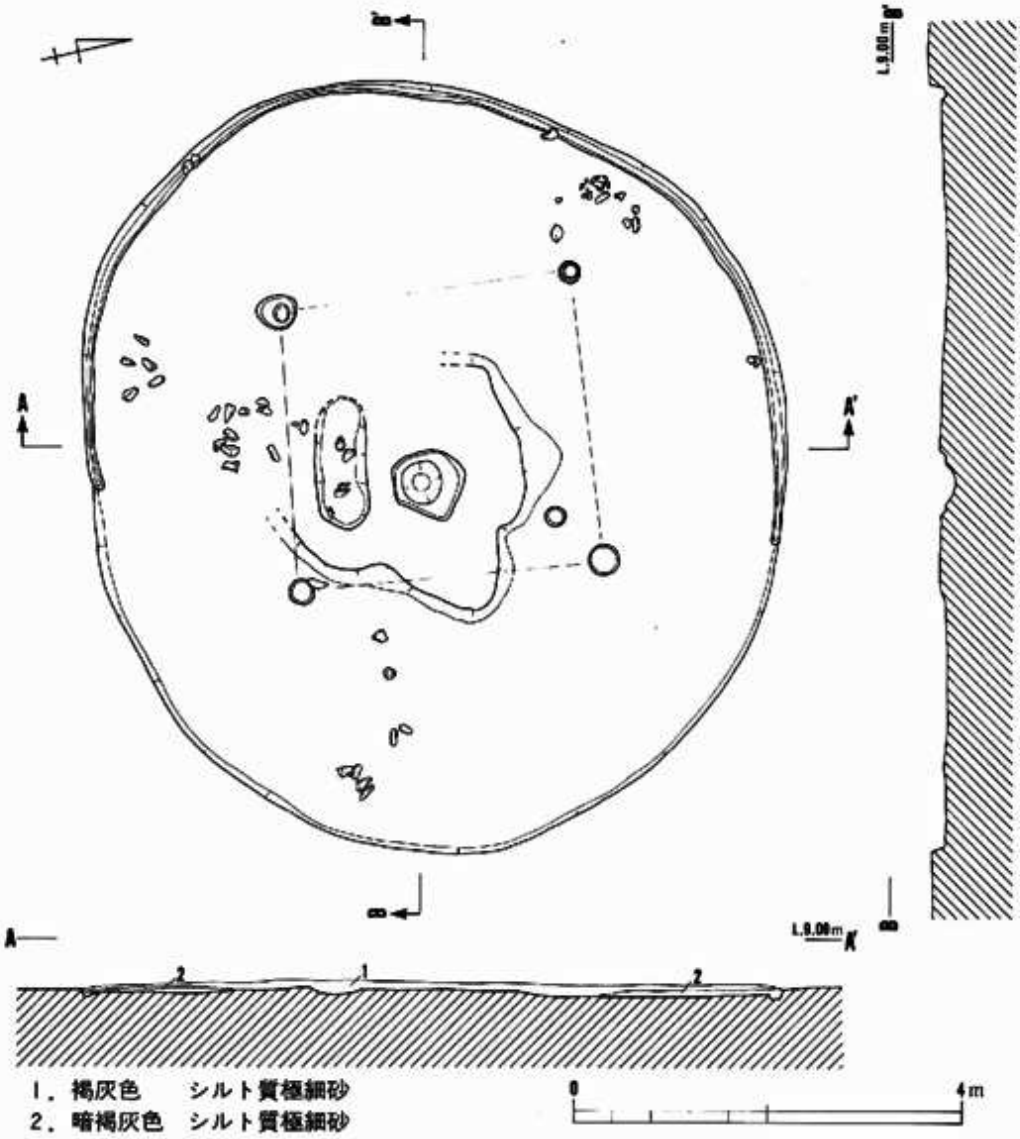
埋土中より鉄器片が1点出土している。M2は、一端が残るものの種類については断定できない。幅0.8～1.2cm、厚さ0.3cmで残存長4.4cmを測る。

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調	
		A	B	C	D	E		内面	外面
27	甕	(15.9)	13.9	—	—	—	1/4	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙
28	壺	(19.4)	(9.0)	(21.8)	—	—	1/2	2.5Y5/1 黄灰	7.5YR7/8 黄橙
29	壺	—	(13.0)	—	—	—	1/3	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙
30	壺	(12.8)	(13.0)	—	—	—	1/4	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙
31	壺	(27.4)	(12.9)	—	(8.4)	—	頸部・体部を欠く	2.5Y8/4 灰白	2.5Y8/2 灰白
32	壺	7.3	4.1	—	—	—	口頸部完形	5YR8/4 淡橙	5YR7/6 橙
33	壺	—	—	—	2.9	—	底部完形	2.5Y8/2 白灰	2.5Y8/2 白灰
34	製塩	—	—	—	3.4	—	底部完形	2.5Y3/1 黒	10R6/3 にぶい赤橙
35	鉢	—	—	—	—	—	体部下半1/6	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白
36	壺	14.7	11.0	26.7	5.9	30.5	1/2	5YR2/2 黒褐	10YR4/2 灰黄褐
37	壺	(16.0)	(12.1)	(25.4)	6.4	(35.0)	体部1/2、底部完形	7.5YR4/1 褐灰	10YR5/1 褐灰
38	甕	(16.8)	(13.0)	—	—	—	口縁1/4	2.5Y8/3 淡黄	10YR7/2 にぶい橙
39	甕	(15.1)	(13.5)	(17.5)	3.6	(21.9)	口縁1/8、体部1/2	5YR6/6 にぶい橙	5YR6/6 にぶい橙
40	甕	(16.4)	(13.5)	17.9	3.5	20.4	1/2	5YR6/6 にぶい橙	5YR6/6 にぶい橙
41	甕	—	13.3	13.2	4.8	—	体部完形	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/4 にぶい橙
42	高坏	(18.2)	—	14.3	14.4	12.2	1/2	7.5YR8/2 灰白	5YR8/4 赤橙
43	高坏	—	(11.0)	—	—	—	坏部1/4	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙
44	鉢	—	—	—	(14.5)	—	1/8	2.5Y8/3 淡黄	10YR8/3 浅黄橙
45	鉢	(29.6)	(25.5)	—	—	—	1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5YR7/6 橙

竪穴住居５

竪穴住居５は、Ⅳ区南寄り中央部分で検出された。今回、縦断する形で調査を行った微高地の南辺付近に位置することになる。検出面は14層上面である。今回の調査で全掘しえた唯一の住居跡である。

平面形は東西にやや長い円形であり、長径約7.9m、短径約7.3mを測る。床面積は約43m²である。後世の削平のため、周壁下部の約15cmが遺存したに過ぎない。床面の標高は約8.4mである。周壁溝は幅約15cmであり、西半部にしか検出されなかった。これに対し、東半部は周壁の



第22図　竪穴住居５

角度も西半部と異なり、垂直にならずに緩傾斜になっている部分が認められた。周壁の形態が東西で異なっていた可能性がある。

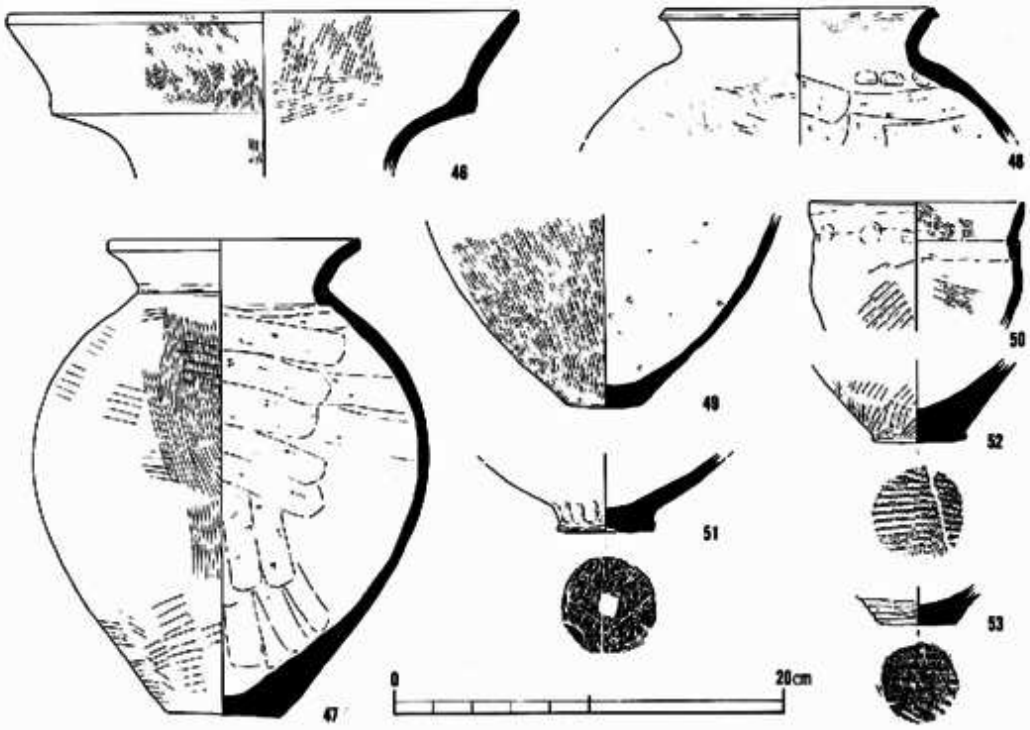
屋内中央には、削り出しによる高さ約5㎝の土手が存在し、そこに中央土壙と長楕円形の浅い土壙が設置されている。中央土壙は二段に掘られており、上段が不整形で深さ3㎝程度、下段は直径約40㎝の円形を呈し、深さ約10㎝を測る。これと30㎝の間隔をおいて隣接する長楕円形土壙は、長さ約135㎝、深さ7㎝を測る。長楕円形土壙の底面には厚さ5㎜程度の炭層が堆積していた。これらの土壙よりもやや高いレベルにおいて、直径約2㎝の焼土塊が散見された。両者とも土壙壁は焼けていなかった。

主柱は4本検出された。これら4本の主柱の配置は、長楕円形土壙の長軸と方向を揃えるものである。主柱間隔は2.8～3.0mを測る。主柱は、直径約20㎝、深さ約30㎝の掘り方内に据えられ、柱の直径は約10㎝である。

遺物は、土器のみであり、そのうち床面直上出土のものは46・49・47・51である。

46は二重口縁壺である。頸部下半以下を欠失する。口縁部、頸部の外面は縦方向のハケメを施し、内面はヘラミガキを行っている。49は外面に縦方向のヘラミガキ、内面にヘラケズリがみられる。

47は甕A₁である。体部外面にはタタキののち縦方向のハケメを施す。タタキは口縁部に及ん

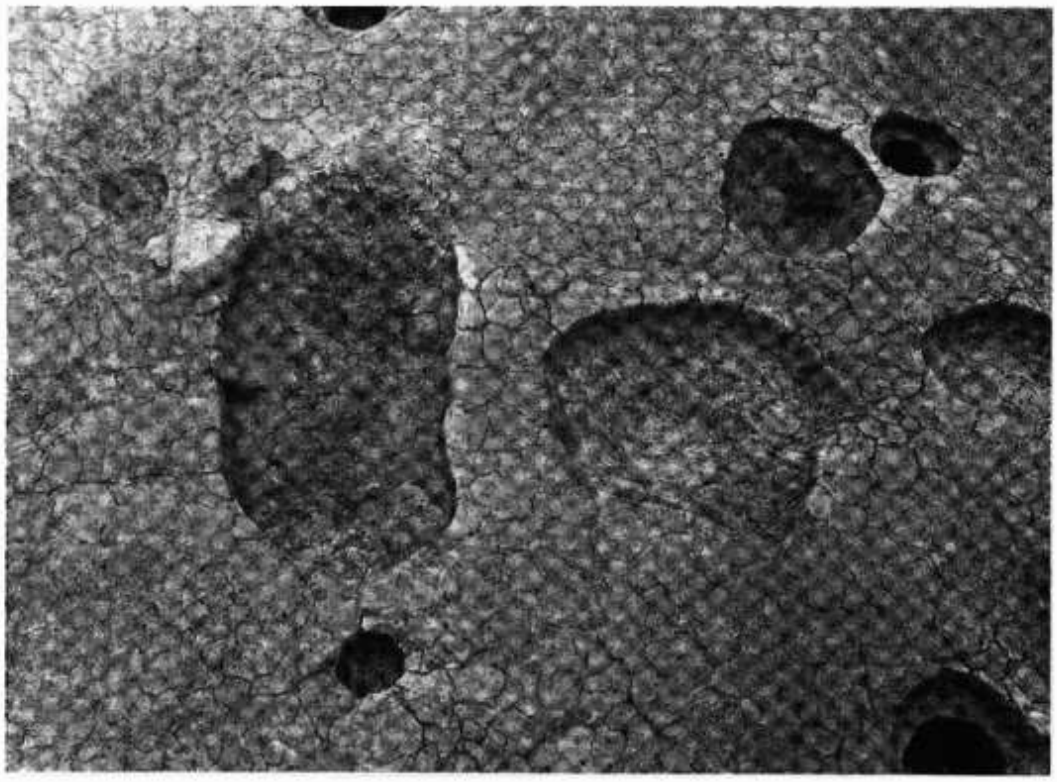


第23図　竪穴住居5出土遺物

でいる。内面は、下半を下から上へ、上半は逆時計廻りにヘラで削っている。48は大形の甕A_1である。体部外面、口縁部内面をハケで仕上げている。体部内面は上半部に逆時計廻りのヘラケズリがみられる。50は甕B_2の破片である。口縁部があまり外方に開かないものである。内面にハケメが認められる。

51は突出する底部に葉脈の痕跡が残る。52・53は両者とも底部にタタキが施されている。

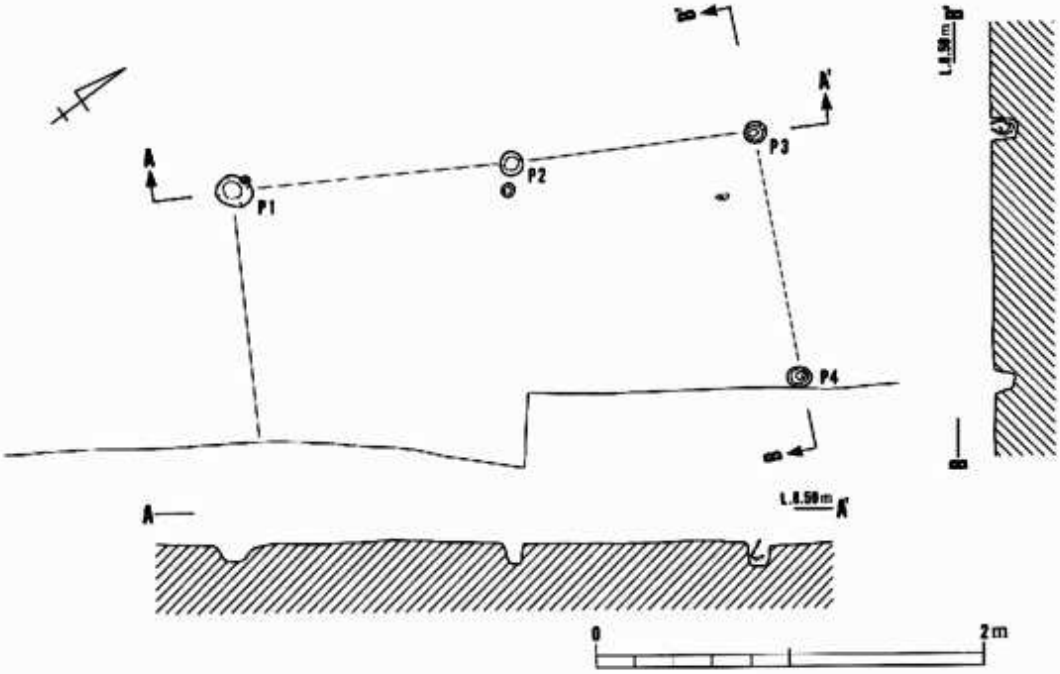
番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
46	壺	(25.8)	(13.1)	—	—	—	1/4	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙
47	甕	(12.6)	(9.6)	(20.2)	5.8	(24.3)	底部完形、他は1/2	5YR4/1	褐灰	5YR6/3	にぶい橙
48	甕	(13.6)	(12.1)	—	—	—	1/4	2.5Y8/2	灰白	10YR8/3	浅黄橙
49	壺	—	—	—	3.9	—	底部完形	5YR6/6	橙	10YR5/2	灰黄褐
50	甕	(10.9)	(10.4)	(10.9)	—	—	1/3	5YR6/6	橙	5YR5/6	明赤褐
51	壺	—	—	—	4.9	—	底部完形	2.5Y8/4	淡黄	10YR7/3	にぶい橙
52	甕	—	—	—	4.9	—	底部完形	2.5Y8/3	淡黄	10R6/6	赤橙
53	甕	—	—	—	3.8	—	底部完形	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白



第24図　竪穴住居5中央土壙と炉

5．掘立柱建物とその遺物

掘立柱建物１

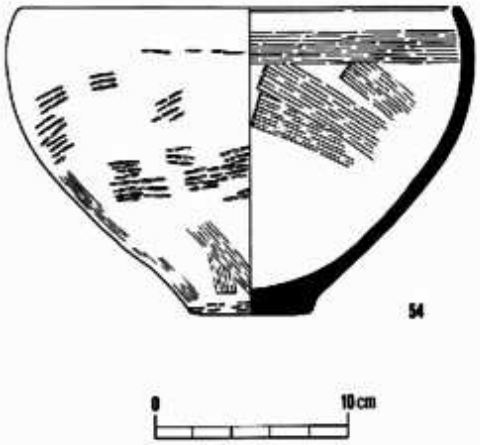


第25図　掘立柱建物１

Ｉ区中央付近に位置し、10層上面で検出した。西側には土壙５が隣接し、北西隅の柱穴は、溝２を切って掘り込まれている。

掘立柱建物１は東側調査区外に延びており、規模は不明である。調査区内で検出した柱穴は４個を数え、いずれも掘り方のみ検出可能で、柱の痕跡は識別できなかった。掘り方は直径22～33cmの規模で、深さは20cm前後である。各柱穴間の距離は、掘り方の中心でＰ1～Ｐ2が2.9mと最も長く、他は2.6m前後を測り一定している。

Ｐ３掘り方内より鉢が出土している。



第26図　掘立柱建物１出土遺物

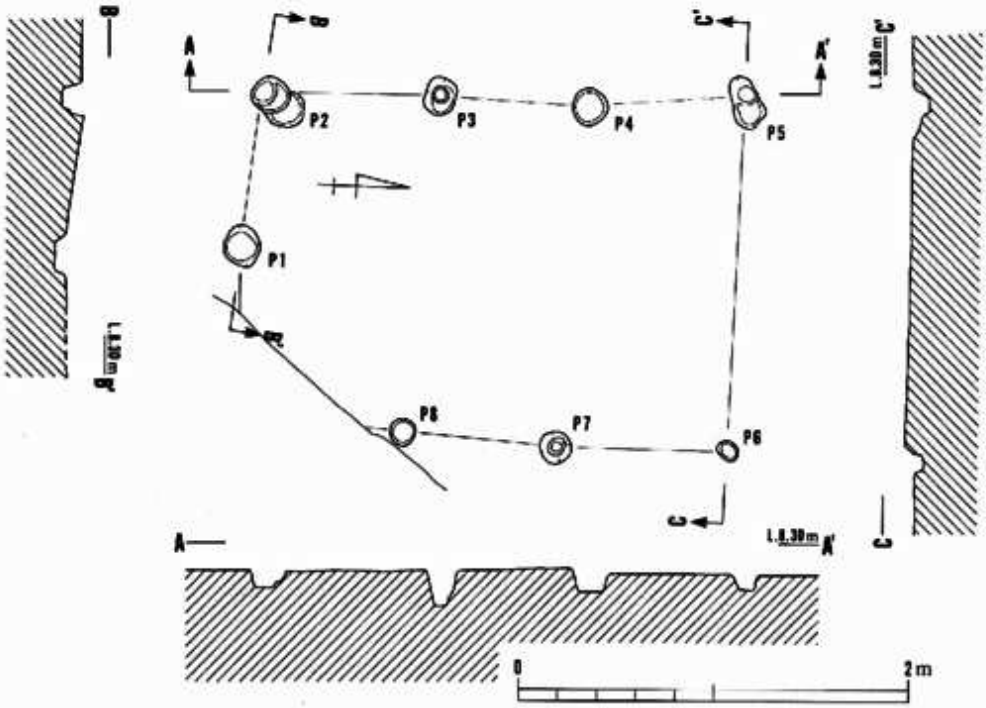
番号	器種	法量 (cm) A	B	C	D	E	残存率	色調 内面	外面
54	鉢	(22.5)	―	(24.4)	6.3	(15.8)	体部1/4、底部完存	10YR6/6 明黄褐	10YR5/2 灰黄褐

54は、鉢Eに分類される。やや突出した底部から半球上に立ち上がる体部をもつ。口縁部は内湾するもので、横方向のナデ仕上げである。体部外面はタタキののち縦方向のハケメを施している。内面にはハケメが施される。

掘立柱建物 2

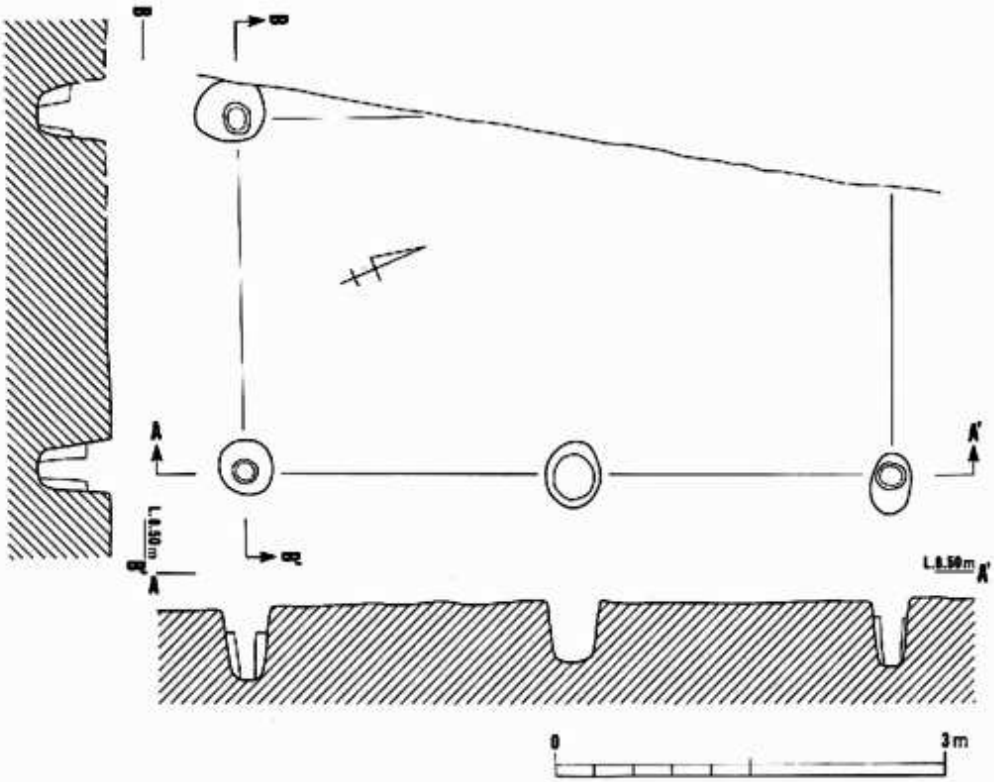
Ⅰ区西側に位置し、10層上面で検出した。西側には竪穴住居1が近接し、建物の東側部分は溝3～5と重複している。南東隅の柱穴は調査区外になるため調査できなかった。調査区内で8個の柱穴を検出しえた。このうちP7・P8は溝5に切られている。建物の規模は梁行2間（3.6m）、桁行3間（6.25m）であり、柱間寸法は梁行（P1・2間）1.6m、桁行1.6m～1.8mである。東西方向を主軸とした方位はN－2°－Wである。柱穴はいずれも掘立柱建物1と同様、掘り方のみの検出で、柱の痕跡は識別できなかった。柱穴の掘り方は、平面形が楕円形を呈するもの（P2・5・6）と円形のもの（P1・3・4・7・8）に大別できる。楕円形の柱穴は建物の四隅に位置し、30～35×45～60cmの規模で、検出面からの深さは16cm前後を測る。柱を抜き取った痕跡であろう。円形の柱穴は直径25～40cmの規模で、検出面からの深さはP3が37cmと深く、他は15cm前後である。

弥生土器が数点出土したが，図化できる土器はなかった。



第27図　掘立柱建物 2

掘立柱建物 3

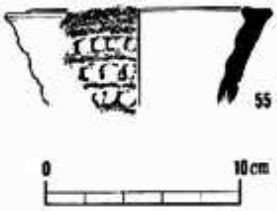


第28図　掘立柱建物 3

Ⅲ区中央、土壙16に近接する掘立柱建物である。17層上面で検出された。

柱穴は4本が確認されたのみであるが、弥生時代中期の掘立柱建物の諸例から考えれば、梁行1間（2.7m）×桁行2間（5.0m）の規模とするのが妥当かと思われる。棟軸の方向は、N－23°－Eである。柱間寸法は、桁行が245cm・253cmであり、梁行は268cmを測る。柱掘り方は、直径30～50cmであり、柱痕の直径は約20cmである。北東隅の柱穴掘り方より、土器の小片が1点出土している。

土器は、弥生時代中期の壺口頸部の破片であり、口唇部には水平な端面を形成する。頸部には3条の指頭圧痕文突帯が残存している。この突帯の貼り付けにあたっては、あらかじめ、器壁に強い横方向のナデが施されており、内面にも、これに伴うナデの痕跡が観察できる。



第29図　掘立柱建物 3 出土遺物

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
55	壺	—	—	—	—	—	口縁部小片	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y8/4	淡黄

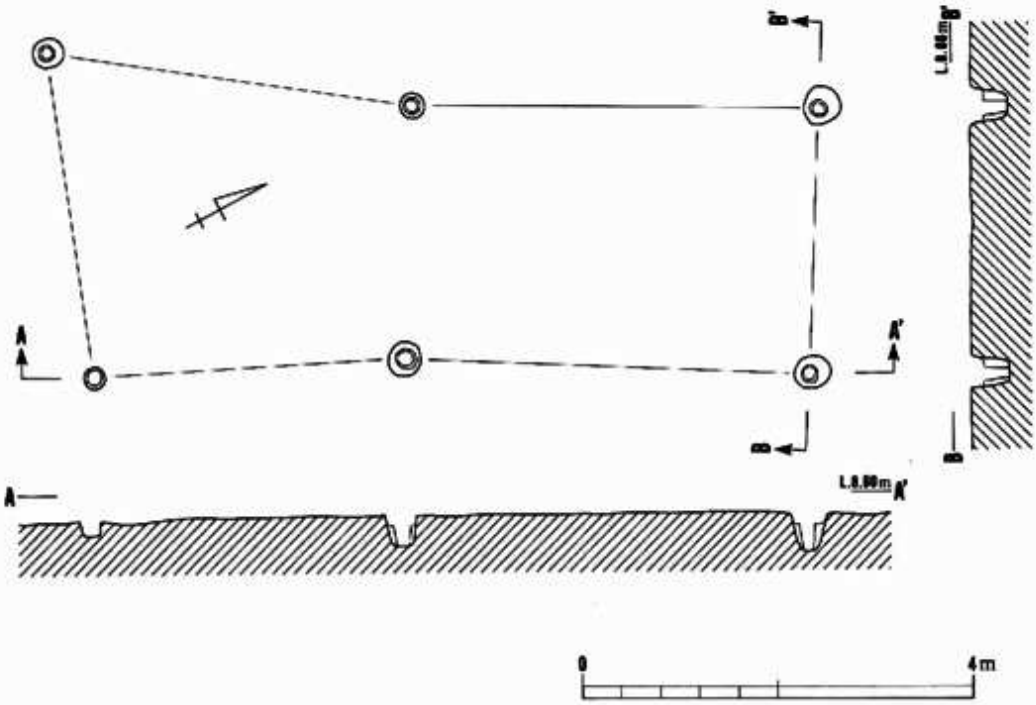
掘立柱建物 4

Ⅲ区南端の、14層上面で検出された掘立柱建物である。竪穴住居 4 、土壙17・18に近接した位置にある。柱穴は 6 本検出されたが、南側梁部を構成する 2 本の柱は、他の柱に比して方向、距離が若干異なっているため、桁行は両辺とも直線上にはのらない。また、西側桁部が西方向に伸びる可能性は捨て切れないが、掘立柱建物 3 と同様、 1 間× 2 間の規模をもつものと考えておく。

建物の規模は、梁行 1 間 (2.2～3.3m) ×桁行 2 間 (7.4～8.0m) であり、棟軸の方向は、N－28°－Eである。柱間寸法は、桁行が320・415・418・380cmであり、平均は383cmである。梁行の柱間は、268・255・333cmであり、平均は、285cmを測る。

柱掘り方は、直径22～28cm、柱痕の直径は16～20cmを測る。

柱穴あるいは床面直上から遺物は出土していない。



第30図　掘立柱建物 4

掘立柱建物 5

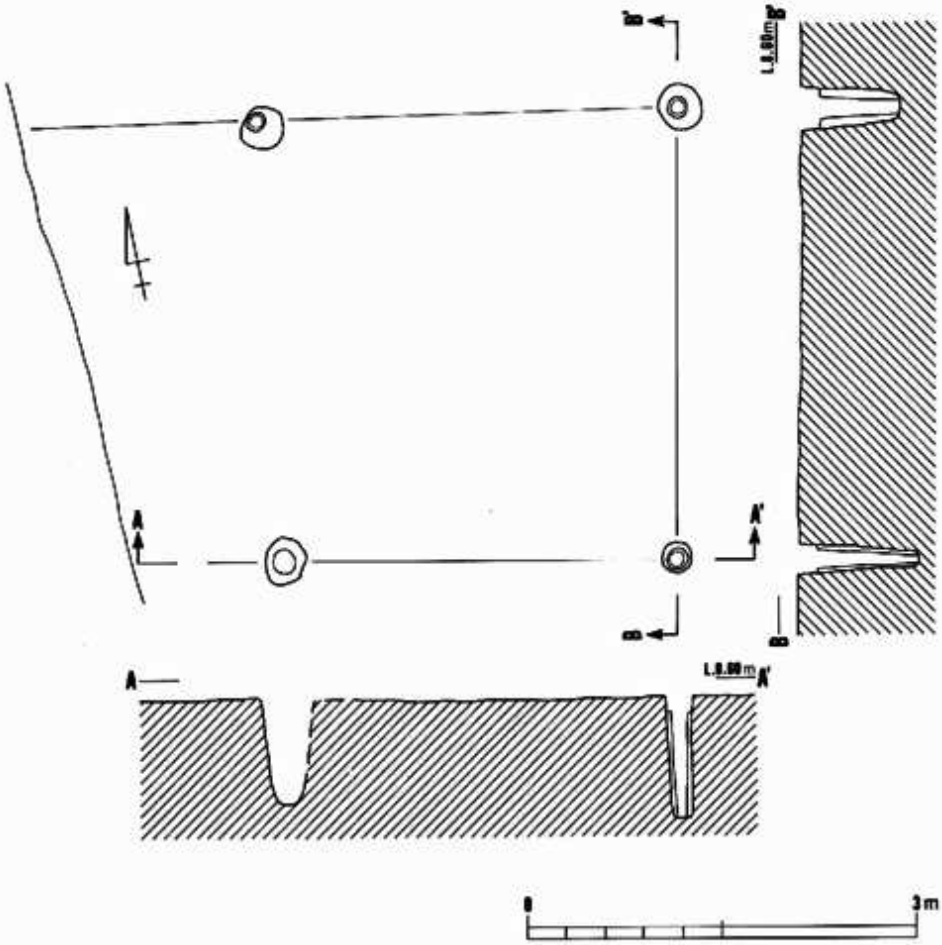
Ⅳ区南端、17層上面で検出された掘立柱建物である。今回、縦断する形で調査する結果となった微高地の南縁付近に位置することとなる。

他の遺構との関係については、土壙30と近接していることが分かるが、両者が同時に存在したか否か判断できない。

柱穴は４本が検出されたのみであり、１間×１間の建物であるかもしれないが、西側桁部がさらに西側の調査区外に伸びる可能性がある。

建物の規模は、梁行１間（3.4m）×桁行１間以上（3.2m）である。棟軸の方向は、N－10°－Eである。柱間寸法は、桁行が336・344cmであり、梁行は305・324cmを測る。

柱の掘り方は直径約35cmで、深さは南東隅の柱穴で検出面から約82cmと非常に深い。また、検出された柱痕の直径は約15cmと細い。



第31図　掘立柱建物 5

6．土壙とその遺物

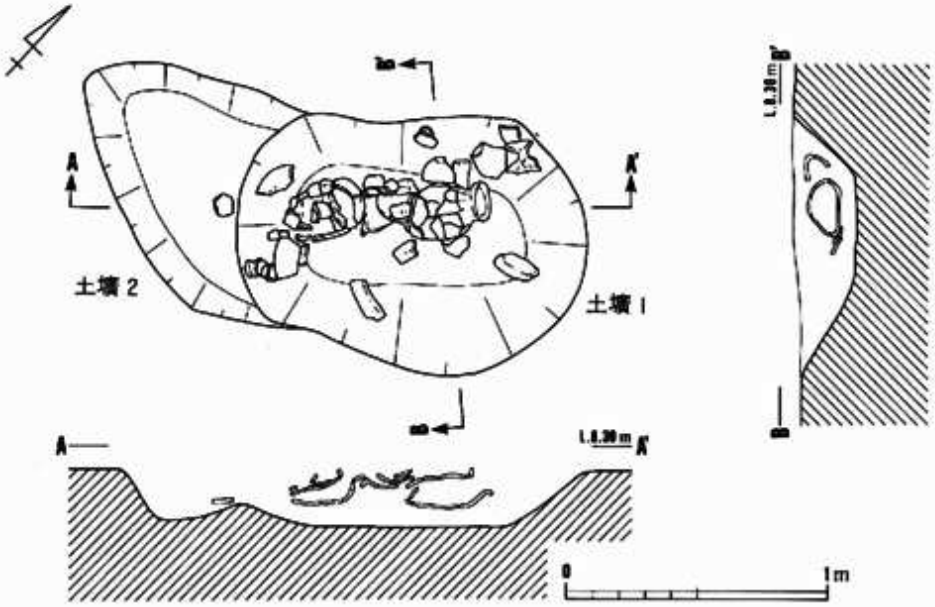
土壙1

Ⅰ区に位置する土壙で、土壙2を切っている。さらに西側に土壙3・4が存在する。バイパスに伴う調査で確認された遺構では、最も北に位置していることになる。東側の赤穂市教育委員会による調査で住居跡が確認されていることから、単純に居住域であるか否かは判断出来ない。ただ、南側に0.8m離れて溝1があり、遺跡内の性格を分ける溝かもしれない。

主軸をN－50°－Eとほぼ北東－南西方向にもつ。規模は、長軸1.35m・短軸0.95mの角のない丸みを持つ不定形をしている。深さは、0.2mと浅いもので、埋土は暗茶褐色中砂である。土壙内に本来は完形であったと思われる弥生土器が9個体以上置かれている。甕・鉢・高坏とバラエティに富む器種構成である。土器は、検出面に広がっており、土壙底面にはほとんど接していなかった。中央部分に甕（56～58）が出土し、土壙肩部近くから高坏・鉢が出土しており、置かれた状況に意味があるものかもしれない。

出土遺物には、甕B_1、鉢、高坏Cがある。

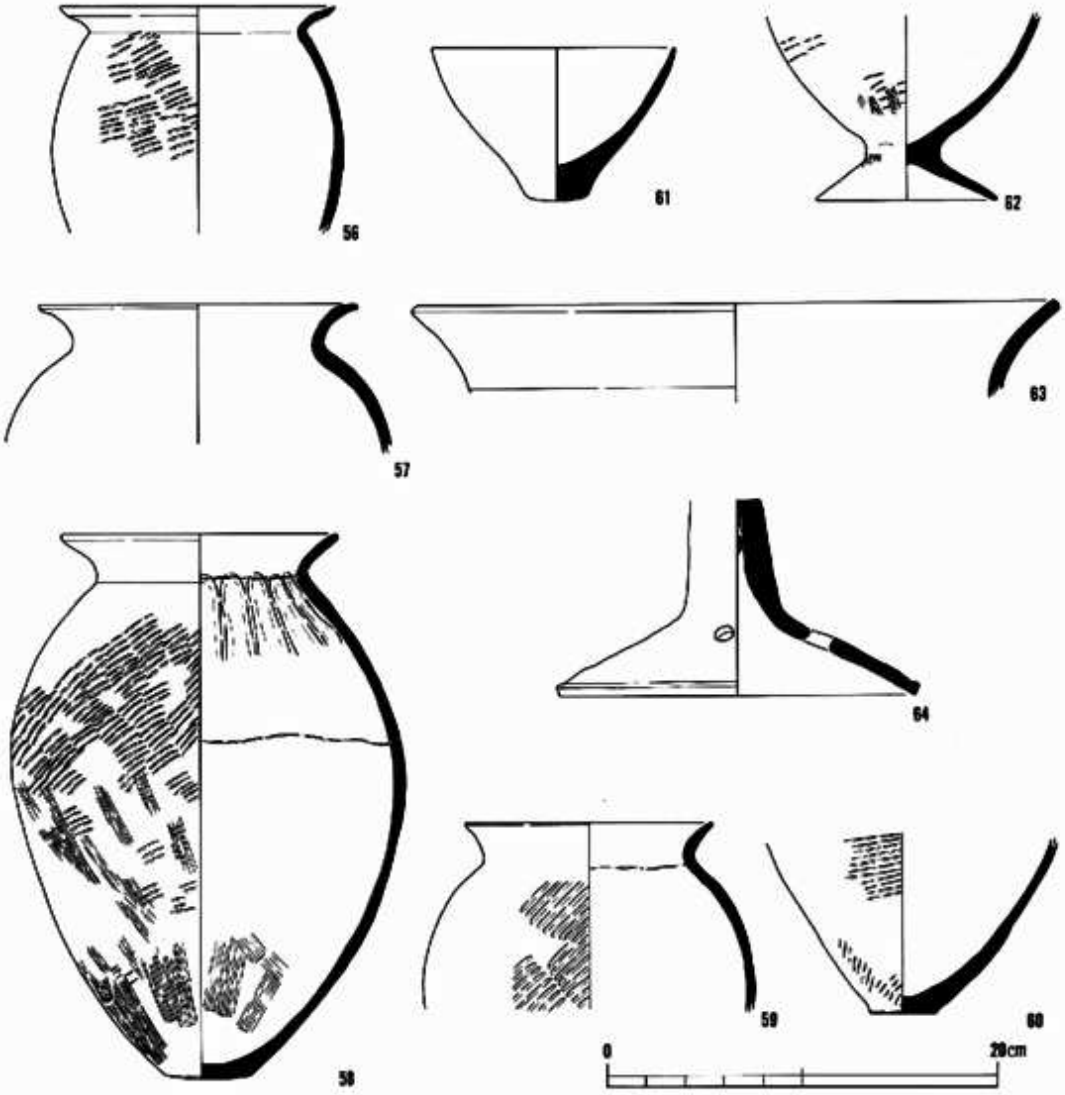
56の口縁部には、強い横方向のナデによる段がつき、口唇部が上方につまみ上げられる。58の口縁部は、貼りつけ手法によっているのが観察された。甕には、肩部の張るものは少なく、体部の最大径が体部中位付近にくるものが多い。調整については、最も残りのよい58に外面にタタキののちのハケメ、内面下半に縦方向のハケ、内面肩部にユビナデの痕跡が確認できる。



第32図　土壙1・2

61は突出した底部と緩く内湾する体部をもつ鉢Eである。土器の分割成形技法による成形第一段階の逆円錐台を鉢として使用するものである。62は台付きの鉢Gである。

63は高坏Cの口縁部の破片である。坏部外傾指数（観察表のB／A×100）は、83.7であり、当遺跡の高坏Cのなかでは、比較的外傾度の小さいものである。64は裾部に4つの円孔を穿つ高坏脚部片である。柱状部は中空であり、内面に絞り目が残る。



第33図　土壙1出土遺物

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
56	甕	(14.1)	(11.2)	(15.1)	—	—	1/8	10YR6/4	にぶい橙	7.5YR4/3	褐
57	甕	(16.4)	12.9	—	—	—	1/4	2.5Y8/2	灰白	2.5Y7/2	灰黄
58	甕	14.2	10.9	(20.4)	4.5	27.8	体部1/2の他は完存	7.5YR8/2	灰白	10YR3/2	黒褐
59	甕	(12.7)	(10.9)	(17.2)	—	—	1/8	10YR6/2	灰黄褐	10YR7/2	にぶい橙
60	甕	—	—	—	3.4	—	下半部完形	2.5Y7/2	灰黄	10R5/6	赤
61	鉢	12.2	—	—	3.1	7.8	ほぼ完形	10YR7/3	にぶい橙	10YR8/2	灰白
62	台付鉢	—	—	(3.8)	(9.4)	—	胴下半1/2、脚部完形	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	灰黄
63	高坏	(32.5)	(27.2)	—	—	—	口縁部1/2	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/2	灰白
64	高坏	—	—	3.3	(18.5)	—	脚柱部完形、裾部1/2	10YR7/3	にぶい橙	10YR8/2	灰白

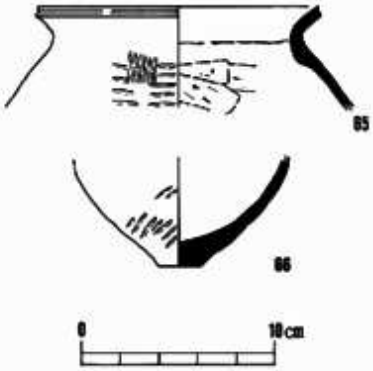
土壙 2

土壙１に切られた土壙で、調査地区北端で検出された。本来の形状の北側を削られていることになる。切られた部分がわずかにレベルが上がっていることから、土壙１と比べるとレベルの高い位置に存在した遺構かもしれない。

主軸は、土壙１とほぼ同じか、やや東に振っているものと推定される。検出時の規模は、短径0.9m、長径にあたる部分の残存長0.7mを測る。深さは最も深いところでは0.2mを測るが、土壙１に切られているところでは12cmと浅くなっている。埋土は土壙１と同じ暗茶褐色中砂であり、埋土の上からは土壙１との峻別は困難であった。

甕の破片が２点出土している。

65は肩部以上の破片であり、口唇部には端面をもち、そこに１条の凹線を巡らす。体部の外面にはタタキののちに、縦方向のハケメを施す。肩部内面には逆時計回り横方向のヘラケズリを行っている。口縁部は貼りつけ手法によっている。66は鉢の可能性もある。



第34図　土壙２出土遺物

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
65	甕	(14.4)	(12.9)	—	—	—	1/3	10YR6/2	灰黄褐	10YR3/1	黒褐
66	甕	—	—	—	2.2	—	底部完存	7.5YR5/4	にぶい褐	10YR4/2	灰黄褐

土壙 3

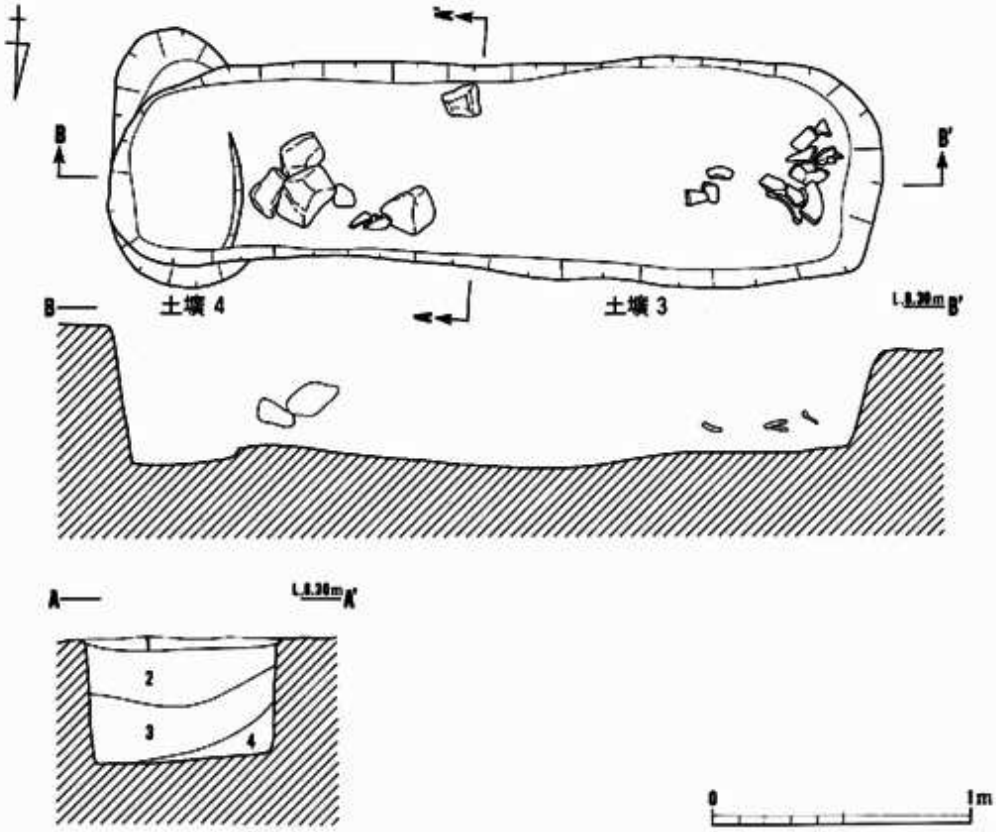
Ⅰ区に位置する隅円長方形の土壙で、土壙４ならびに溝１を切っている。溝１北側の土壙群の中では最も新しい遺構と考えられる。

主軸はN－88°－Eとほぼ東西方向をとる。長軸の長さは3.0mを測る。幅は、中央部分で0.8m、最大幅は西木口部付近で0.9m、最小幅は東木口部付近で0.65mを測る。深さは平均0.45mで、最も深いところで0.55mを測る。土層の観察から棺の痕跡を確認出来なかったが、木棺墓の可能性を考えている。その場合、幅から考えれば、西側が頭位となり、棺内の礫は棺押さえの石と捉えられる。また、東木口底面が１段下げられているのは、木口穴の痕跡かもしれない。西側木口部と東側木口部やや内側（木口穴内側）から壺の破片が出土している。

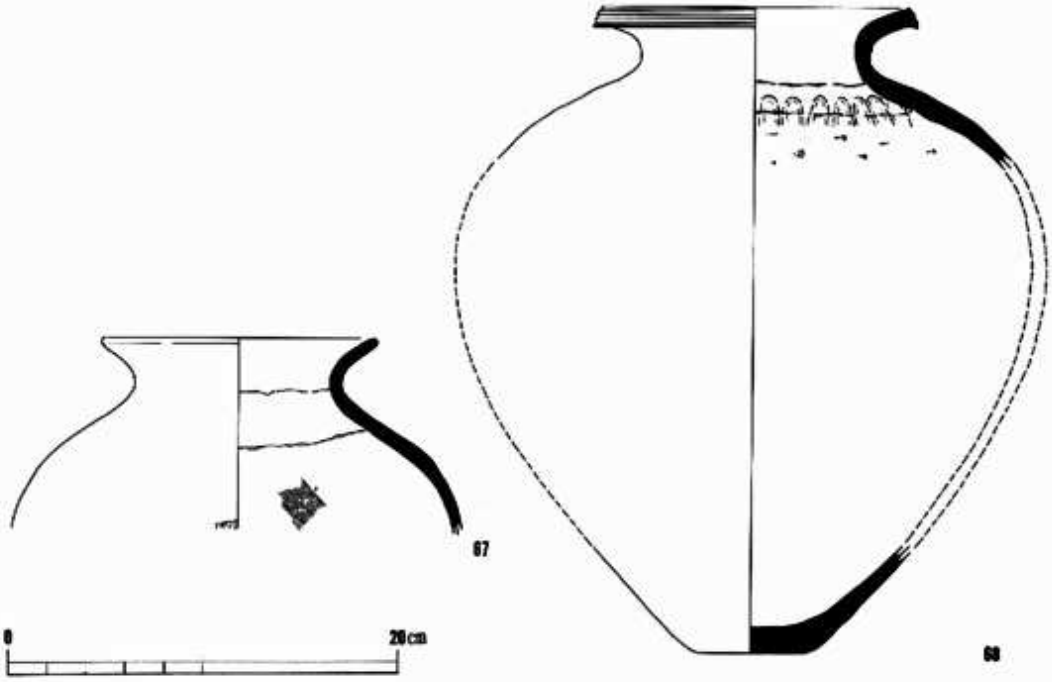
出土遺物のうち、図化できたのは広口壺Ｂの破片２点のみである。

67は体部内外面を縦方向のハケメで仕上げる。歪みがあるため、口縁部径は不確実である。肩部・頸部に粘土紐の接合痕が残る。

68は肩部以上の破片と底部の破片であるが、胎土・器形から同一個体と考えた。口唇部には



第35図　土壙３・４



第36図　土壙３出土遺物

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
67	壺	(14.0)	(10.7)	—	—	—	1/4	2.5YR7/2	灰黄	10YR7/2	にぶい橙
68	壺	15.8	11.8	—	5.6	—	口縁部1/2、底部1/2	10YR3/1	黒褐	10YR7/4	にぶい褐

端面を形成し、３条の凹線を巡らしている。肩部内面には、頸部との接合の痕跡であるユビオサエののち、それを切る横方向のヘラケズリが施されている。ヘラケズリの方向は、他の多くの土器と異なり、時計回りである。

土壙４

土壙３に切られた土壙で、Ⅰ区の土壙の中では最も規模が小さい。長径1.0m、短径0.6mを測る。深さは、土壙３に切られていることから不明であるが、土壙１・２と比較するかぎり浅いものと思われる。埋土は暗茶褐色中砂混じりの灰色シルトである。

土壙５

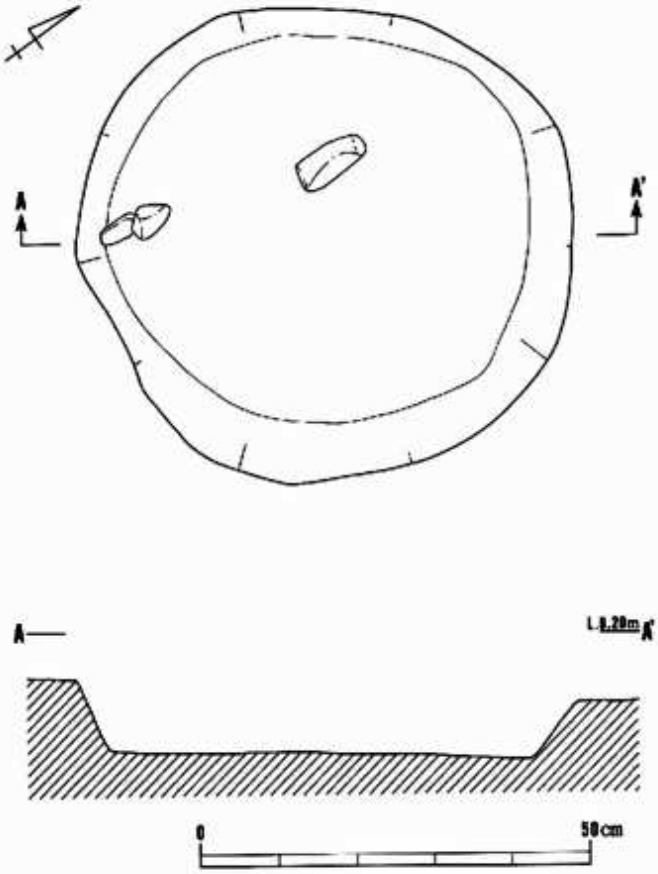
Ⅰ区中央付近、北寄りに位置し、10層上面より暗渠に切られた形で検出された。暗渠の掘削深度は浅く、土壙の東・西壁の一部が破壊されていた。

土壙の東側には掘立柱建物1・溝2が隣接している。規模・形態は、直径1.2m前後の南北方向に長い円形を呈する。検出面からの深さは最深部で19cmを測り、底面は平坦である。

土壙には黒褐色シルト層が堆積している。

土壙の南壁際に2個、中央に1個の河原石が底面直上ないしは浮いた状態で検出された。

弥生土器の細片が数点出土しているが、図化できるものはなかった。



第37図　土壙5

土壙6

II区北端、17層上面で検出された土壙である。

長軸方向をほぼ東西にとる長方形の平面形をもつ。検出面における長軸の長さは約2.85mを測る。短軸の長さは東西両端で異なり、西端では100cm、東端で約70cmとなっている。また壙底までの深さも、約40cmを測る西端部に比べて東端部はそれよりも10cm程度深くなっている。壁面の傾斜については、約70°の角度をもつが、西壁のみは約40°と緩傾斜になっていることが判る。壙底は平坦であり、平面形は検出面と同じくほぼ長方形である。長さ約2.3m、幅60cm程度である。

土層断面の観察によっても木棺の痕跡は認められなかった。形態および規模から土壙墓の可能性も考えられる遺構である。

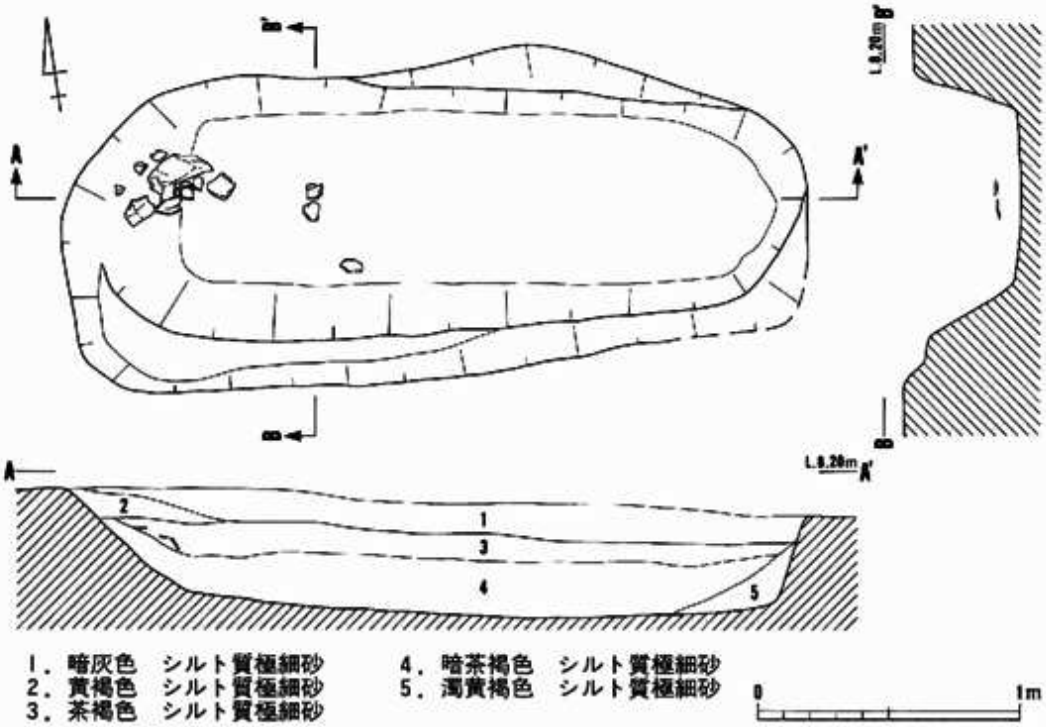
遺物は土器のみであり、大きく3分される埋土の上・中層から主に出土している。量的に少ないが、長頸壺C、甕B_1、甕B_2、鉢F、高坏などの破片がある。

69は長頸壺Cと思われる口頸部の破片である。長頸壺Cは、II区北端の土壙に多く出土しており、この69は、口唇部を上方につまみあげている点において、土壙8の80に近似する。器面の調整は不明である。

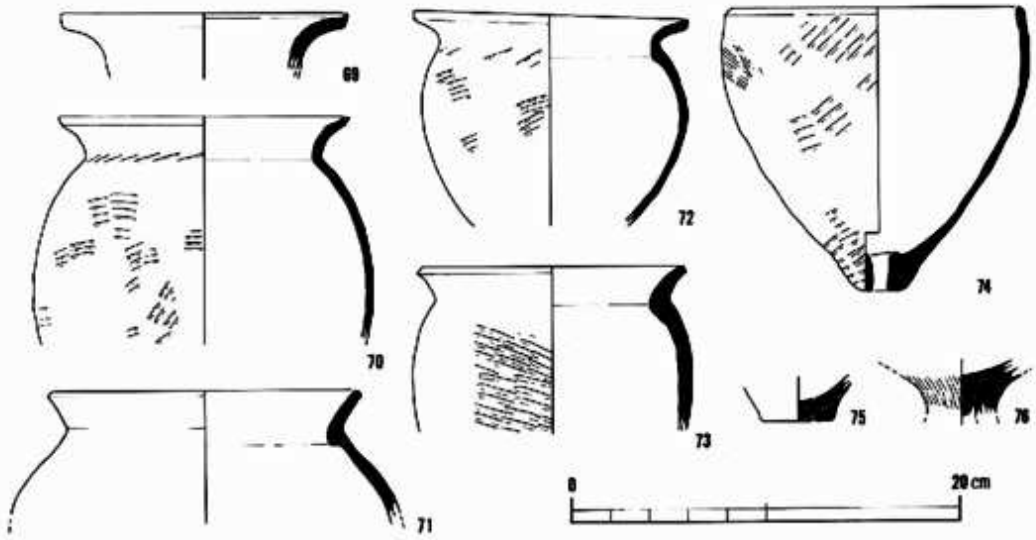
甕には、口縁部径が体部最大径に及ばないもの（70・71）と、ほぼ等しいもの（72・73）があり、口唇部の形態においても、端部を上方につまみ上げるもの(70・72)、面をもつもの(71・73）の二つの形態がある。器面は総じて磨滅が激しいが、すべての甕の外面にタタキの痕跡が認められる。タタキの方向は、右下がりの73を除くすべてが右上がりである。73は、器壁が厚い。内面にはヘラケズリが認められる。

74は、鉢Fとした有孔の鉢である。木の葉の葉脈の痕跡が残る小さな平底から、内湾しながら立ち上がる体部をもつ。口唇部は強い横方向のナデにより、内傾する面をもつ。体部外面には、右上がりのタタキののち、縦方向のハケメを施す。

76は、高坏の坏部と脚部の接合部にあたる。いわゆる円板充塡の手法をとる。外面には縦方向のハケを施す。



第38図　土壙6



第39図　土壙6出土遺物

番号	器種	法量 (cm) A	B	C	D	E	残存率	色調 内面		外面	
69	壺	(14.6)	(9.6)	—	—	—	1/4	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	灰白
70	甕	(14.9)	(12.1)	(17.6)	—	—	口縁1/2	2.5YR7/4	淡赤橙	10R6/6	赤橙
71	甕	(15.5)	(14.0)	—	—	—	口縁1/4	7.5Y8/1	灰白	2.5Y8/2	灰白
72	甕	13.9	11.2	(13.6)	—	—	口縁完形、体部1/2	2.5Y4/1	黄灰	2.5Y8/3	淡黄
73	甕	(13.2)	(12.0)	(14.3)	—	—	口縁1/4	7.5Y8/1	灰白	2.5Y8/2	灰白
74	鉢	(14.8)	—	(15.9)	2.5	(14.5)	口縁、体部上半1/4	10R6/6	赤橙	10R6/6	赤橙
75	甕	—	—	—	3.5	—	底部完形	2.5YR8/1	灰白	2.5YR7/4	淡赤橙
76	高坏	—	—	—	3.5	—	接合部のみ	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄

土壙7

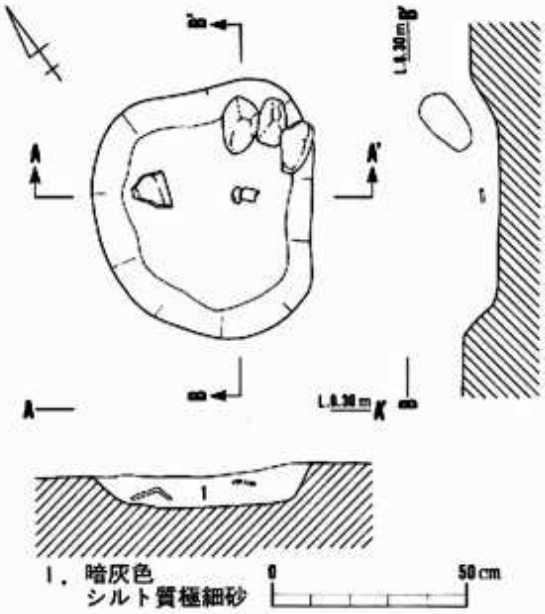
II区北端、17層上面で検出された平面楕円形の土壙である。土壙6に近接している。埋土中にて出土した敲石上面の高さが土壙肩よりも上位にあるため、本来はより高い位置で検出しえたものかもしれない。検出面における規模は、長軸約65cm、短軸約55cmを測る。検出面からの深さは約10cmである。断面形は長・短軸ともに台形を呈し、壙底はほぼ平坦である。壁面の傾斜角は約45°である。

遺物は、壙底からやや浮いた状態で出土した。土器には壺の口頸部が1点、石器には4点の敲石がある。

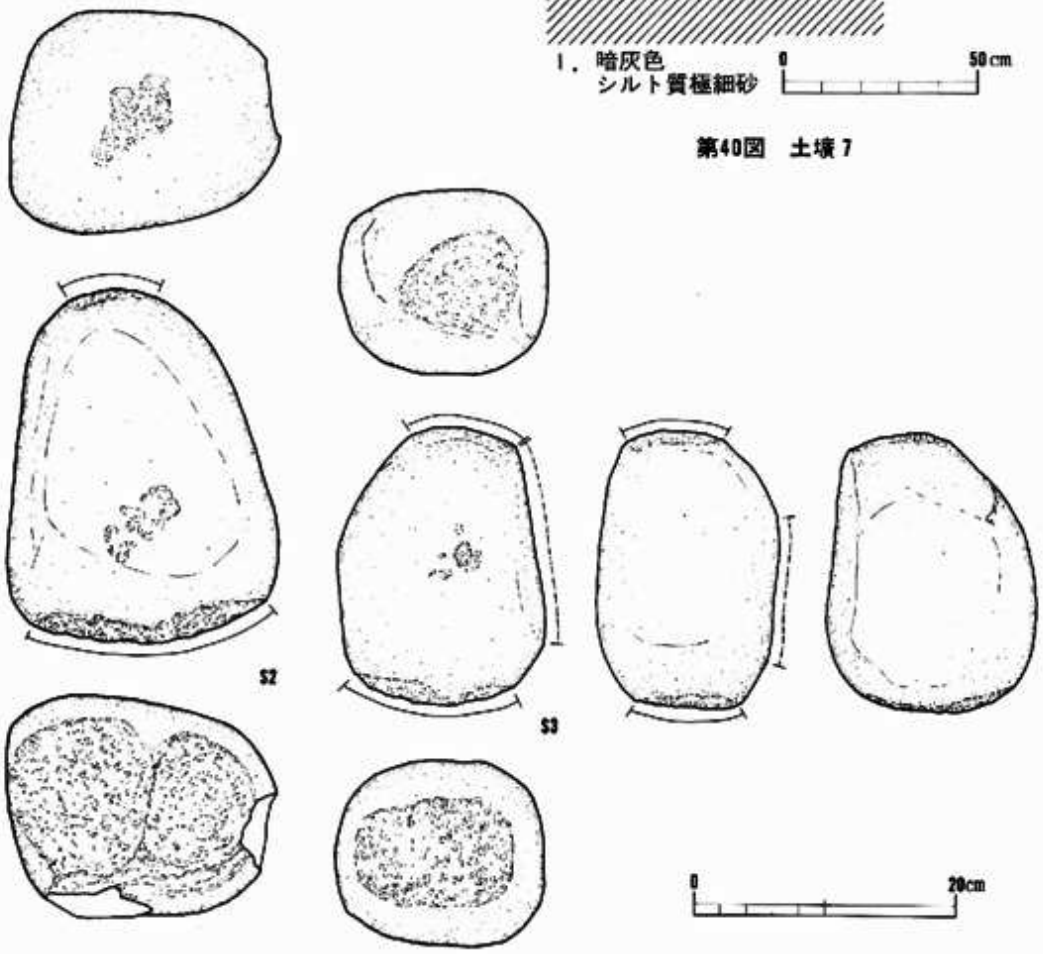
77は、長頸壺Cの口頸部の破片である。器壁内面は磨滅しているが、頸部外面はタタキののちに縦方向のハケを施す。

敲石は、土壙の北西の隅から3点がまとまった状態で検出された。

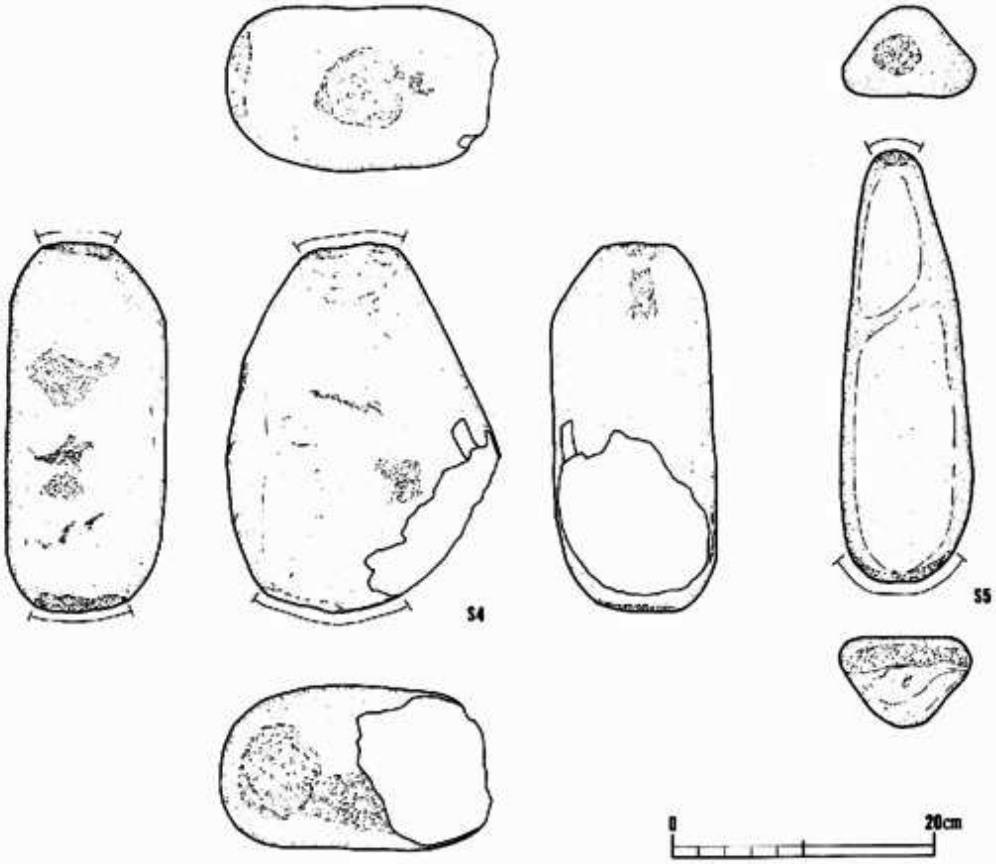
S2は、上下両端および側面の一部に敲打痕をとどめる。重量は約1800gである。石質は流紋岩質火砕岩であり、赤穂市南部に産する。S3は、礫の二側面に研磨を施した敲石である。敲打痕は両端部および一側



第40図　土壙7

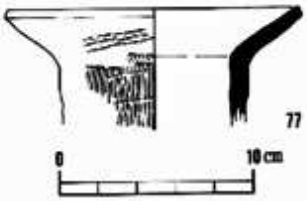


第41図　土壙7出土遺物（1）



第42図　土壙７出土遺物（２）

面に認められる。重量は約940gである。石質は花崗閃緑岩であり、千種川上流の千種町付近に産するものらしい。Ｓ４は、両端および三側面に敲打痕を残す敲石である。他の敲石同様、側面に残る敲打痕は端部のそれに比して範囲が狭い。重量は約1370gである。石質は細粒花崗閃緑岩で、上郡町北部か千種川上流地域で産出するものである。Ｓ５は、比較的幅の狭い礫を用いた敲石である。両端部に敲打痕が認められる。重量は約370gである。石質はＳ３と同じく花崗閃緑岩で、千種川上流の千種町付近に産するものを用いている。



第43図　土壙７出土遺物（３）

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
77	壺	(14.9)	(9.5)	—	—	—	1/4	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y5/1	黄灰

土壙8

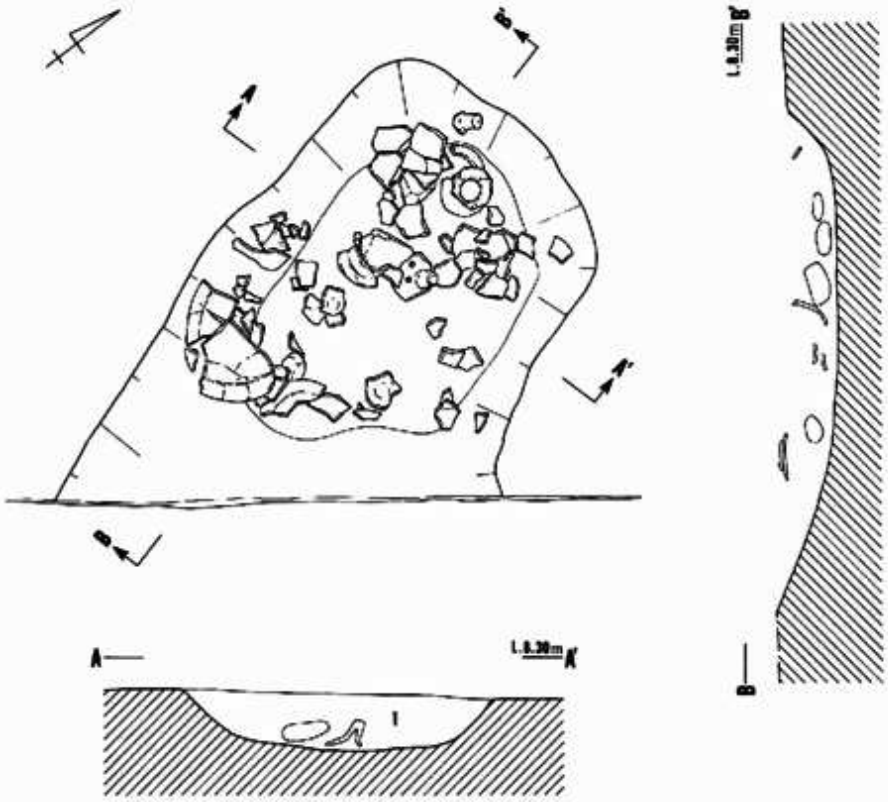
II区北端の17層上面で検出された、主軸を南北にとる土壙である。

土壙の南端が調査区外にあるため断定はできないが、長軸断面の形状から、長大なものにはならず、平面形は長方形を呈すると思われる。長軸の長さは1.3m、短軸の長さは約80cm、検出面からの深さは約15cmを測る。壙底はほぼ平坦であり、長軸の長さ約85cm、短軸の長さ約60cmを測る。壁面の立ち上がりは、南壁が約20°と緩いが、他の壁においては約80°である。

埋土は1層であり、土器の大形の破片が拳大の自然礫とともに多く出土した。

土器には広口壺D、長頸壺C、甕、鉢B・C、高坏Cなどがある。

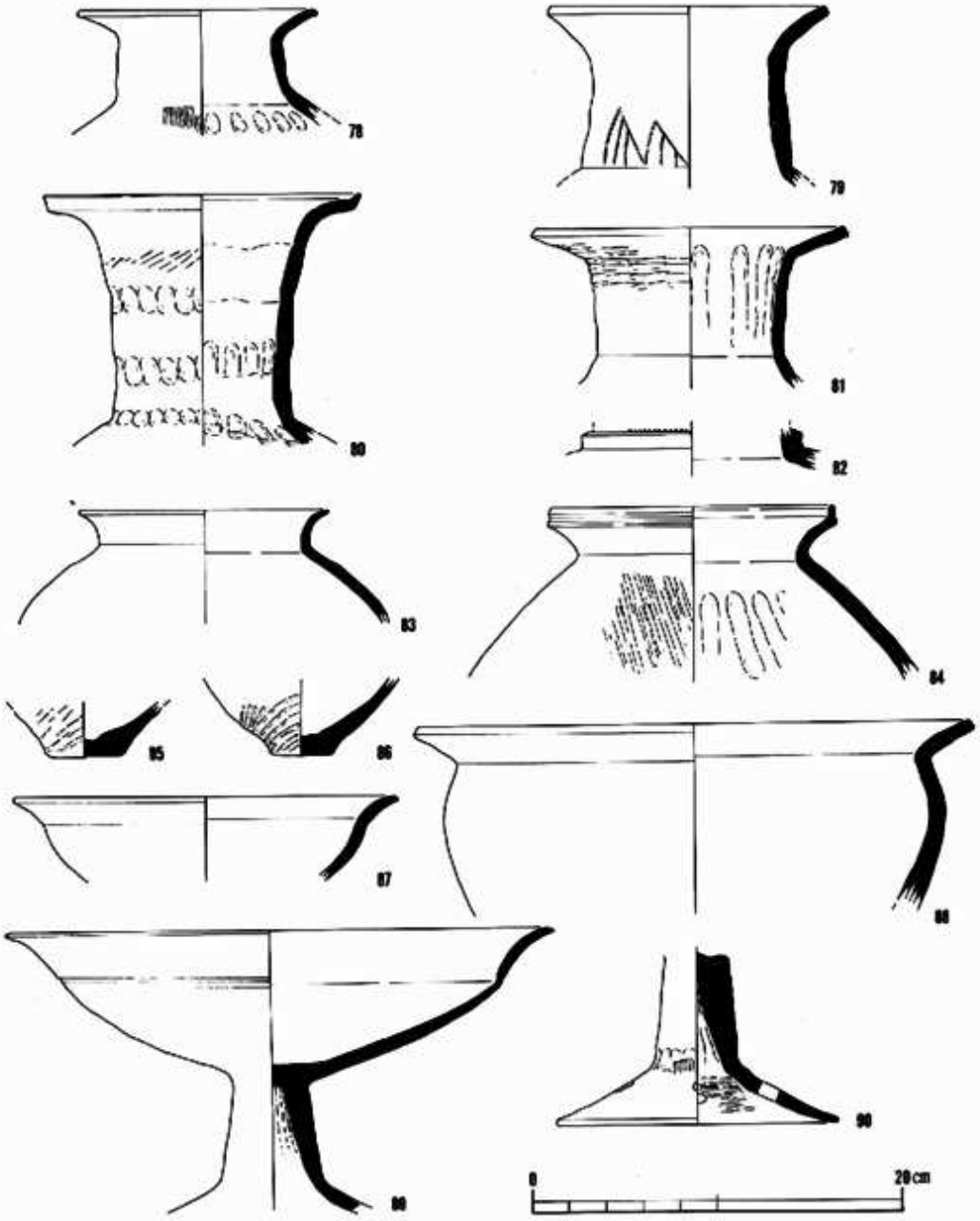
78・79は広口壺Dである。頸部がやや内傾し、口縁部が斜め上方にたちあがる。79には、頸部下方に鋸歯文が2箇所以上描かれている。80・81は長頸壺Cに分類され、外傾する頸部に水平に近く伸びる口縁部をもつ。80は口唇部を上方につまみあげる。長頸壺Cには、外面にすべ



1. 暗灰色 シルト質極細砂

第44図　土壙8

てタタキの痕跡がみられ、内面には粘土紐の接合痕と縦方向のユビナデあるいはユビオサエが多く認められる。



第45図　土壙8出土遺物

82は、全形をうかがうことはできないが、体部と頸部の境に突帯をもつ壺である。突帯上面に右方向から施文した細かい半截竹管文がみられる。

83は球形に近い体部をもち、口唇部を丸くおさめる甕である。84は上方につまみあげた口縁部外面に一本の凹線をもつ甕である。肩部外面には縦方向のミガキ、内面には上下方向のユビナデが施される。

87は鉢Bに分類される。体部はあまり強く張らない。88は直線的に伸びる口縁部をもつ鉢Cである。体部の器壁は非常に厚く、口唇部には面をもっている。他の鉢Cに比して体部の張りが強い。

89は口縁部と体部の境に一本の凹線をもつ高坏Cである。柱状部は中空であり、絞り目が残る。柱状部上方には、粘土の接合痕が観察され、細い柱状部に上から粘土帯を足したことが知られる。体部はやや歪む。90は脚部の破片である。裾部には4つの円孔をもち、内外面にはハケを施している。

数点の礫が埋土中より出土している。これらは、II区の土壙7などから出土している敲石とは異なり、敲打痕や研磨した面が認められないため、自然礫として扱い、掲載していない。

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
78	壺	(12.3)	(8.7)	—	—	—	口縁部1/2	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄
79	壺	14.7	10.3	—	—	—	3/4	2.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR8/2	灰白
80	壺	(17.0)	(9.4)	—	—	—	1/2	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/1	灰白
81	壺	(16.6)	(10.1)	—	—	—	1/2	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	灰白
82	壺	—	(10.6)	—	—	—	1/4	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
83	甕	(13.3)	(11.2)	—	—	—	端部1/4、他は1/2	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
84	甕	(15.1)	(12.3)	—	—	—	1/4	10YR7/3	にぶい黄橙	7.5YR7/4	にぶい橙
85	甕	—	—	—	3.8	—	底部完形	2.5Y2/1	黒	2.5YR7/6	橙
86	甕	—	—	—	3.0	—	底部完形	2.5Y8/1	灰白	10YR8/3	浅黄橙
87	鉢	(20.4)	(17.6)	(20.3)	—	—	口縁部1/4	2.5Y6/1	黄灰	10YR3/1	黒褐
88	鉢	(29.6)	(25.4)	(27.0)	—	—	1/2	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y8/3	淡黄
89	高坏	(29.0)	(23.8)	4.0	—	—	坏部・柱状部1/2	10YR8/2	灰白	10R6/8	赤橙
90	高坏	—	—	(3.5)	(15.0)	—	柱状部完形、裾部1/8	7.5YR8/4	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙

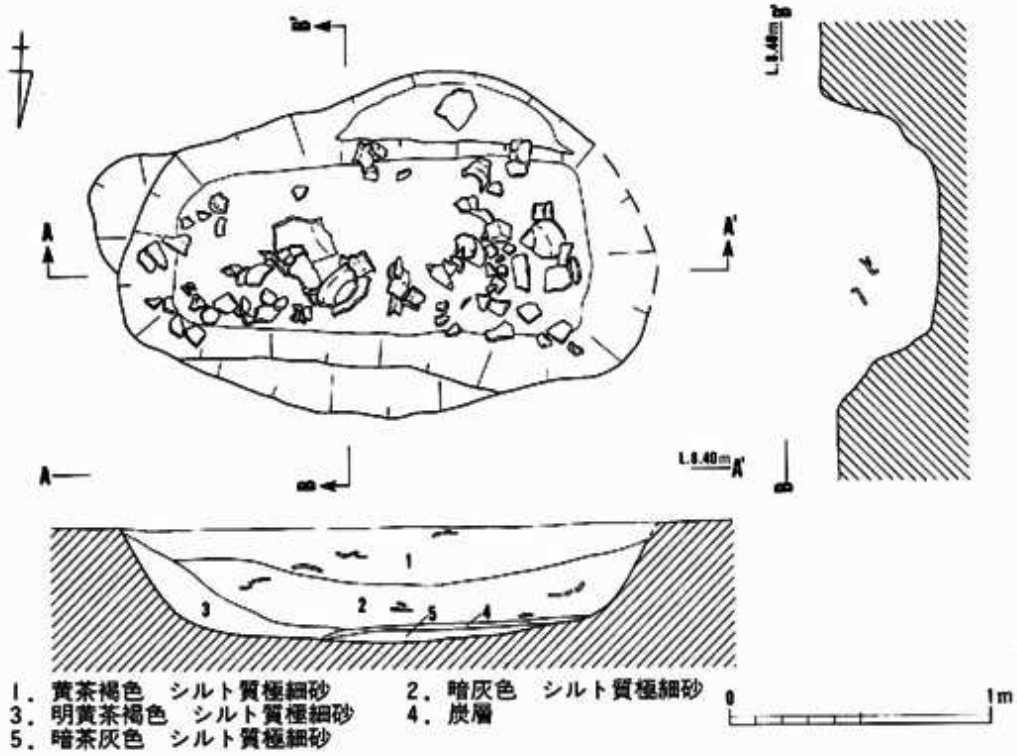
土壙 9

II区北端に集中する土壙群のひとつである。17層上面で検出された。西端を中世の溝17に切られている。長軸は東西方向にほぼ一致する。

平面形は、南辺の一部などに崩落が認められるが、長方形に近い楕円形とすることができよう。長軸の長さは2.1m、短軸の長さは約1.1mであり、検出面から壙底までの深さは約45cmである。約60°の角度で壁が落ち、平坦な壙底にいたる。壙底の平面形は長方形を呈している。その規模は長軸が約162cm、短軸の長さは両方では異なり、西側では65cm、東側では55cmである。

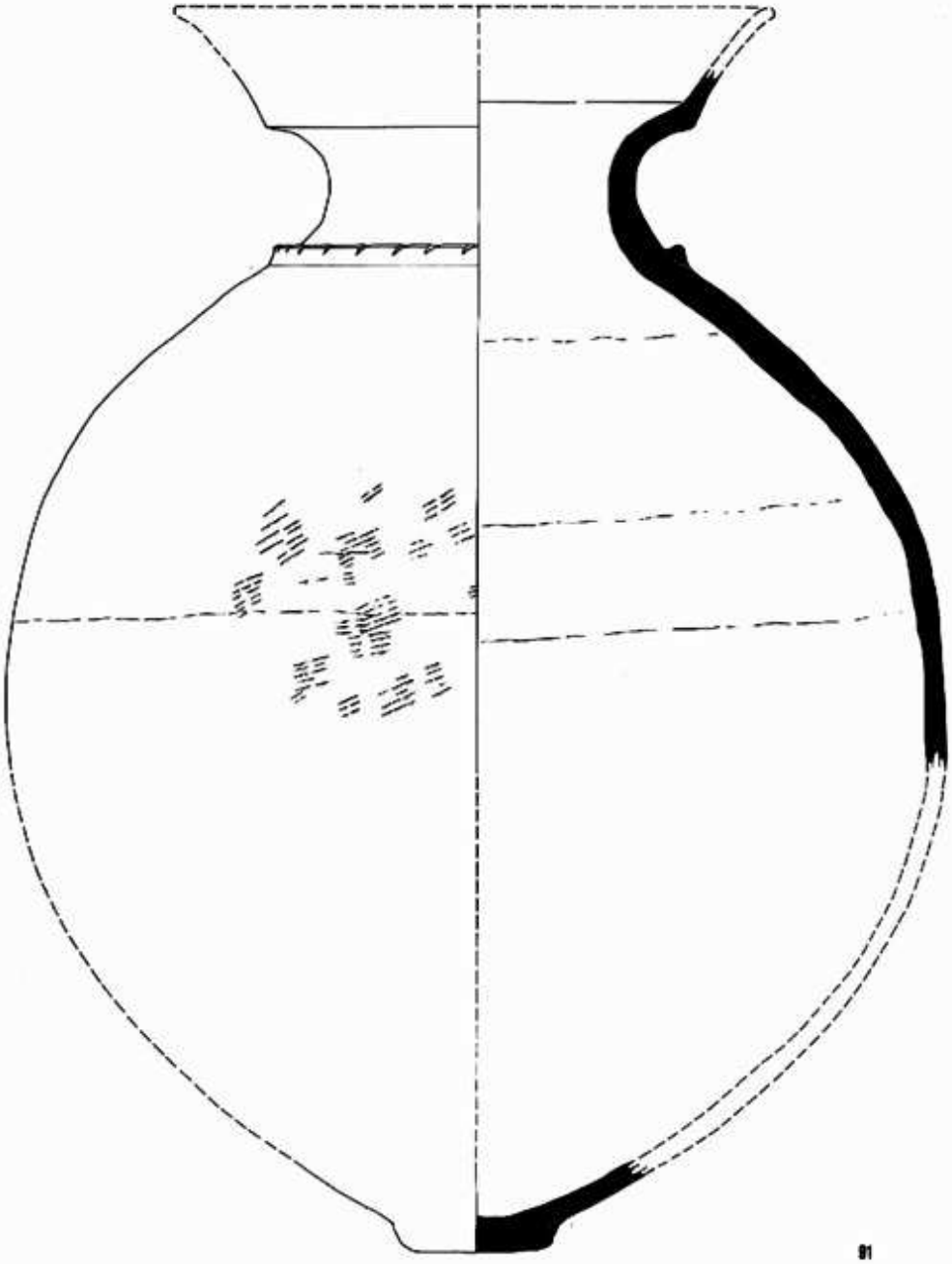
壙底からかぞえて2層めに、厚さ約3cmの炭層が認められた。この炭層は東端部には及んでいない。埋土中より、多量の完形に近い土器が出土したが、出土層位は1・2層に限られ、この炭層以下にはみられなかった。

土壙の形態、規模から木棺墓の可能性が考えられたが、土層断面の観察によっても木棺痕跡は確認できなかった。土器を多量に包含するなどの疑問点は残るが、ここでは土壙墓の可能性を考えておきたい。

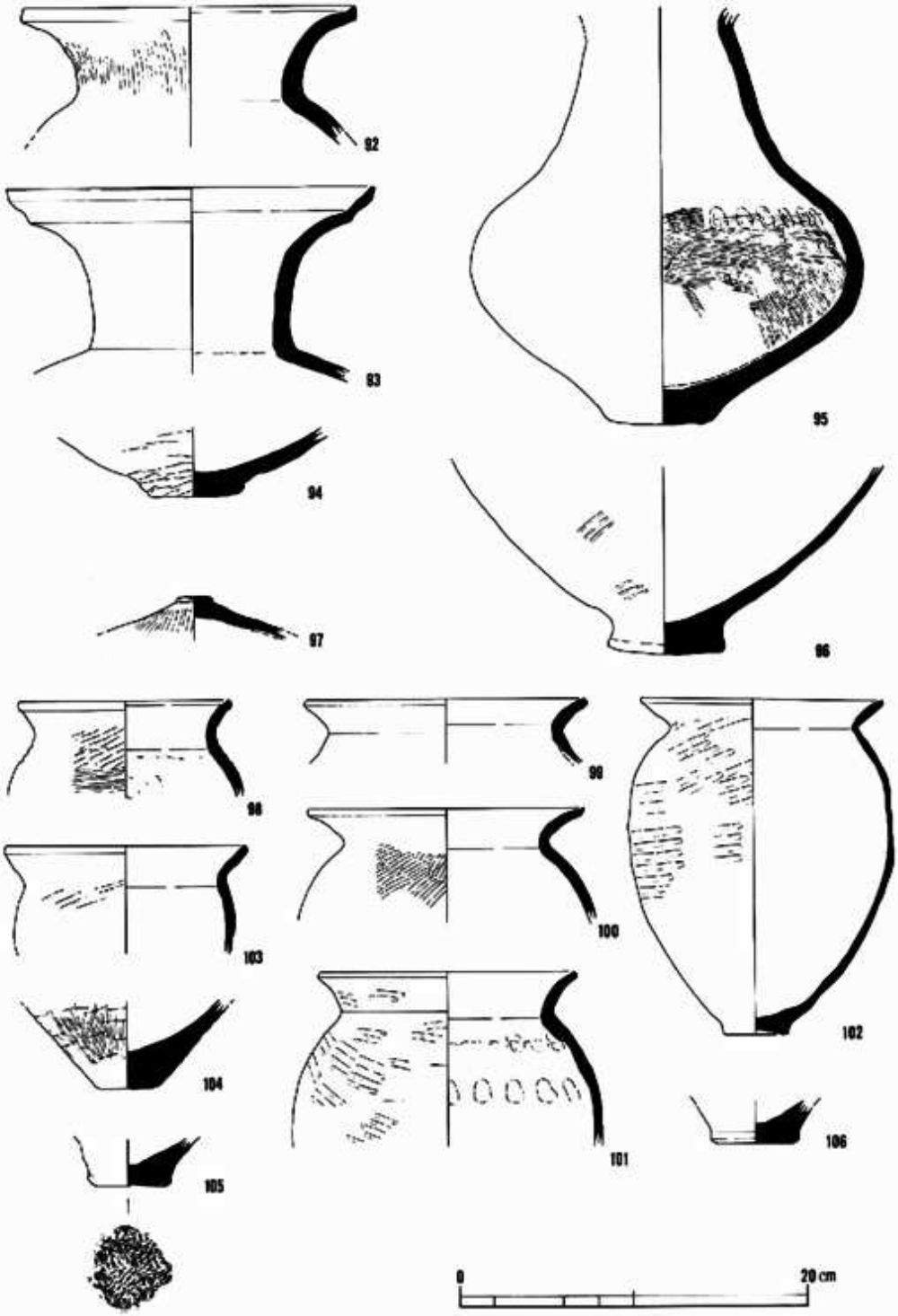


1．黄茶褐色　シルト質極細砂　　2．暗灰色　シルト質極細砂
3．明黄茶褐色　シルト質極細砂　　4．炭層
5．暗茶灰色　シルト質極細砂

第46図　土壙 9



第47図　土壙9出土遺物（1）

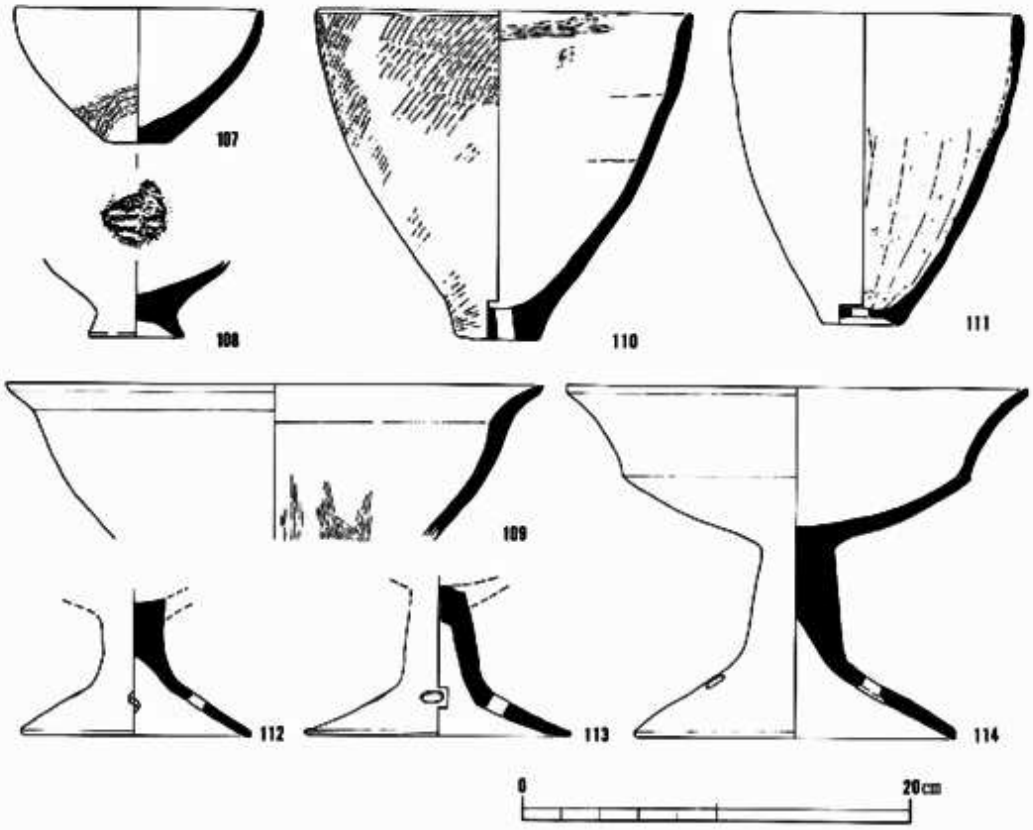


第48図　土壙９出土遺物（２）

出土遺物には、二重口縁壺、広口壺B・D、蓋、甕、鉢C・E・F・G、高坏Cがある。

二重口縁壺（91）は突出した底部と長胴の体部をもつ。肩部と頸部の境は明瞭ではないが、1本の突帯を巡らすことによって、それを強調している。突帯の上には刻目を施している。体部に右上がりのタタキが観察できる。93も二重口縁壺に含める。口縁部は、横方向のナデにより、凹線状に窪む。広口壺B（92）は、口唇部を上方につまみ上げ、頸部外面に縦方向のヘラミガキを施す。95は、広口壺Dである。厚い底部、扁球形の体部、内傾する頸部をもつ。肩部と頸部との境は不明瞭である。口縁部は斜め上方に開くものと思われる。葉脈の圧痕を残す底部（94）、強く突出する底部をもつもの（96）がある。

97は蓋である。頂部に小さなつまみをもち、外面には縦方向のヘラミガキが施されている。甕は、体部最大径が口縁部径をしのぐものが大半で、逆に小さいものは1点（98）のみである。口唇部は、横方向になでながら、上方につまみ上げているものが大半である。また、口縁部を叩き出しているものはみられない。体部外面の調整は、タタキののちに横方向のハケを施すもの（98）、縦方向に施すもの（104）がある。体部外面のタタキには右上がりのものが多いが、右下がりのもの（101）もある。また、100は幅1㎜前後の、細かいタタキが施されている。体



第49図　土壙9出土遺物（3）

部内面の調整は、磨滅の激しい99・102を除き、残存部分にヘラケズリは観察できない。甕の底部のうち、105は粗い編み物の圧痕が残り、106には葉脈の圧痕が観察できる。

鉢のうち、110は体部外面にタタキを施したのち、縦方向のハケメで仕上げている。また、111は体部内面に縦方向のヘラケズリを施しており、底部外面をヘラケズリして、薄く仕上げている。109は鉢Cである。体部・口縁部内面にハケメが認められる。

114は高坏Cである。坏部外傾指数は75.6である。坏部の容量は1.8ℓである。3点の高坏裾部には4箇所の穿孔がある。柱状部はすべて中実であるが、113は上部に1㎜程度の小孔が観察され、柱状部の成形にあたり、先細りの芯棒を用いた可能性がある。胎土の化学分析の結果、114は柱状部が裾部・坏部と異なる胎土を用いていたことが判明した。

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調	
		A	B	C	D	E		内面	外面
91	壺	—	16.5	49.0	8.6	—	口縁部3/4、体部1/2	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙
92	壺	(19.0)	(12.9)	—	—	—	1/4	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄
93	壺	(21.1)	(11.2)	—	—	—	1/4	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙
94	壺	—	—	—	5.1	—	底部完形	7.5YR8/2 灰白	10R6/4 にぶい赤橙
95	壺	—	8.8	22.6	6.0	—	口縁部を欠く	7.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白
96	壺	—	—	—	(6.5)	—	1/2	2.5Y4/2 暗灰黄	10R6/6 赤橙
97	壺	—	—	—	2.0	—	端部欠く	2.5Y7/1 灰白	5YR7/4 にぶい橙
98	甕	(12.0)	(10.2)	—	—	—	口縁部1/4	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/1 褐灰
99	甕	(15.8)	(13.3)	—	—	—	口縁部1/4	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙
100	甕	(15.8)	(11.6)	—	—	—	口縁部1/4	7.5YR8/4 浅黄橙	2.5YR6/8 橙
101	甕	(14.5)	(12.0)	(17.6)	—	—	1/2	2.5Y8/2 灰白	5YR8/3 淡橙
102	甕	13.8	10.8	15.2	3.5	19.3	ほぼ完形	10R6/8 赤橙	10R6/8 赤橙
103	甕	(13.6)	(11.5)	(12.6)	—	—	3/4	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白
104	甕	—	—	—	3.0	—	底部完形	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y5/1 黄灰
105	甕	—	—	—	3.9	—	底部完形	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白
106	甕	—	—	—	(4.4)	—	底部1/2	2.5YR7/6 橙	2.5Y7/1 灰白
107	鉢	(12.8)		—	(3.4)	6.9	口縁部・ 底部1/2	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白
108	鉢	—	—	—	(4.8)	—	底部1/2	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y7/6 橙
109	鉢	(27.5)	(24.8)	—	—	—	1/2	10YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白
110	鉢	19.2	—	—	4.3	16.8	ほぼ完形	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙
111	鉢	(14.3)	—	—	3.7	(15.7)	口縁部1/4、底部完形	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白
112	高坏	—	—	3.2	11.7	—	脚部のみ	7.5Y4/1 灰	2.5Y8/1 灰白
113	高坏	—	—	3.0	(13.1)	—	底部1/2	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙
114	高坏	(23.8)	(18.0)	3.7	16.5	17.9	坏部1/2、裾部2/3	2.5Y8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白